

2026年1月の地震活動の評価

1. 主な地震活動

- 1月 6 日に島根県東部でマグニチュード (M) 6.4 の地震が発生し、鳥取県境港市、日野町、江府町、島根県松江市、安来市で最大震度 5 強を観測した。この地震により、鳥取県西部で長周期地震動階級 4 を観測した。また、負傷者が出るなどの被害を生じた。この地震のほか、同日に M5.1 の地震が発生し、最大震度 5 弱を観測した。

2. 各領域別の地震活動

(1) 北海道地方

- 宗谷地方北部・南部で 1 月 12 日に M5.1、13 日に M5.2、28 日に M4.8 の地震が発生した。M5.2 の地震の発震機構は東西方向に圧力軸を持つ逆断層型、M4.8 の地震の発震機構は東北東－西南西方向に圧力軸を持つ逆断層型であった。これらの地震は地殻内で発生した地震である。これらの地震の震央付近では、12 日 01 時頃からややまとまった地震活動が見られ、1 月中に最大震度 1 以上を観測した地震が 41 回発生した。
- 1 月 13 日に択捉島南東沖の深さ約 30 km (CMT 解による) で M6.3 の地震が発生した。この地震の発震機構は北西－南東方向に圧力軸を持つ逆断層型であった。
- 1 月 15 日に釧路沖の深さ約 30 km で M5.6 の地震が発生した。この地震の発震機構は北西－南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。
- 1 月 27 日に根室半島南東沖の深さ約 40 km で M5.0 の地震が発生した。この地震の発震機構は南北方向に張力軸を持つ型で、太平洋プレート内部で発生した地震である。

(2) 東北地方

- 1 月 9 日 18 時 56 分、20 時 24 分に秋田県内陸北部のそれぞれ深さ約 5 km、約 10 km で M4.3、M4.2 の地震が発生した。これらの地震の発震機構は東西方向に圧力軸を持つ逆断層型、東西方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型で、地殻内で発生した地震である。
- 1 月 11 日に岩手県沿岸北部の深さ約 65 km で M5.1 の地震が発生した。この地震の発震機構は太平洋プレートが沈み込む方向に圧力軸を持つ型で、太平洋プレート内部（二重地震面の上面）で発生した地震である。
- 1 月 17 日、21 日に青森県東方沖のそれぞれ深さ約 35 km、約 60 km で M5.4、M5.3 の地震が発生した。これらの地震の発震機構は西北西－東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。また、22 日には深さ約 45 km で M5.5 の地震が発生した。この地震の発震機構は南北方向に張力軸を持つ正断層型で、太平洋プレート内部で発生した地震である。これらの地震の震央周辺では、2025 年 12 月 8 日に M7.5 の地震が発

生して以降、地震活動が継続しており、1月中に最大震度1以上を観測した地震が10回発生した。特に2025年12月12日のM6.9の地震の震源付近で活発に推移している。

地震活動域は、M7.5の地震の震央からおよそ東方向に100km、南北方向に50km程度広がっている。GNS観測、遠地地震波及びS-netの水圧データを用いた解析から推定されるM7.5の震源断層も同程度の範囲に広がっている。さらに、M7.5の地震の発生以降、地震活動域よりも東の領域で浅部超低周波地震及び微動が発生している。

GNS観測によると、M7.5の地震の後、およそ2か月間で、東通観測点で東方向に約2cm変動するなど、青森県を中心に余効変動と考えられる水平変動が観測されている。余効変動から推定される余効すべりは、M7.5の地震の震源断層を含む領域で継続していると考えられる。

- 1月28日に三陸沖の深さ約20kmでM5.2の地震が発生した。この地震の発震機構は西北西-東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。

今回の地震の北には12月8日の青森県東方沖(M7.5)の地震活動が、南東側には11月9日の三陸沖(M6.9)の地震活動が見られる。

(3) 関東・中部地方

- 1月9日に千葉県東方沖(※1)の深さ約30kmでM4.6の地震が発生した。この地震の発震機構は南北方向に圧力軸を持つ逆断層型で、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。
- 1月10日に硫黄島近海でM5.5の地震が発生した。
- 1月13日に石川県能登地方の深さ約10kmでM4.3の地震が発生した。この地震は地殻内で発生した地震である。
- 1月15日14時40分、14時48分に岐阜県飛騨地方(※2)のごく浅い場所で、それぞれM4.8、M5.2の地震が発生した。これらの地震の発震機構は北西-南東方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型で、地殻内で発生した地震である。
- 1月22日に硫黄島近海の深さ約15km(CMT解による)でM6.5の地震が発生した。この地震の発震機構は北西-南東方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型であった。
- 1月24日に茨城県北部の深さ約5kmでM4.5の地震が発生した。この地震の発震機構は北東-南西方向に張力軸を持つ正断層型で、地殻内で発生した地震である。
- 1月29日に千葉県南部の深さ約25kmでM4.5の地震が発生した。この地震はフィリピン海プレート内部で発生した地震である。

(4) 近畿・中国・四国地方

- 1月6日10時18分に島根県東部の深さ約10kmでM6.4の地震が発生した。この地震の発震機構は西北西-東南東方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型で、地殻内で発生した地震である。また、M6.4の地震発生後の6日10時28分にM5.1、10時37分にM5.5の地震が発生するなど、M5.0を超える地震が発生したほか、1月6日から31日までに震度1以上を観測した地震が58回発生するなど、東西10kmにわたって地震活動が活発な状態が継続している。

G N S S 観測によると、この地震に伴い、わずかな地殻変動が観測された。今回の地震の震央付近では、5日から M3.3 の地震などの微小地震活動が見られた。

この地震の発震機構や地震活動の分布、G N S S 観測の解析結果から推定される震源断層は、東北東－西南西方向に延びる長さ約 10 km の右横ずれ断層であった。

今回の地震は、地震調査委員会の「中国地域の活断層の長期評価（第一版）」の北部区域内で発生した。この区域は、活断層は少ないが、地震活動は比較的活発な地域として評価している。なお、G N S S 観測によると、山陰地方にはひずみ集中帯と呼ばれる領域が存在している。

今回の地震の周辺では、1989 年 10 月に鳥取県西部で発生した M5.3 の地震の 6 日後に M5.5 の地震が発生した。また、1990 年 11 月に鳥取県西部で発生した M5.1 の地震の 1 分後に M4.8 の地震が、2 日後に M5.2 の地震が、10 日後に M5.1 の地震が発生するなど続発した事例がある。

（5）九州・沖縄地方

目立った活動はなかった。

（6）南海トラフ周辺

- 南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まつたと考えられる特段の変化は観測されていない。

※1：気象庁が情報発表に用いた震央地名は「千葉県北東部」である。

※2：14 時 40 分に発生した M4.8 の地震について、気象庁が情報発表に用いた震央地名は「富山県東部」である。

注：G N S S とは、G P S をはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称である。

2026年1月の地震活動の評価についての補足説明

令和8年2月10日
地震調査委員会

1. 主な地震活動について

2026年1月の日本及びその周辺域におけるマグニチュード(M)別の地震の発生状況は以下のとおり。

M4.0以上及びM5.0以上の地震の発生は、それぞれ137回(12月は170回)及び25回(12月は28回)であった。また、M6.0以上の地震の発生は3回(12月は6回)であった。

(参考) M4.0以上の月回数 81回 (69-104回)

(1998-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)

M5.0以上の月回数 10回 (7-14回)

(1973-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)

M6.0以上の月回数 1回 (0-2回)

(1919-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)

M6.0以上の年回数 16回 (12-21回)

(1919-2017年の年回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)

2025年1月以降2025年12月末までの間、主な地震活動として評価文に取り上げたものは次のものがあった。

— 日向灘	2025年1月13日	M6.6 (深さ約35km)
— 福島県会津	2025年1月23日	M5.2 (深さ約5km)
— 長野県北部	2025年4月18日	M5.1 (深さ約15km)
— トカラ列島近海	2025年6月30日	M5.3
— トカラ列島近海	2025年7月2日	M5.1
— トカラ列島近海	2025年7月2日	M5.6
— トカラ列島近海	2025年7月3日	M5.5 (深さ約10km)
— トカラ列島近海	2025年7月5日	M5.4
— トカラ列島近海	2025年7月6日	M4.9
— トカラ列島近海	2025年7月6日	M5.5
— トカラ列島近海	2025年7月7日	M5.1
— ロシア、カムチャツカ半島東方沖	2025年7月30日	M8.8
— トカラ列島近海	2025年9月17日	M4.7
— 根室半島南東沖	2025年10月25日	M5.8 (深さ約40km)
— 三陸沖	2025年11月9日	M6.9 (深さ約15km)
— 熊本県阿蘇地方	2025年11月25日	M5.8 (深さ約10km)
— 青森県東方沖	2025年12月8日	M7.5 (深さ約55km)

2. 各領域別の地震活動

(1) 北海道地方

北海道地方では特に補足する事項はない。

(2) 東北地方

東北地方では特に補足する事項はない。

(3) 関東・中部地方

— G N S S 観測によると、2022年初頭から、静岡県西部から愛知県東部にかけて、それまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されている。これは、渥美半島周辺から浜名湖周辺にかけてのフィリピン海プレートと陸のプレートの境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。すべりの中心は渥美半島周辺から浜名湖周辺に移動している。

— 「1月13日に石川県能登地方の深さ約10kmでM4.3の地震が発生した。この地震は地殻内で発生した地震である。」：

2020年12月以降の一連の地震活動については、『「令和6年能登半島地震」の最近の地震活動（令和8年1月14日公表）』を参照。

(4) 近畿・中国・四国地方

— 四国西部で12月31日から1月8日にかけて、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界付近で深部低周波地震（微動）を観測している。ひずみ、G N S S 観測及び傾斜データによると、その周辺では深部低周波地震（微動）とほぼ同期してわずかな地殻変動を観測している。これらは、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界深部における短期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。

(5) 九州・沖縄地方

九州・沖縄地方では特に補足する事項はない。

(6) 南海トラフ周辺

— 「南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていない。」：

（なお、これは、2月6日に開催された定例の南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会における見解（参考参照）と同様である。）

（参考）南海トラフ地震関連解説情報について—最近の南海トラフ周辺の地殻活動—（令和8年2月6日気象庁地震火山部）

「現在のところ、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時（注）と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。

（注）南海トラフ沿いの大規模地震（M8からM9クラス）は、「平常時」においても今後30年以内に発生する確率は高い（詳細は「南海トラフの地震活動の長期評価（第二版一部改訂）」参照）と評価されており、昭和東南海地震・昭和南海地震の発生から約80年が経過していることから切迫性の高い状態です。

1. 地震の観測状況

（顕著な地震活動に関係する現象）

南海トラフ周辺では、特に目立った地震活動はありませんでした。

（ゆっくりすべりに関係する現象）

プレート境界付近を震源とする深部低周波地震（微動）のうち、主なものは以下のとおりです。

（1）四国西部：12月31日から1月8日

- (2) 四国東部：1月21日から1月29日
(3) 紀伊半島中部から紀伊半島西部：1月26日、1月31日

2. 地殻変動の観測状況

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)から(3)の深部低周波地震(微動)とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計でわずかな地殻変動を観測しました。周辺の傾斜データでも、わずかな変化が見られました。また、上記(1)の期間に同地域及びその周辺のGNSSのデータでも、わずかな地殻変動を観測しました。さらに、顕著な深部低周波地震(微動)活動は観測されていませんが、以下のとおり、複数のひずみ計でわずかな地殻変動を観測しました。周辺の傾斜データでも、わずかな変化が見されました。

(4) 東海：1月11日から1月17日

GNSS観測によると、2022年初頭から、静岡県西部から愛知県東部にかけて、それまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されています。

(長期的な地殻変動)

GNSS観測等によると、御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺では長期的な沈降傾向が継続しています。

3. 地殻活動の評価

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)から(3)の深部低周波地震(微動)と地殻変動、及び上記(4)の地殻変動は、想定震源域のプレート境界深部において発生した短期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。

2022年初頭からの静岡県西部から愛知県東部にかけての地殻変動は、渥美半島周辺から浜名湖周辺にかけてのプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。この長期的ゆっくりすべりは、すべりの中心が渥美半島周辺から浜名湖周辺に移動しています。

これらの深部低周波地震(微動)、短期的ゆっくりすべり、及び長期的ゆっくりすべりは、それぞれ、従来からも繰り返し観測されてきた現象です。

(長期的な地殻変動)

御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺で見られる長期的な沈降傾向はフィリピン海プレートの沈み込みに伴うもので、その傾向に大きな変化はありません。

上記観測結果を総合的に判断すると、南海トラフ地震の想定震源域ではプレート境界の固着状況に特段の変化を示すようなデータは得られておらず、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。」

参考1 「地震活動の評価」において掲載する地震活動の目安

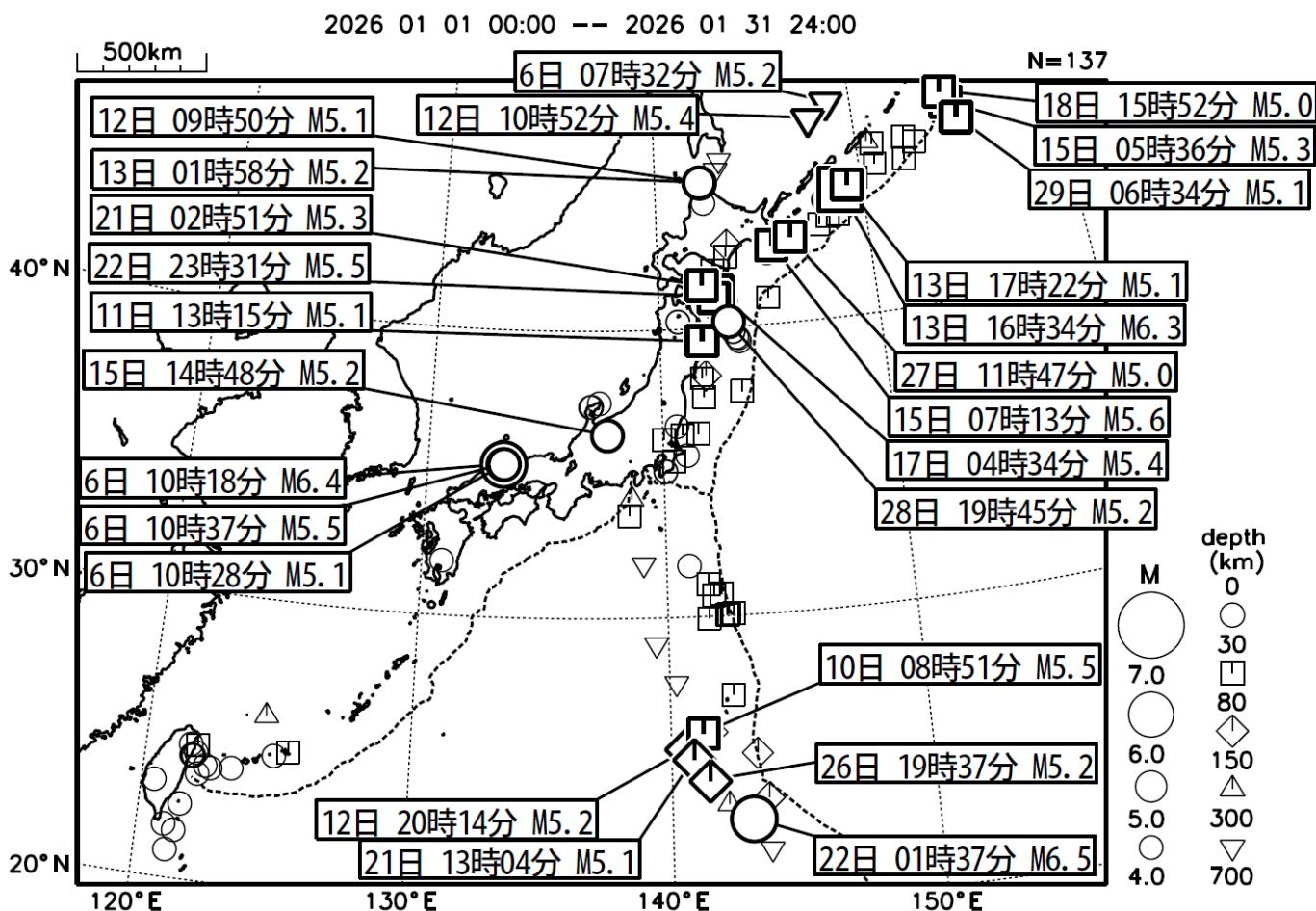
- ①M6.0以上または最大震度が4以上のもの。②内陸M4.5以上かつ最大震度が3以上のもの。
③海域M5.0以上かつ最大震度が3以上のもの。

参考2 「地震活動の評価についての補足説明」の記述の目安

- 1 「地震活動の評価」に記述された地震活動に係わる参考事項。
- 2 「主な地震活動」として記述された地震活動（一年程度以内）に関連する活動。
- 3 評価作業をしたものの、活動が顕著でなく、かつ、通常の活動の範囲内であることから、「地震活動の評価」に記述しなかった活動の状況。
- 4 一連でM6.0以上が推定されたゆっくりすべりとそれに伴って発生した低周波地震(微動)。

2026年1月の地震活動の評価に関する資料

2026年1月の全国の地震活動 (マグニチュード4.0以上)



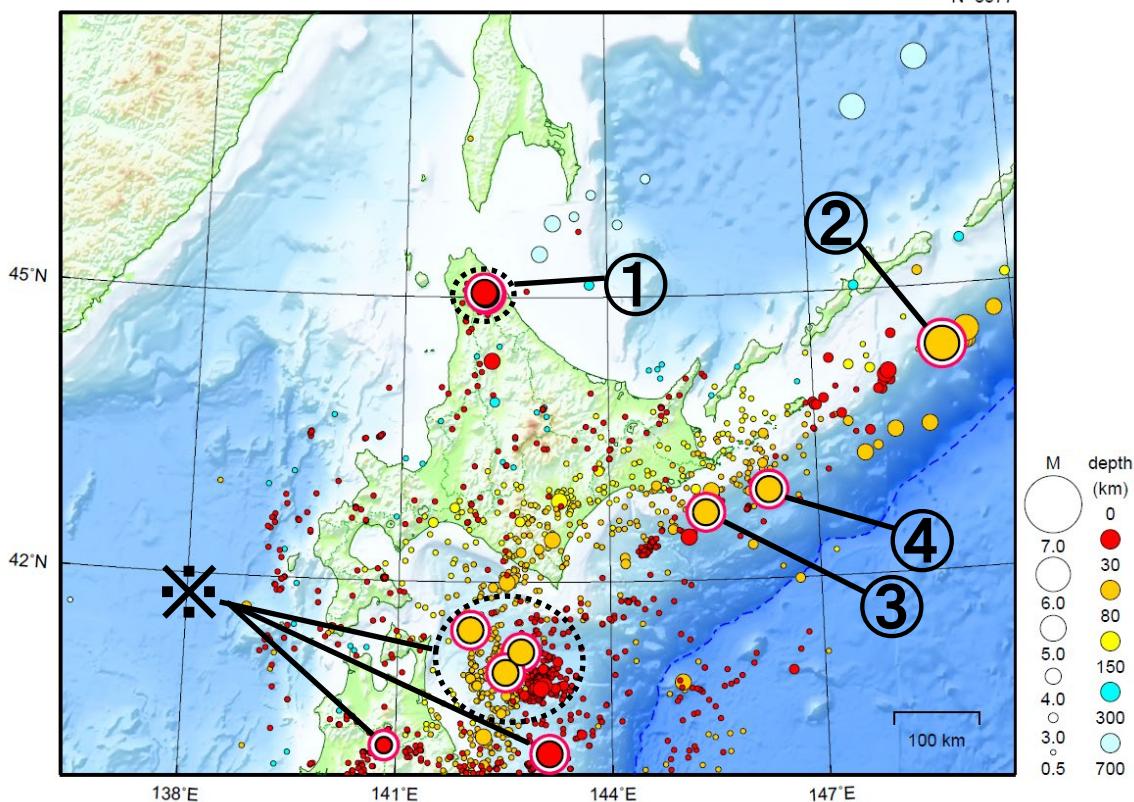
- 1月6日10時18分に島根県東部でM6.4の地震（最大震度5強）が発生した。
- 1月6日10時28分に島根県東部でM5.1の地震（最大震度5弱）が発生した。
- 1月13日16時34分に択捉島南東沖でM6.3（最大震度2）が発生した。
- 1月22日01時37分に硫黄島近海でM6.5（震度1以上を観測した地点はなし）が発生した。

[図中に日時分、マグニチュードを付した地震はM5.0以上の地震、またはM4.0以上で最大震度5弱以上を観測した地震である。
また、上に表記した地震はM6.0以上、またはM4.0以上で最大震度5弱以上を観測した地震である。]

北海道地方

2026/01/01 00:00 ~ 2026/01/31 24:00

N=3577



地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOPO30 及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02v2 を使用

- ① 宗谷地方北部・南部では、1月12日から31日までに震度1以上を観測する地震が41回（震度3：5回、震度2：12回、震度1：24回）発生した。このうち最大規模の地震は、13日に宗谷地方北部^(注)で発生したM5.2の地震（最大震度3）である。

（注）情報発表に用いた震央地名は【宗谷地方南部】である。

- ② 1月13日に択捉島南東沖でM6.3の地震（最大震度2）が発生した。
③ 1月15日に釧路沖でM5.6の地震（最大震度3）が発生した。
④ 1月27日に根室半島南東沖でM5.0の地震（最大震度3）が発生した。

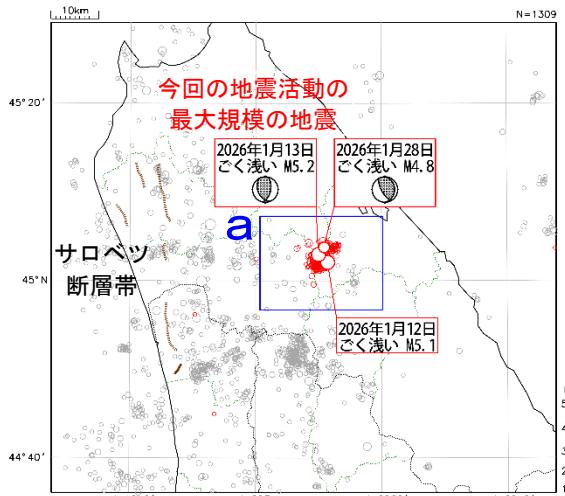
※で示した地震については東北地方の資料を参照。

[上述の地震はM6.0以上または最大震度4以上、陸域でM4.5以上かつ最大震度3以上、海域でM5.0以上かつ最大震度3以上、その他、注目すべき活動のいずれかに該当する地震。]

1月12日からの宗谷地方北部・南部の地震活動

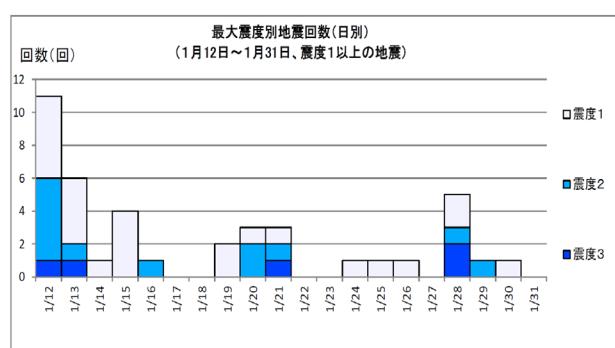
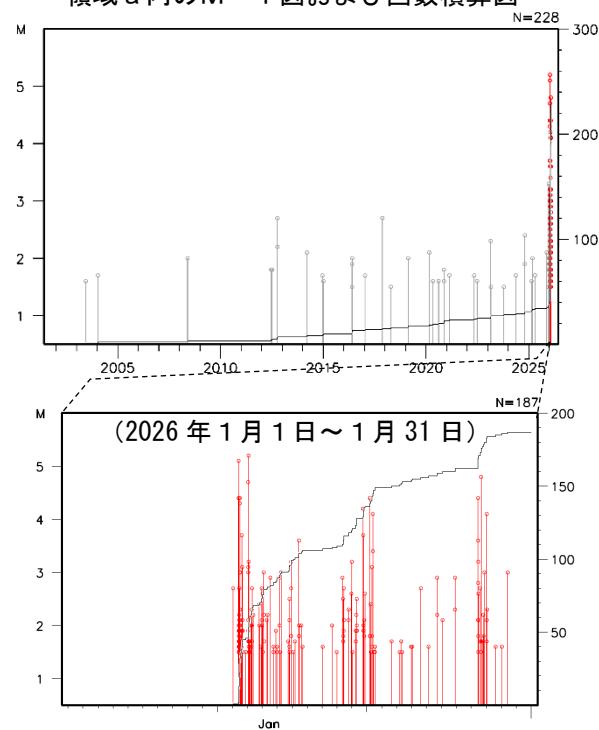
震央分布図

(2001年10月1日～2026年1月31日、
深さ0～30km、M≥1.5)
2026年1月に発生した地震を赤色で表示
図中の発震機構はCMT解



震央分布図中の茶線は、地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示す。

領域a内のM-T図および回数積算図



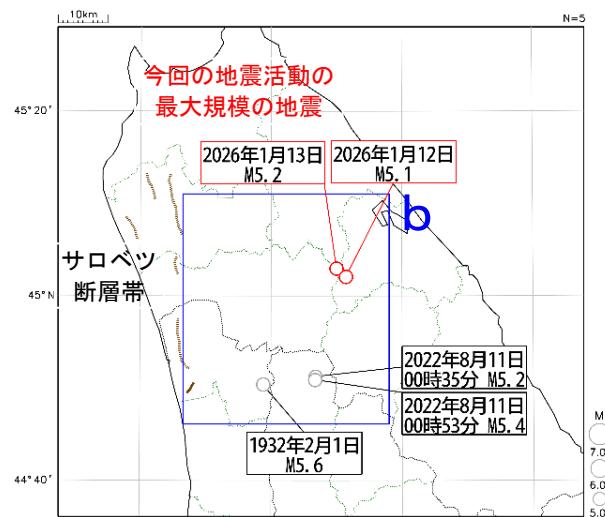
宗谷地方北部・南部では、2026年1月12日01時頃からやまとまった活動が見られ、31日までに、震度1以上を観測した地震が41回（震度3：5回、震度2：12回、震度1：24回）発生した。これらの地震は地殻内で発生した。このうち最大規模の地震は13日01時58分に発生したM5.2の地震（最大震度3）である。この地震の発震機構（CMT解）は東西方に圧力軸を持つ逆断層型である。

2001年10月以降の活動をみると、今回の地震の震央付近（領域a）では、M3程度の地震がまれに発生しているが、M5.0以上の地震は発生していなかった。

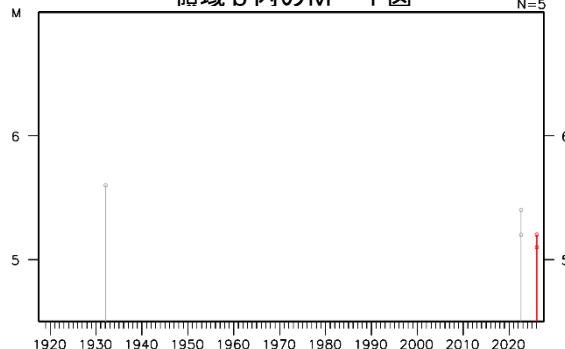
1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域b）では、M5.0以上の地震が今回の活動を除いて3回発生している。2022年8月11日に発生したM5.4の地震（最大震度5強）により、住家被害2棟の被害が生じた（被害は総務省消防庁による）。

震央分布図

(1919年1月1日～2026年1月31日、
深さ0～60km、M≥5.0)



領域b内のM-T図

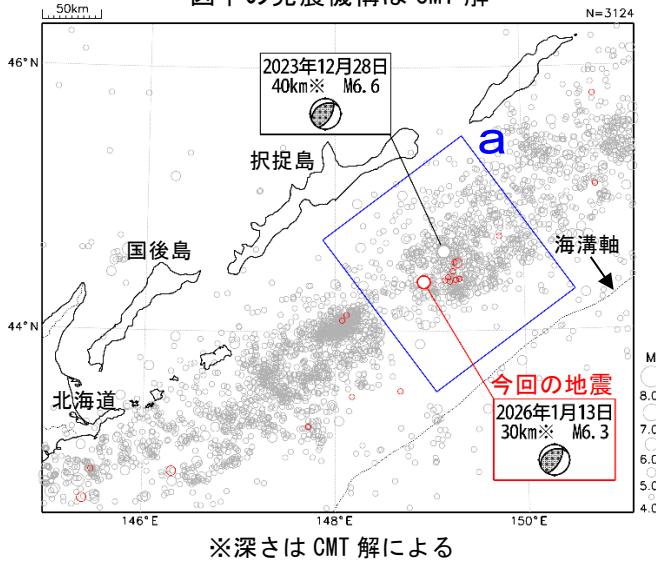


1月13日 択捉島南東沖の地震

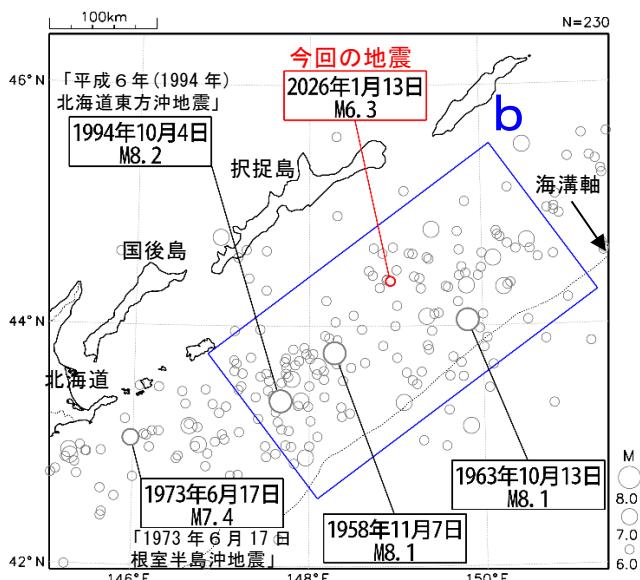
震央分布図

(2001年10月1日～2026年1月31日、
深さ0～100km、M≥4.0)

2026年1月に発生した地震を赤色で表示
図中の発震機構はCMT解



震央分布図
(1919年1月1日～2026年1月31日、
深さ0～100km、M≥6.0)
2026年1月の地震を赤色で表示

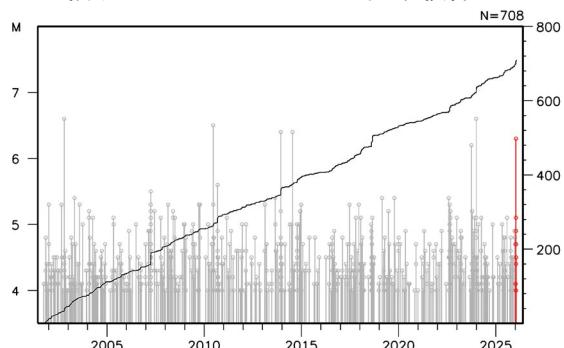


2026年1月13日16時34分に择捉島南東沖の深さ30km(CMT解による)でM6.3の地震(最大震度2)が発生した。この地震の発震機構(CMT解)は北西-南東方向に圧力軸を持つ逆断層型である。

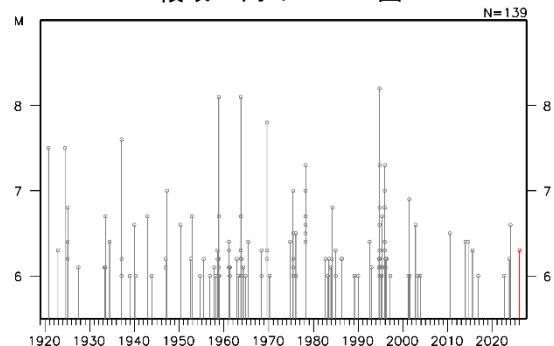
2001年10月以降の活動をみると、今回の地震の震央付近(領域a)では、M6.0以上の地震が今回の地震を除いて6回発生しており、直近では、2023年12月28日にM6.6の地震(最大震度3)が発生している。

1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺(領域b)では、M8.0以上の地震が3回発生している。1994年10月4日に発生した「平成6年(1994年)北海道東方沖地震」(M8.2、最大震度6)では、根室市花咲で168cm(平常潮位からの最大の高さ)の津波を観測するなど、北海道から沖縄県にかけて津波を観測したほか、重軽傷者436人、住家被害4,586棟などの被害が生じた(被害は「日本被害地震総覧」による)。

領域a内のM-T図及び回数積算図



領域b内のM-T図



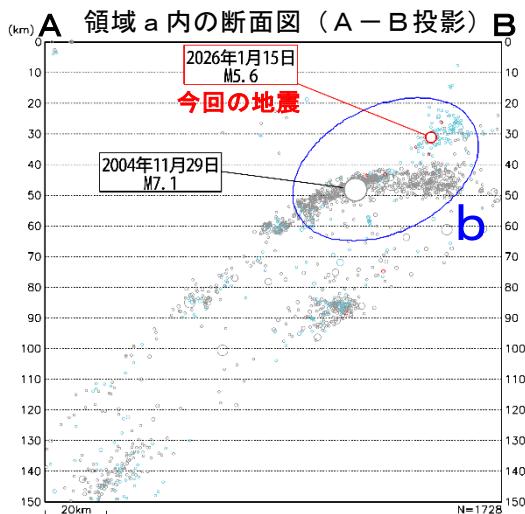
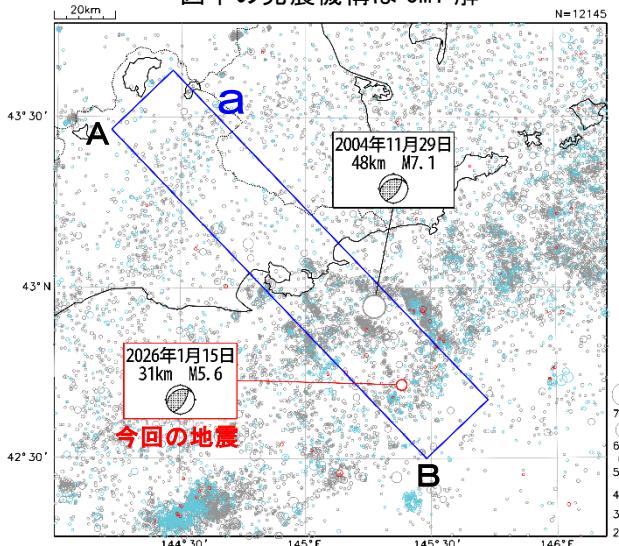
1月15日 釧路沖の地震

震央分布図

(2001年10月1日～2026年1月31日、
深さ0～150km、M≥2.0)

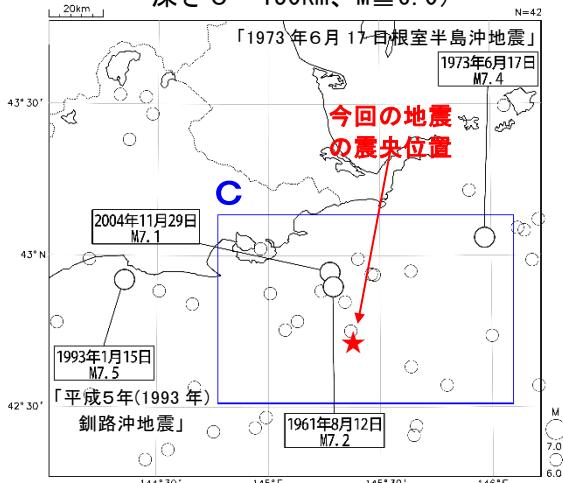
2020年9月以降に発生した地震を水色、
2026年1月に発生した地震を赤色で表示

図中の発震機構はCMT解



震央分布図

(1919年1月1日～2026年1月31日、
深さ0～150km、M≥6.0)

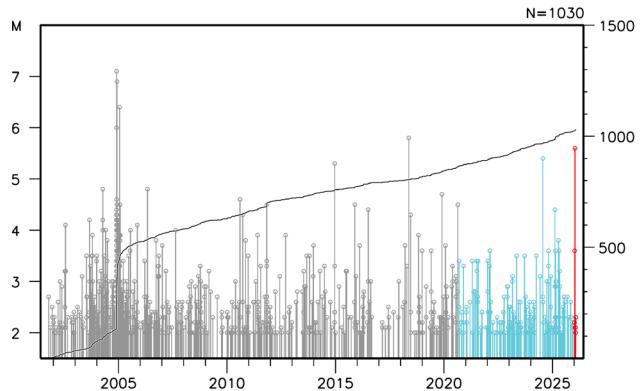


2026年1月15日07時13分に釧路沖の深さ31kmでM5.6の地震（最大震度3）が発生した。発震機構（CMT解）は北西-南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。

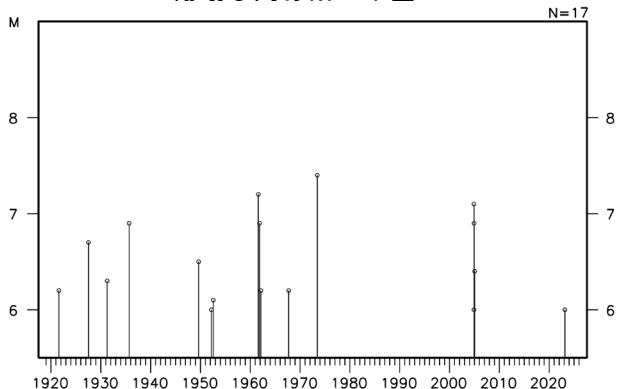
2001年10月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近（領域b）では、M5.0以上の地震が時々発生している。2004年11月29日に発生したM7.1（最大震度5強）の地震では、負傷者52人、住家被害5棟などの被害が生じ、根室市花咲で最大の高さ12cmの津波を観測するなど、北海道太平洋沿岸東部で小さな津波を観測した（被害は総務省消防庁による）。

1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域c）では、M7.0以上の地震が3回発生している。「1973年6月17日根室半島沖地震」（M7.4、最大震度5）では、根室・釧路地方で負傷者26人などの被害が生じ、根室市花咲で最大の高さ280cm（平常潮位からの最大の高さ）の津波を観測するなど、北海道から四国地方にかけての太平洋沿岸で津波を観測した（被害は「日本被害地震総覧」による）。

領域b内のM-T図及び回数積算図

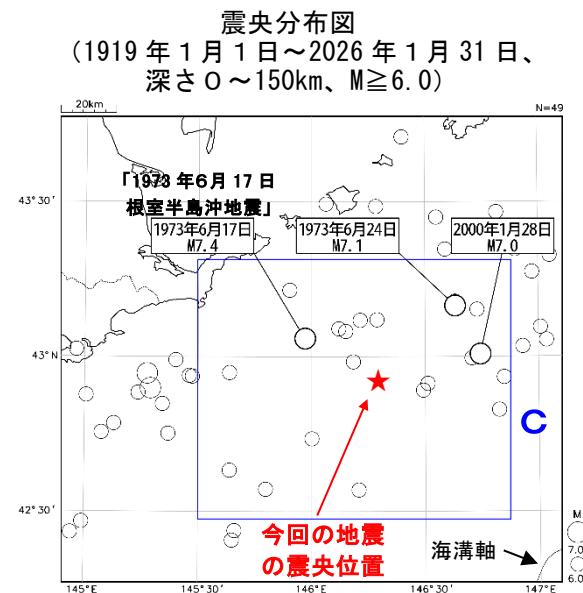
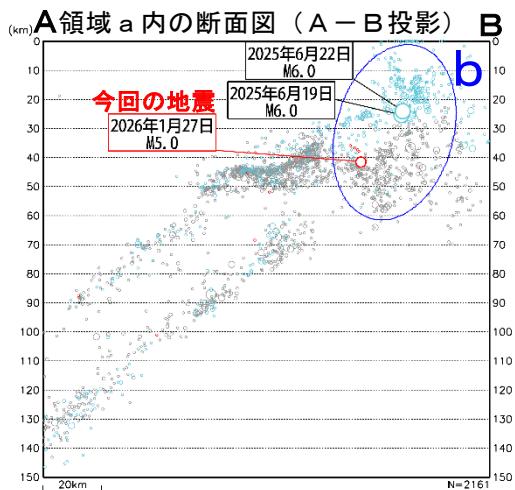
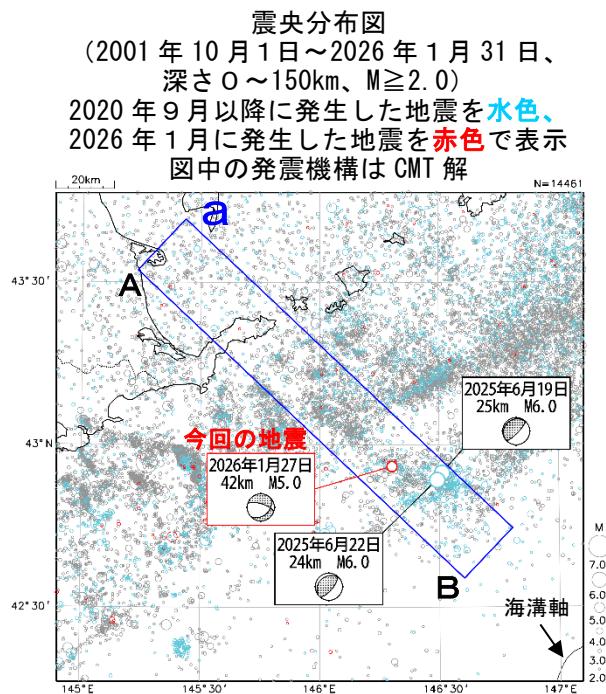


領域c内のM-T図



気象庁作成

1月27日 根室半島南東沖の地震

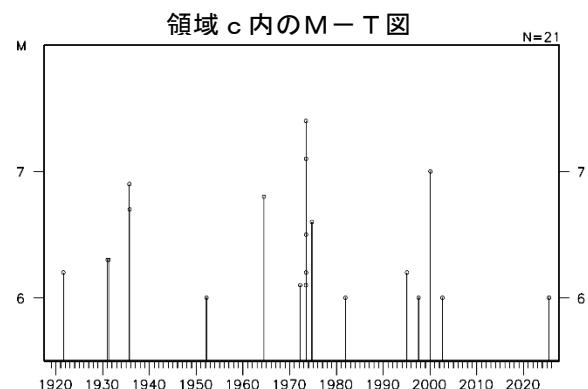
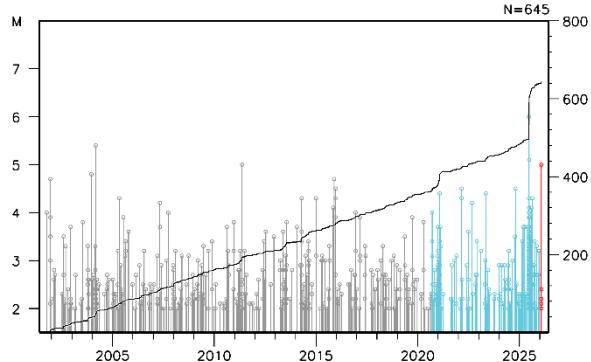


2026年1月27日11時47分に根室半島南東沖の深さ42kmでM5.0の地震（最大震度3）が発生した。この地震は、太平洋プレート内部で発生した。発震機構（CMT解）は南北方向に張力軸を持つ型である。

2001年10月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近（領域b）では、M5.0以上の地震が今回の地震を除いて4回発生している。最大規模の地震は2025年6月19日に発生したM6.0の地震（最大震度4）と、同年6月22日に発生したM6.0の地震（最大震度3）である。

1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域c）では、M7.0以上の地震が3回発生している。「1973年6月17日根室半島沖地震」(M7.4、最大震度5)では、根室・釧路地方で負傷者26人などの被害が生じ、根室市花咲で最大の高さ280cm(平常潮位からの最大の高さ)の津波を観測するなど、北海道から四国地方にかけての太平洋沿岸で津波を観測した（被害は「日本被害地震総覧」による）。

領域b内のM-T図及び回数積算図



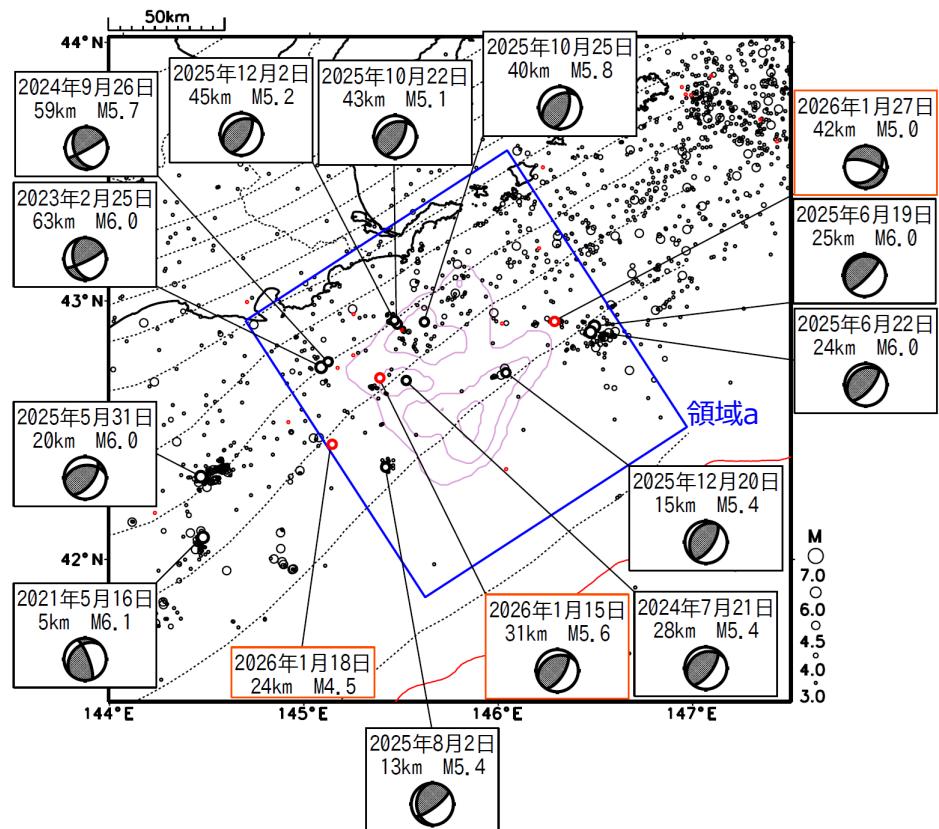
1月15日釧路沖の地震・27日根室半島南東沖の地震（1973年根室半島沖地震の地震時すべり分布）

震央分布図

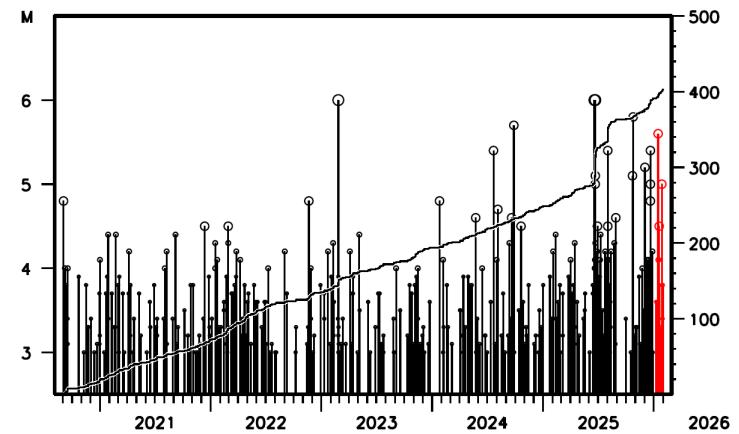
2020年9月1日（S-net活用）～2026年1月31日、深さ0～150km、M \geq 3.0

発震機構はCMT解を示す

2026年1月の地震を赤色で表示



領域a内のM-T図及び回数積算図



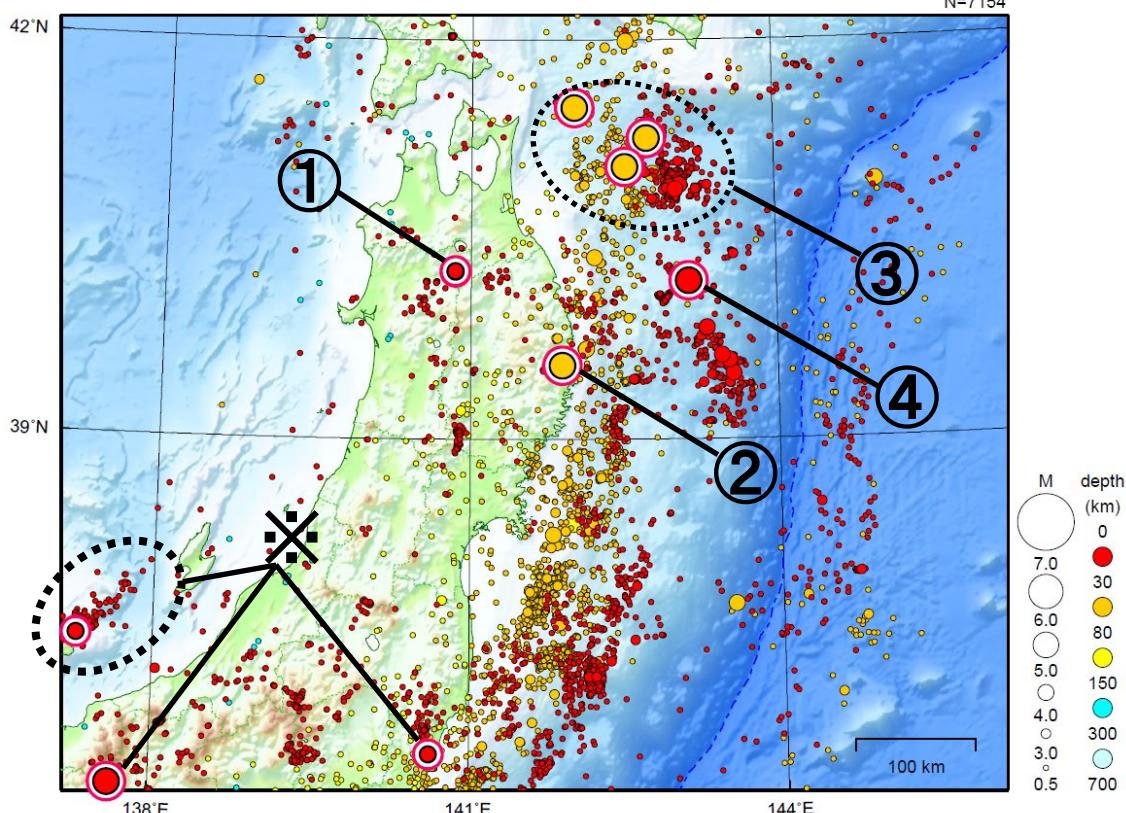
・薄紫色のセンターは、1973年根室半島沖地震の地震時すべり分布(山中(2005))を示す。

・黒色破線は、太平洋プレート上面モデルの等深線 (Kita et al., 2010, Nakajima and Hasegawa, 2006) を示す (10km間隔)。

東北地方

2026/01/01 00:00 ~ 2026/01/31 24:00

N=7154



地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOP030 及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02v2 を使用

- ① 1月9日18時56分に秋田県内陸北部でM4.3の地震（最大震度4）、同日20時24分にM4.2の地震（最大震度4）が発生した。
- ② 1月11日に岩手県沿岸北部でM5.1の地震（最大震度4）が発生した。
- ③ 1月17日に青森県東方沖でM5.4の地震（最大震度3）、21日にM5.3の地震（最大震度3）、22日にM5.5の地震（最大震度3）が発生した。青森県東方沖では、1月中に震度1以上を観測した地震が10回（震度3：3回、震度2：2回、震度1：5回）発生した。
- ④ 1月28日に三陸沖でM5.2の地震（最大震度3）が発生した。

※示した地震については関東・中部地方の資料を参照。

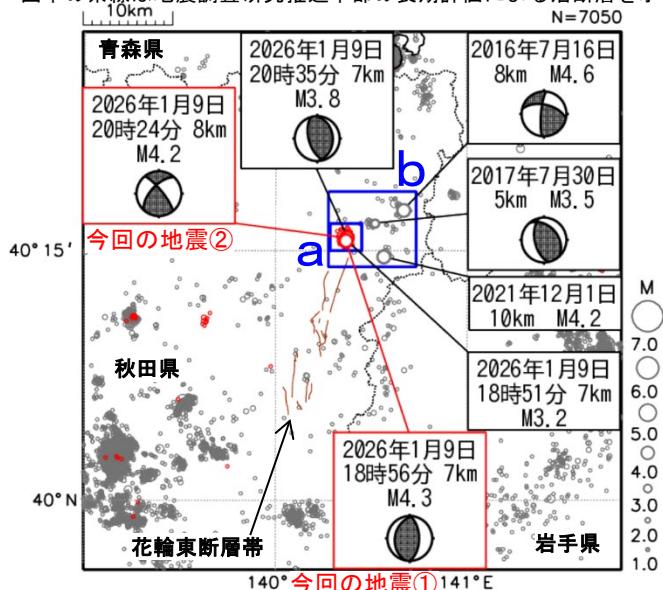
[上述の地震は M6.0 以上または最大震度 4 以上、陸域で M4.5 以上かつ最大震度 3 以上、海域で M5.0 以上かつ最大震度 3 以上、その他、注目すべき活動のいずれかに該当する地震。]

1月9日 秋田県内陸北部の地震

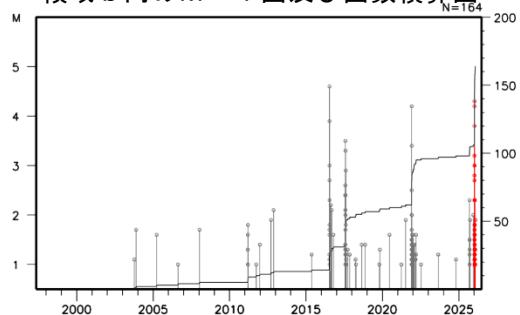
震央分布図

(1997年10月1日～2026年1月31日、
深さ0～30km、M≥1.0)

○1997年10月1日～2025年12月31日 ○2026年1月1日以降
図中の茶線は地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示す。

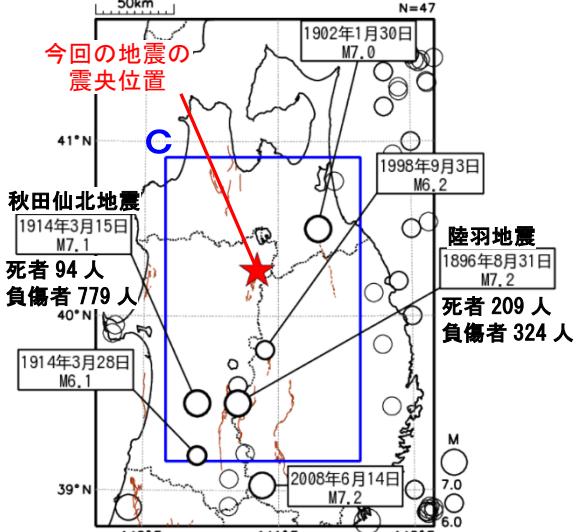


領域 b 内のM-T 図及び回数積算図



震央分布図

(1885年1月1日～2026年1月31日、
深さ0～100km、M≥6.0)



図中の茶線は地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示す。
震源要素は、1885年～1918年は茅野・宇津(2001)、宇津(1982, 1985)による。
被害は「日本被害地図総覧」による。

宇津徳治(1982)：日本付近のM6.0以上の地震および被害地震の表：1885年～1980年 災研彙報 56 401-463

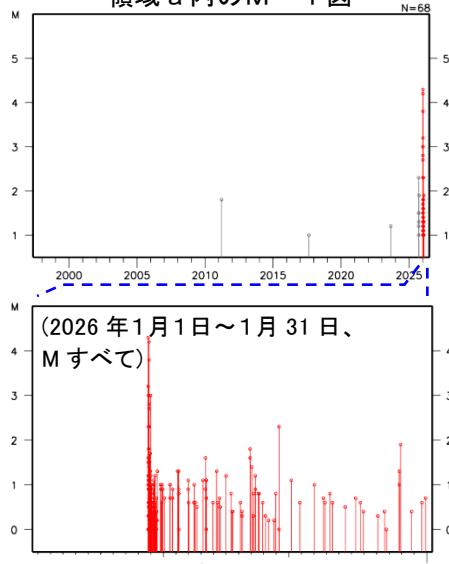
宇津治徳治(1982): 日本付近のM6.0以上の地震および被災地震の表。1885年～1980年, 展開集葉報, 50, 401-403。

子津洋徳(1963)・日本付近のM6.0以上の地震のよい被旨地震の表 - 1885年-1960年 (訂正) 657頁
喜野一郎・室津徳治(2001)・日本の主な地震の表「地電の事典」第2版 朝倉書店

2026年1月9日18時56分に秋田県内陸北部の深さ7kmでM4.3の地震(図中①、最大震度4)が発生した。この地震は発震機構が東西方向に圧力軸を持つ逆断層型である。同日20時24分にほぼ同じ場所の深さ8kmでM4.2の地震(図中②、最大震度4)が発生した。この地震は発震機構が東西方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型である。これらの地震は地殻内で発生した。これらの地震の震央の近傍(領域a)では、9日18時51分にM3.2の地震(最大震度3)が発生して以降地震活動が活発となり、同日24時までに震度1以上を観測する地震が8回(震度4:2回、震度3:2回、震度2:2回、震度1:2回)発生した。

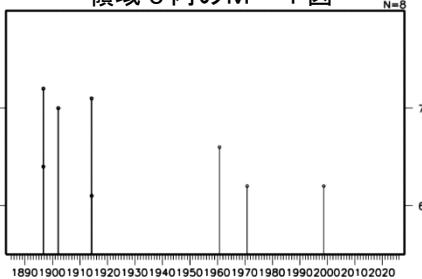
1997年10月以降の活動をみると、今回の地震の震央付近（領域b）では、2016年7月16日にM4.6の地震（最大震度3）が発生するなど、M4.0以上の地震が時々発生している。

領域 a 内のM-T図



1885年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域c）では、M6.0以上の地震が時々発生している。1896年8月31日には「陸羽地震」（M7.2）が発生し、死者209人などの被害が生じた。また、1914年3月15日には秋田仙北地震（M7.1、強首（こわくび）地震とも呼ばれる）が発生し、死者94人などの被害が生じた（被害はいずれも「日本被害地震総覧」による）。

領域 c 内のM-T 図

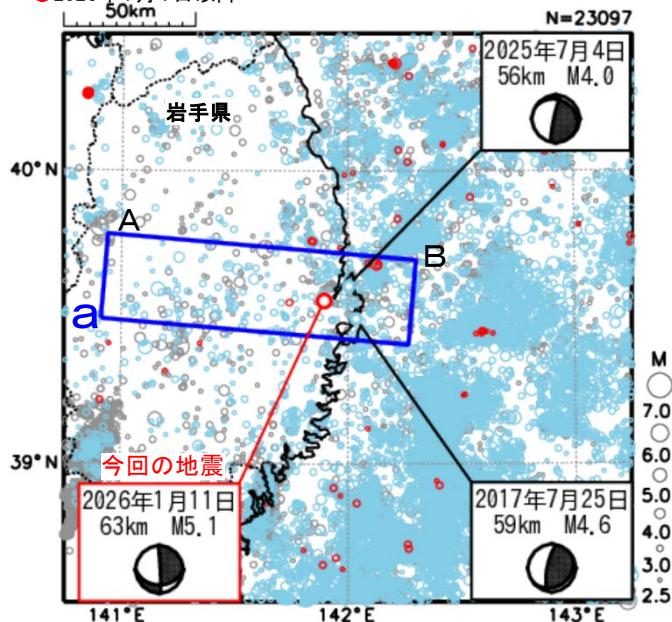


1月11日 岩手県沿岸北部の地震

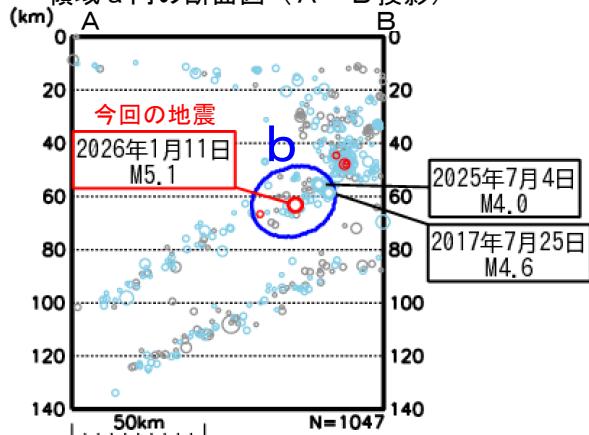
震央分布図

(1997年10月1日～2026年1月31日、
深さ0～140km、M≥2.5)

1997年10月1日～2011年2月28日 2011年3月1日～2025年12月31日
 2026年1月1日以降



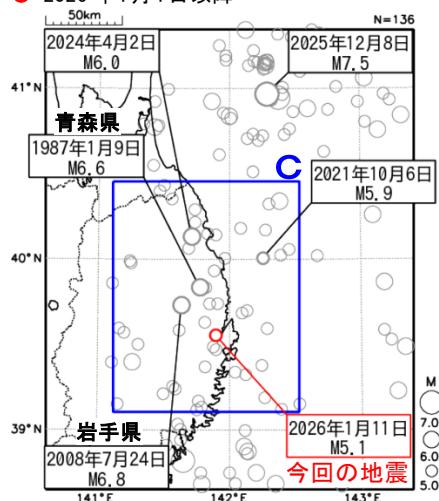
領域 a 内の断面図 (A-B 投影)



震央分布図

震央分布図
(1919年1月1日～2026年1月31日、
深さ50～150km、M≥5.0)

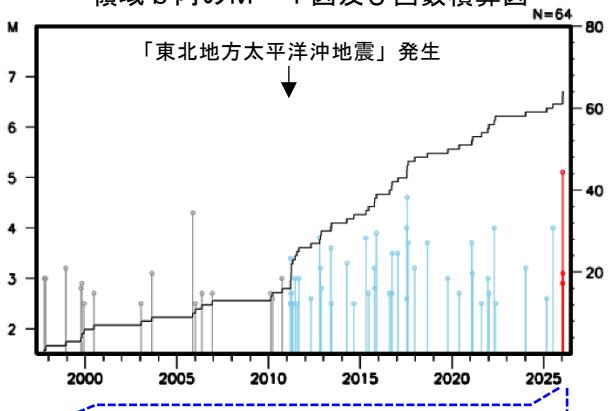
○ 1919年1月1日～2025年12月31日
○ 2026年1月1日以降



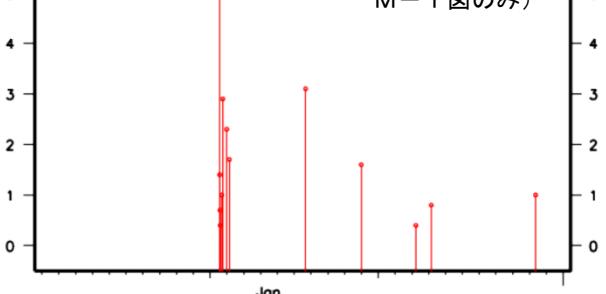
2026年1月11日13時15分に岩手県沿岸北部の深さ63kmでM5.1の地震（最大震度4）が発生した。この地震は太平洋プレート内部（二重地震面の上面）で発生した。発震機構は太平洋プレートが沈み込む方向に圧力軸を持つ型である。

1997年10月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近（領域 b）は「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震」（以下、「東北地方太平洋沖地震」）以降、地震活動が活発となっており、M4.0以上の地震が時々発生している。

領域 b 内のM-T図及び回数積算図

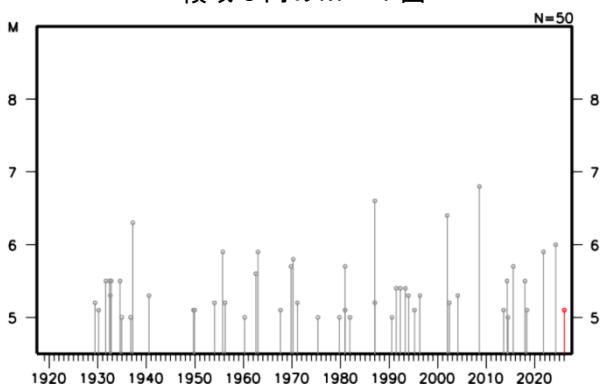


(2026年1月1日～1月31日、Mすべて、
M-工図のみ)



1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域c）では、M 6 を超える地震が時々発生しており、2008年7月24日には深さ108kmでM6.8の地震（最大震度6弱）が発生した。この地震により死者1人、負傷者211人、住家全壊1棟、一部破損379棟などの被害が生じた（被害は総務省消防庁による）。

領域 c 内のM-T図

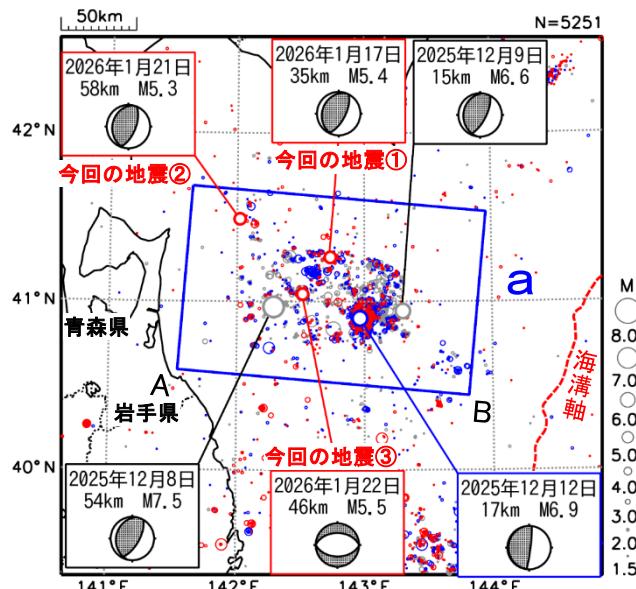


1月17日、21日、22日 青森県東方沖の地震

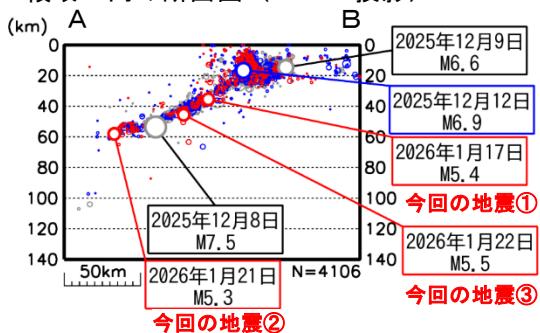
(2025年12月8日からの青森県東方沖の地震活動)

震央分布図

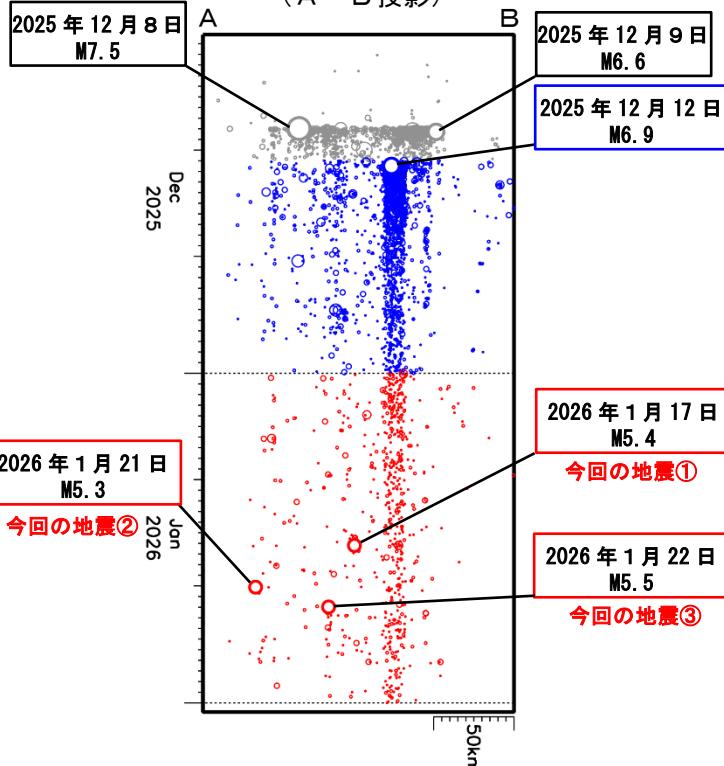
(2025年12月1日～2026年1月31日、深さ0～140km、M \geq 1.5)
 ●2025年12月1日～2025年12月11日 ○2025年12月12日～2025年12月31日
 ◉2026年1月1日以降 図中の発震機構はCMT解を示す



領域a内の断面図（A-B投影）



領域a内の時空間分布図
(A-B投影)



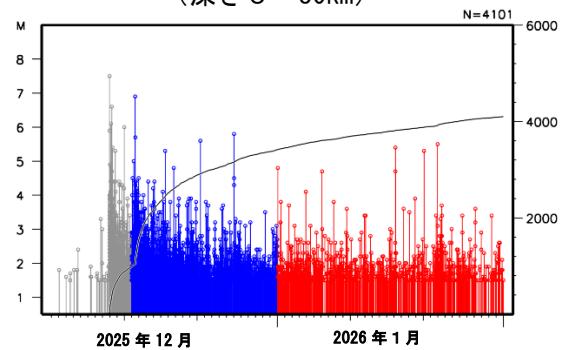
2026年1月17日04時34分に青森県東方沖の深さ35kmでM5.4の地震（最大震度3、図中①）が発生した。この地震は、発震機構（CMT解）が西北西－東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した。

また、1月21日02時51分に①の地震の震央から西方の陸寄りの場所の深さ58kmでM5.3の地震（最大震度3、図中②）が発生した。この地震は、発震機構（CMT解）が西北西－東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した。

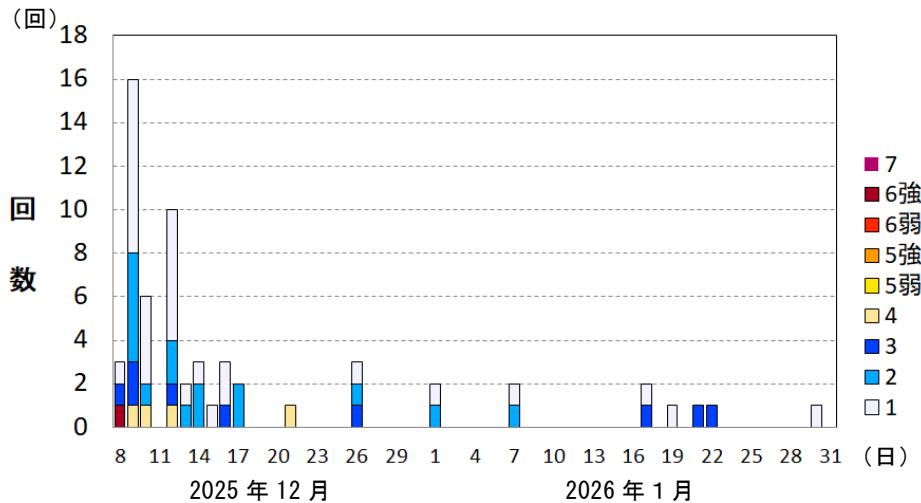
さらに、図中①の震央付近では1月22日23時31分に深さ46kmでM5.5の地震（最大震度3、図中③）が発生した。この地震は、発震機構（CMT解）が南北方向に張力軸を持つ正断層型で、太平洋プレート内部で発生した。

今回の地震の震央周辺（領域a）では、2025年12月8日にM7.5の地震が発生して以降地震活動が継続しており、特に2025年12月12日のM6.9の地震の震源付近で活発に推移している。領域a内で12月8日から1月31日までに震度1以上を観測した地震は、60回（震度6強：1回、震度4：4回、震度3：9回、震度2：16回、震度1：30回）であった。

領域a内のM-T図及び回数積算図
(深さ0～80km)



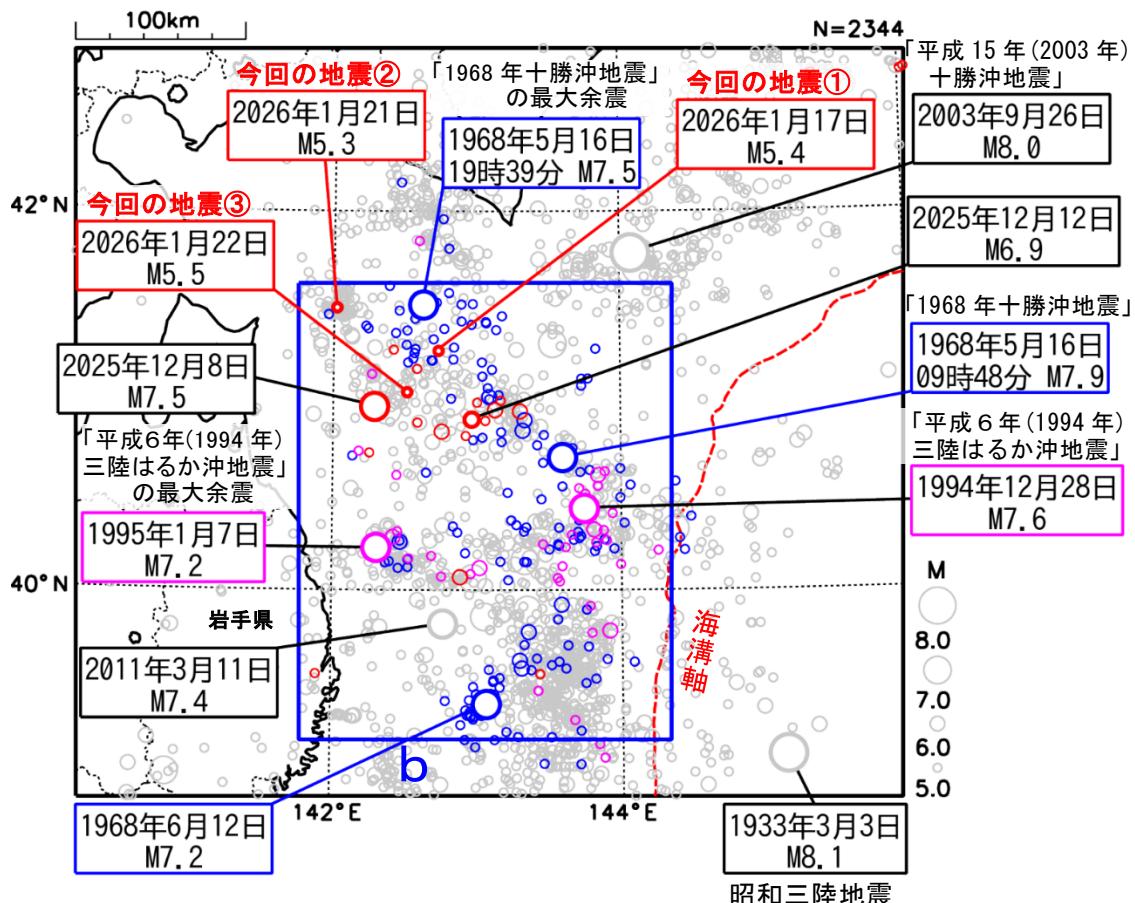
最大震度別地震回数（日別）
(2025年12月8日23時～2026年1月31日24時、震度1以上の地震)



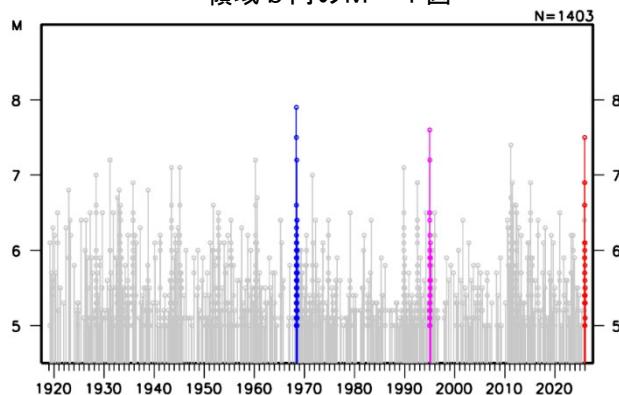
最大震度別地震回数表（日別）

気象庁作成

震央分布図(1919年1月1日～2026年1月31日、深さ0～100km、M \geq 5.0)
 ○1968年5月16日～1968年7月31日 ○1994年12月28日～1995年2月28日
 ○2025年12月1日以降 ○上記以外の期間



領域b内のM-T図



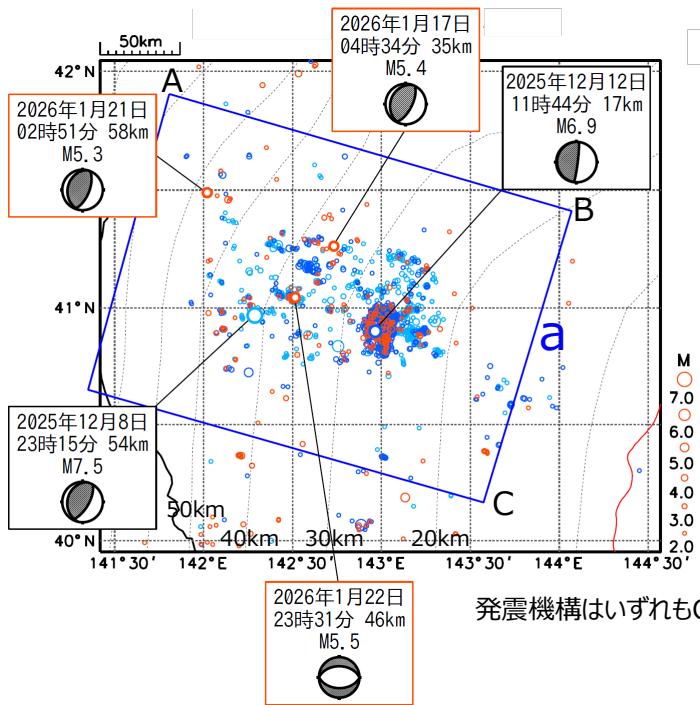
1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺(領域b)では、M7を超える地震が時々発生している。このうち、1968年5月16日には「1968年十勝沖地震」(M7.9、最大震度5)が発生し、青森県八戸[火力発電所]で295cm(平常潮位からの最大の高さ)の津波を観測したほか、死者52人、負傷者330人、住家全壊673棟、半壊3,004棟、一部破損15,697棟などの被害が生じた。

また、1994年12月28日には「平成6年(1994年)三陸はるか沖地震」(M7.6、最大震度6)が発生した。この地震により、青森県八戸と岩手県宮古で50cm(平常潮位からの最大の高さ)の津波を観測した(「験震時報第64巻」による)ほか、死者3人、負傷者688人、住家全壊72棟、半壊429棟、一部破損9,021棟などの被害が生じた(被害は、いずれも「日本被害地震総覧」による)。

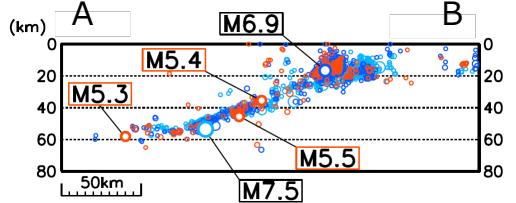
1月17日・21日・22日 青森県東方沖の地震（2025年12月8日M7.5の地震以降の地震活動）

震央分布図

2025年12月8日20時00分～2026年1月31日24時00分、
深さ0～80km、M≥2.0



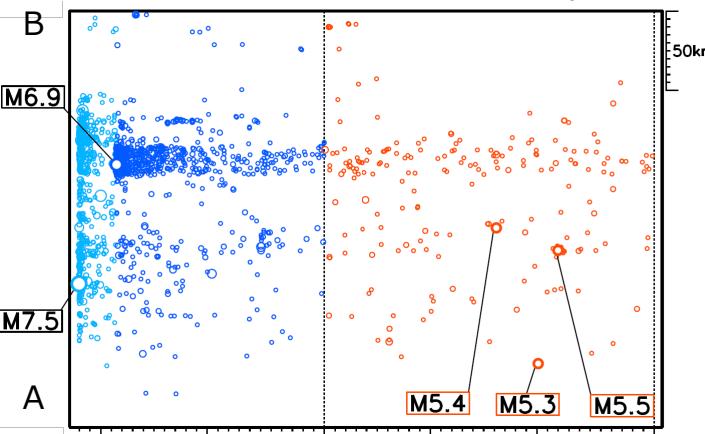
領域a内の断面図 (A-B投影)



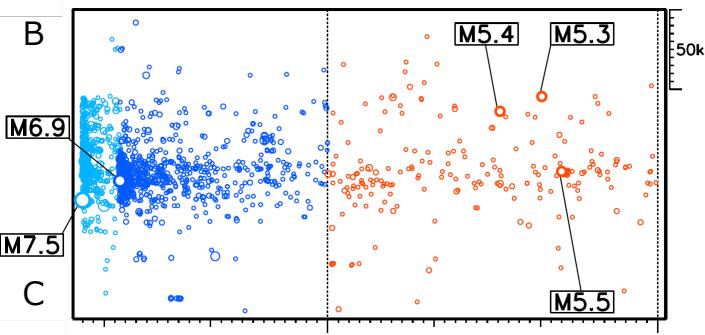
- 2025年12月8日20時00分～12日11時43分 (M6.9発生前)
- 2025年12月12日11時44分 (M6.9発生)～31日24時00分
- 2026年1月1日～31日

震央分布図中の黒色破線は、Kita et al. (2010)およびNakajima and Hasegawa (2006)による太平洋プレート上面のおよその深さを示す

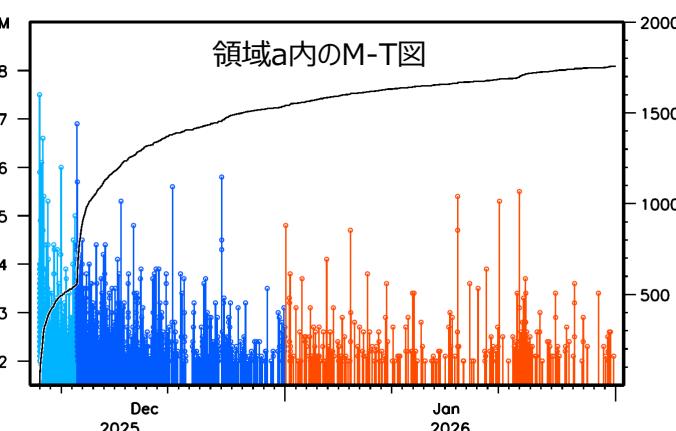
領域a内の時空間分布図 (A-B投影)



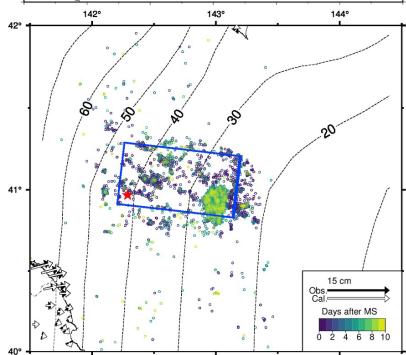
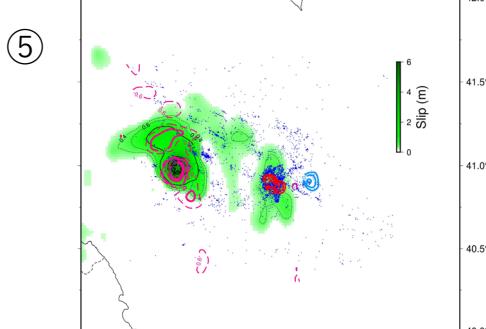
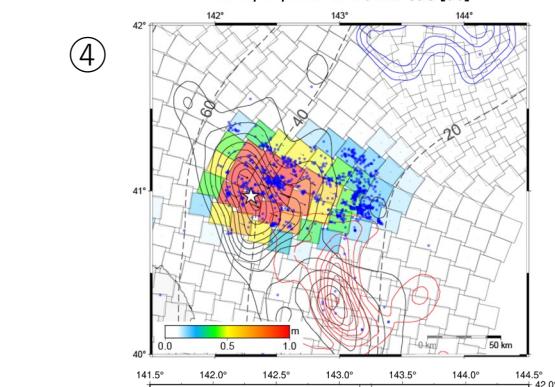
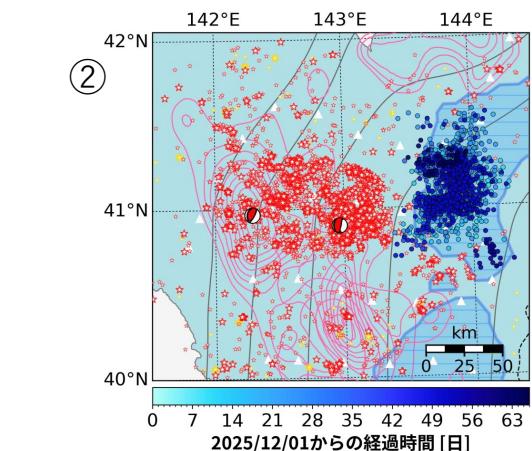
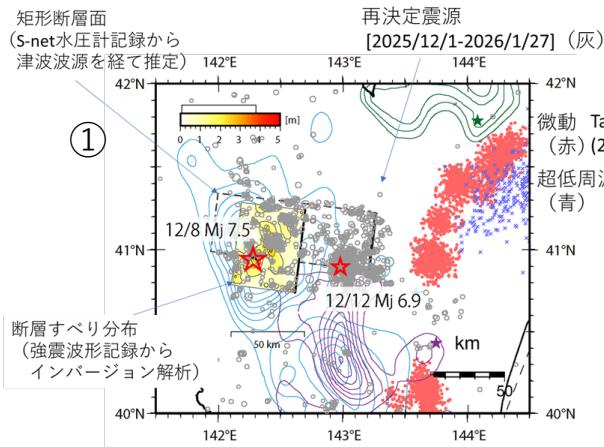
領域a内の時空間分布図 (B-C投影)



領域a内のM-T図



青森県東方沖の地震（震央分布、すべり分布）－暫定解析結果－



①防災科学技術研究所

②産業技術総合研究所

(赤：地震、青：微動)

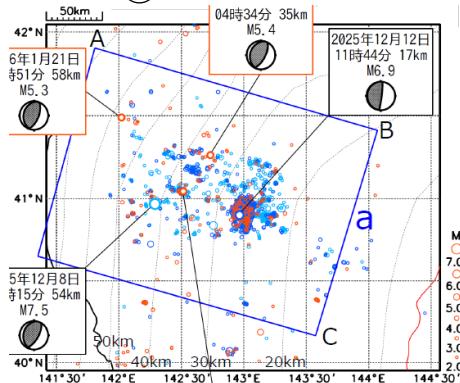
(2025年12月1日～2026年2月4日)

③気象庁

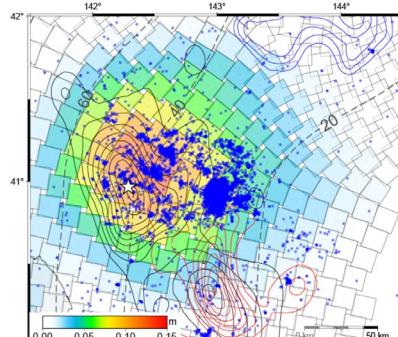
(地震)

(2025年12月8日20時00分～2026年1月31日24時00分、深さ 0～80 km、M2.0以上)

③



④国土地理院 (GNSS)
左：地震時すべり分布
右：余効すべり分布



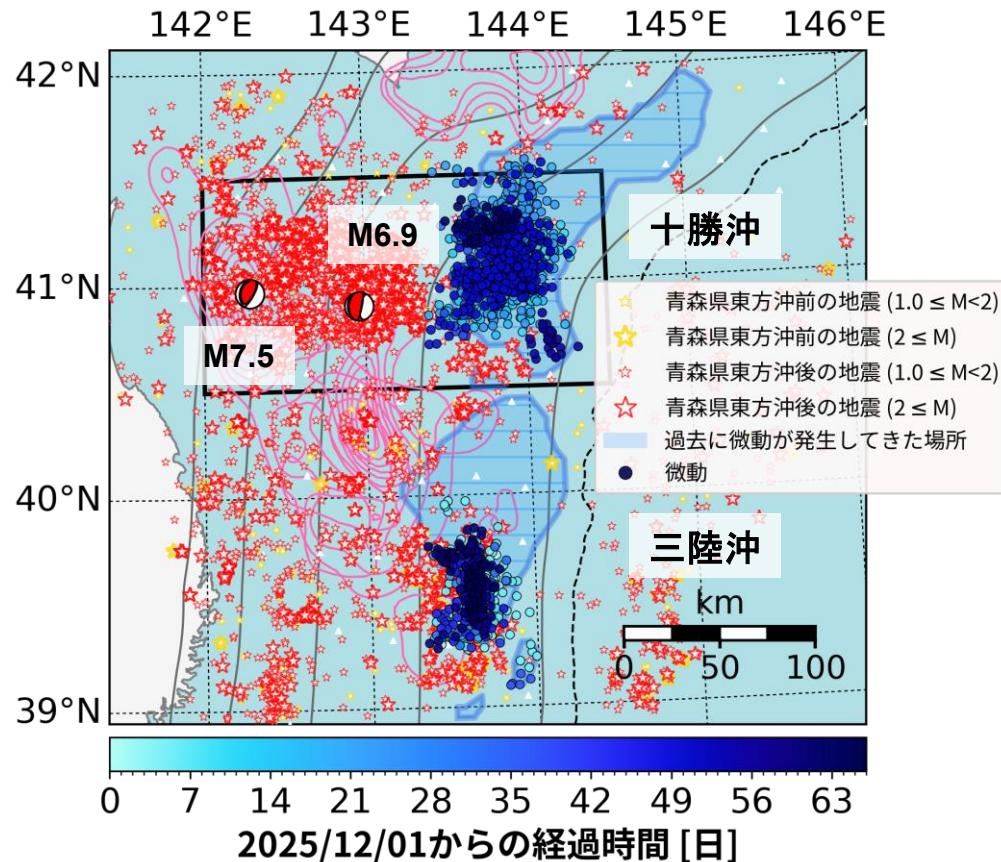
⑤東北大学 (緑：遠地波形)
(ピンク：近地波形)

⑥東北大学 (GEONET、ソフトバンク観測点)

2025/12/08 23:15 青森県東方沖の地震前後の十勝沖・三陸沖における微動活動

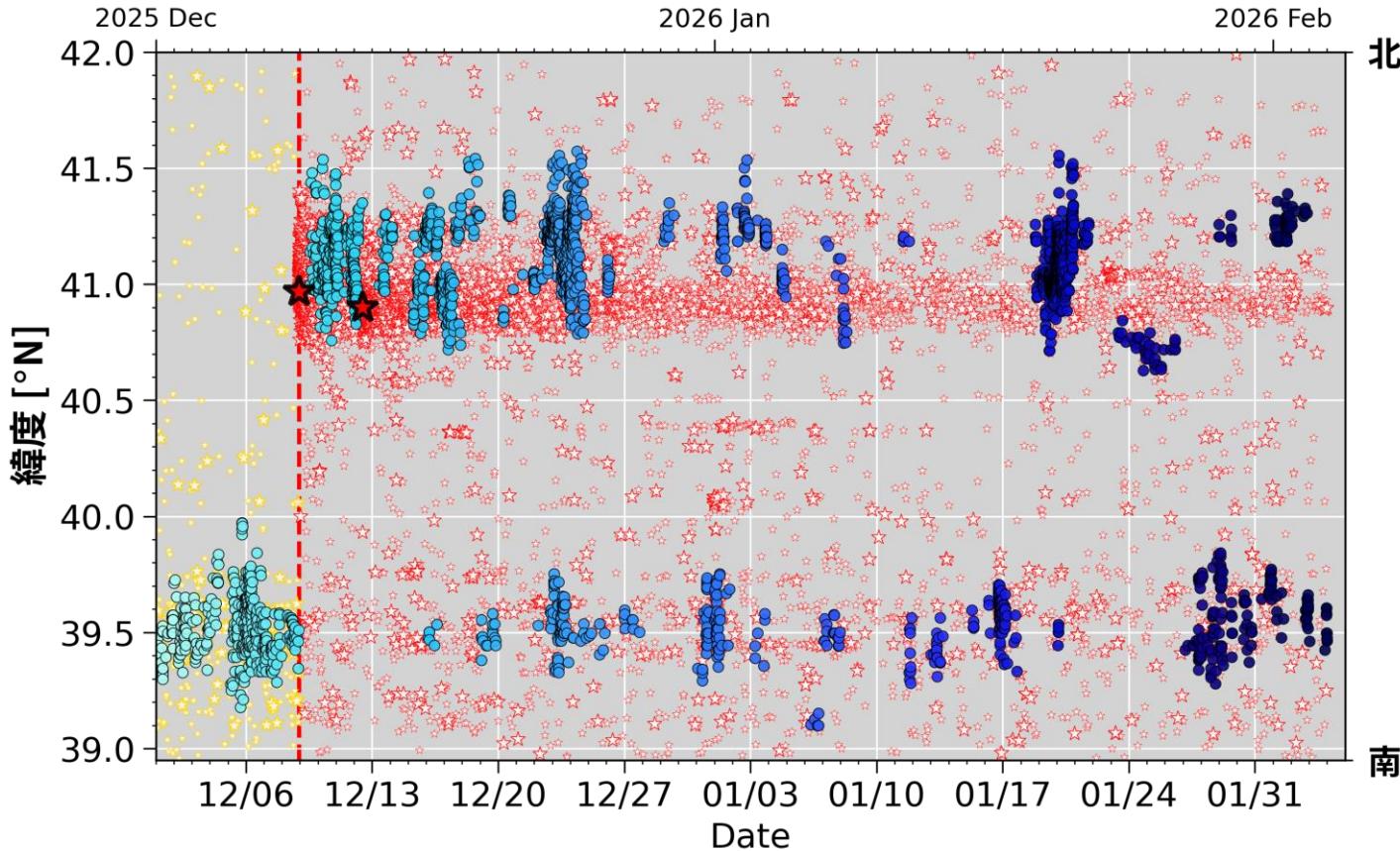
十勝沖

- 本震以降、余震活動の東側で微動を検出
- 繰り返し同じような場所で活動が活発化



三陸沖

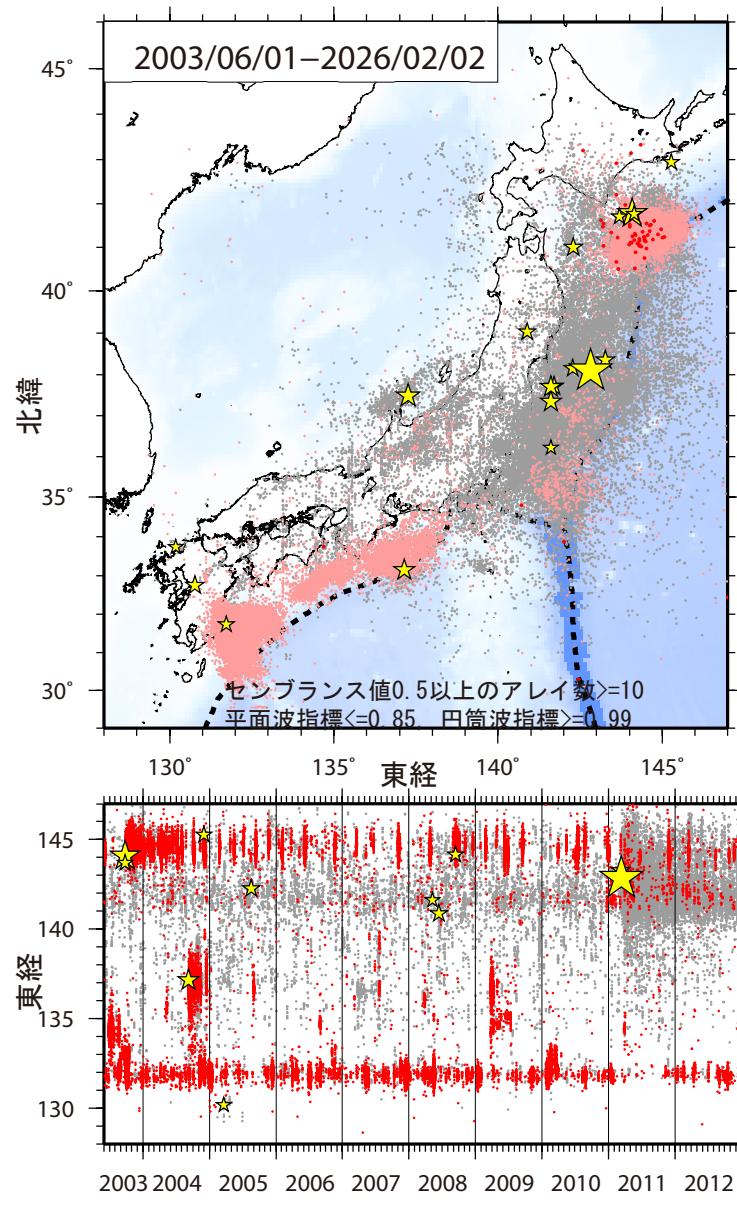
- 本震の前まで、2025年11月から継続する微動活動を観測
- 本震後も断続的に微動活動が継続している



※ 色付きの丸は微動の震央、2026/02/04 23:59:59までの解析結果
 黄色の星はM7.5の前、赤の星はM7.5以降のM1以上の地震
 青色の塗りつぶしは過去に発生した微動活動の分布域 (Sagae et al., 2025)

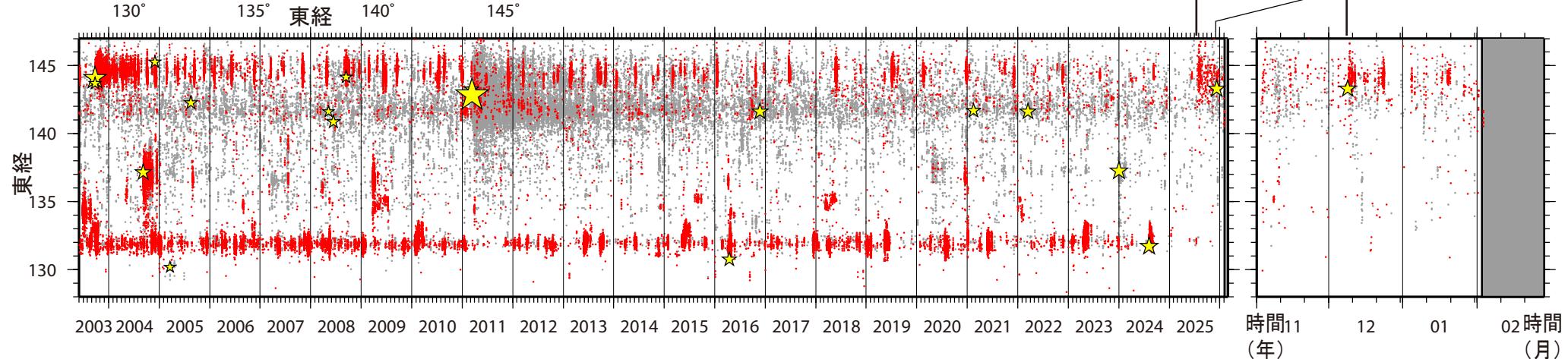
謝辞: 2025/12/01–2026/02/03までの気象庁一元化震源カタログを使用しました。
 防災科学技術研究所S-netの地震波形データ、F-net Projectによる広帯域地震波形を用いたメカニズム解析結果を使用しました。記して感謝申し上げます。

日本周辺における浅部超低周波地震活動（2025年11月～2026年1月） (つづき)



第3図. 2003年6月1日から2026年2月2日までの期間にアレイ解析によって検出されたイベントの震央分布。第1図とは異なるイベント検出基準、具体的にはセンブランス値0.5以上のアレイ数10以上（第1図では15以上）という検出基準を採用した場合の検出イベントについて震央分布を示す。シンボル等は第1図に同じ。

カムチャツカ半島付近の地震 青森県東方沖の地震 (Mj7.5)



第4図. 2003年6月1日から2026年2月2日までの期間（左）および直近約3か月間（右）に検出されたイベントの時空間分布。第3図と同じ検出基準による検出イベント時空間分布を示す。シンボル等は第2図に同じ。

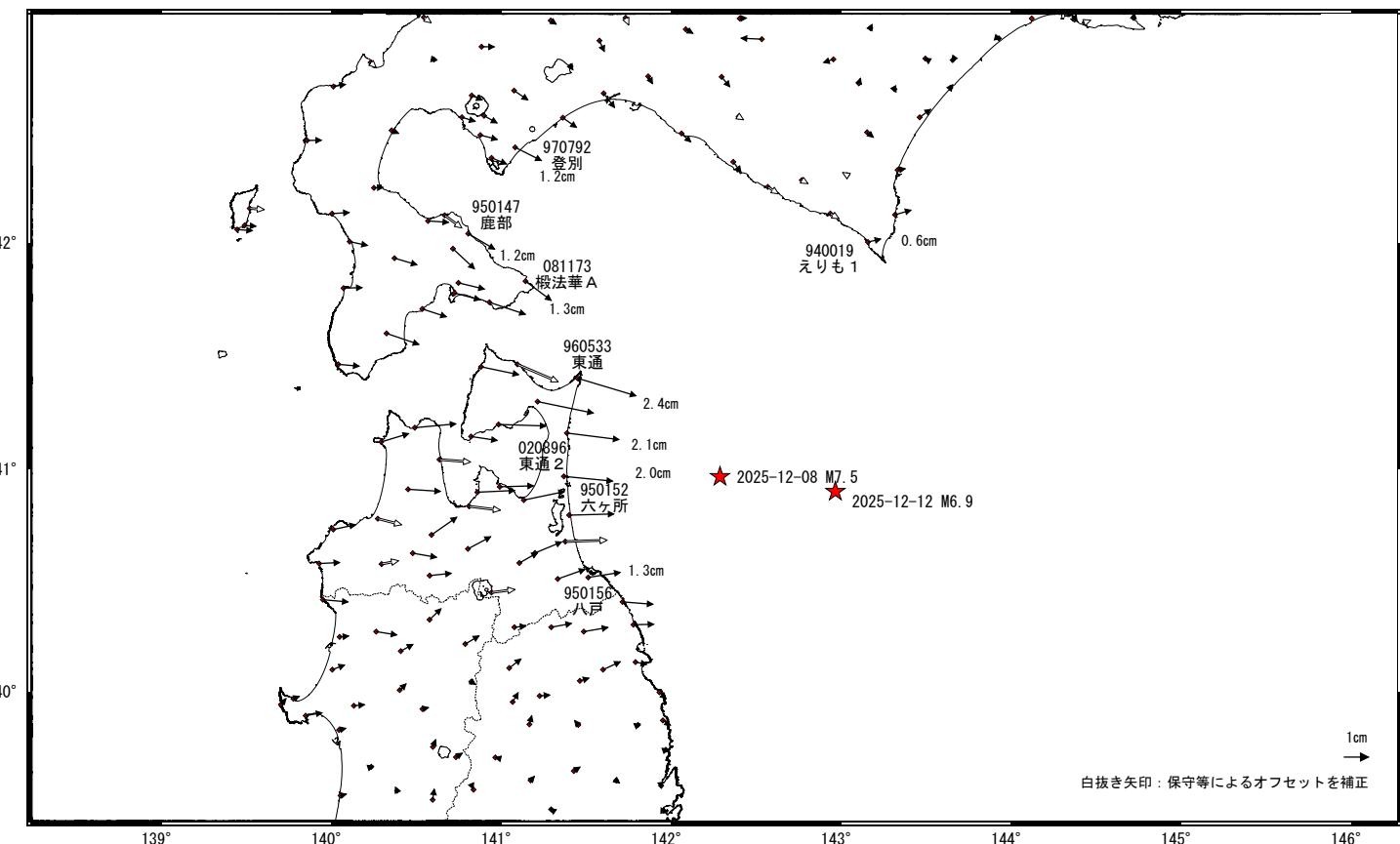
青森県東方沖の地震(12月8日 M7.5)後の観測データ(暫定)

青森県を中心にこの地震後の余効変動が観測されている。

地殻変動(水平)

基準期間:2025-12-09~2025-12-09 [F5:最終解]
比較期間:2026-01-29~2026-01-31 [R5:速報解]

計算期間:2023-01-01~2025-01-01



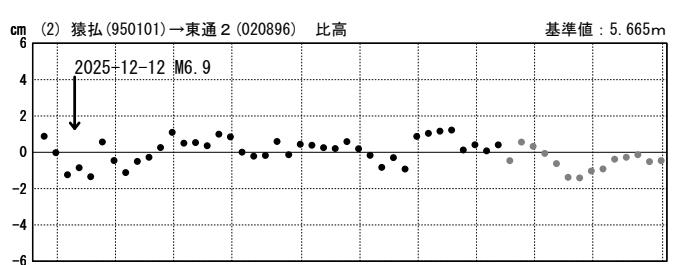
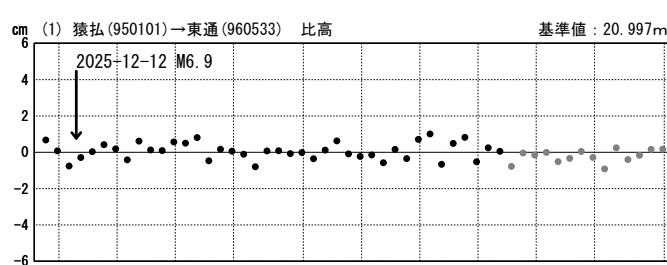
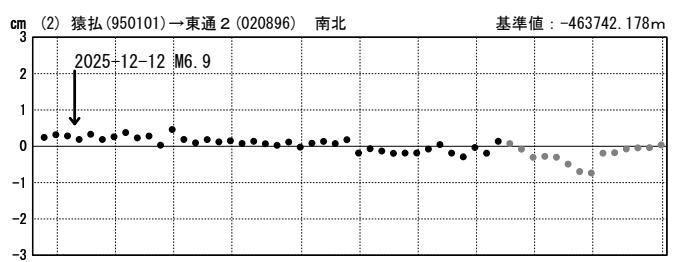
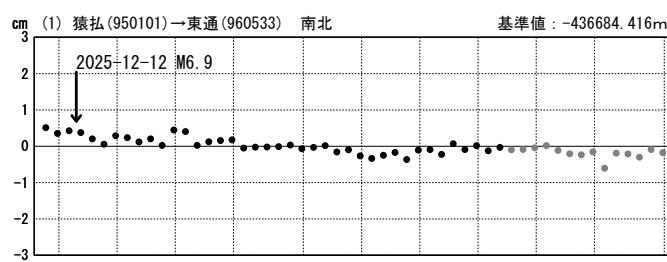
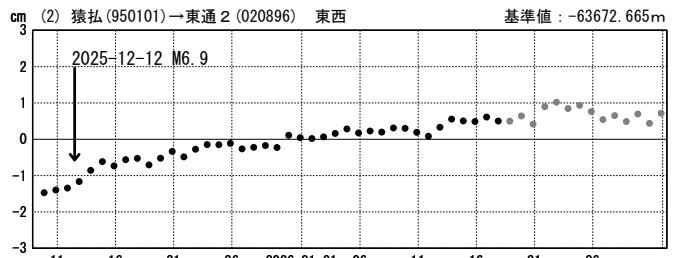
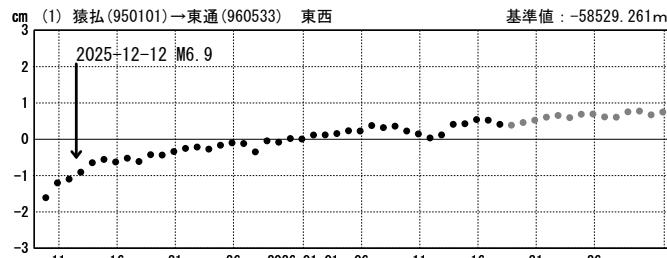
★震央

☆固定局:猿払(950101) (北海道)

1次トレンド除去後グラフ

計算期間: 2023-01-01~2025-01-01

期間: 2025-12-09~2026-01-31 JST

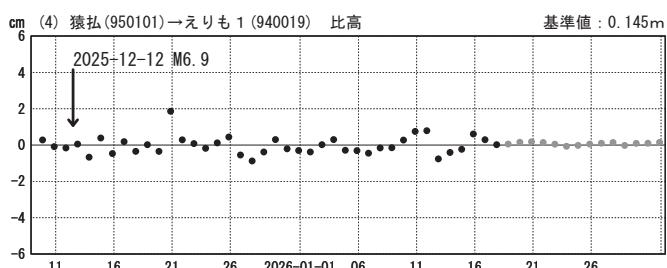
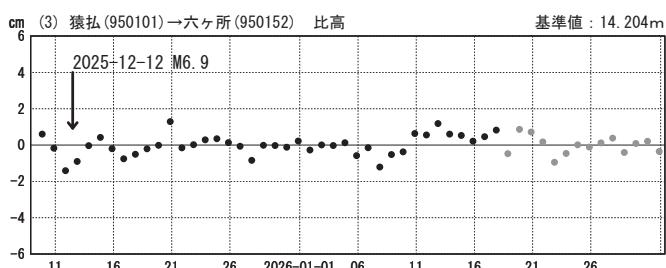
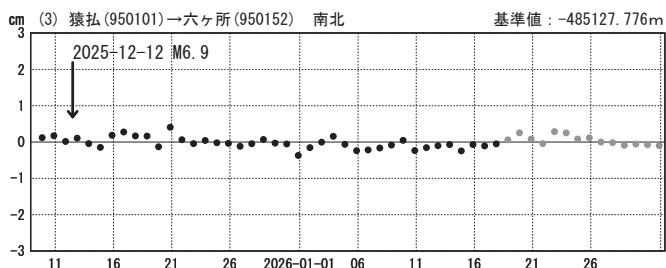
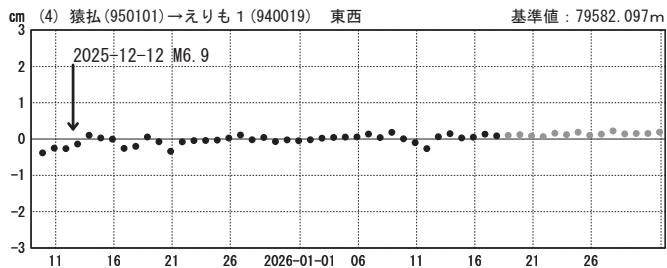
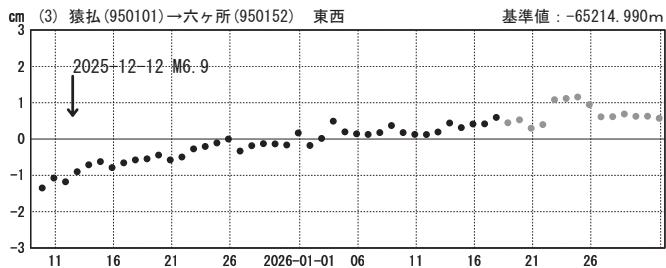


●---[F5:最終解] ●---[R5:速報解]

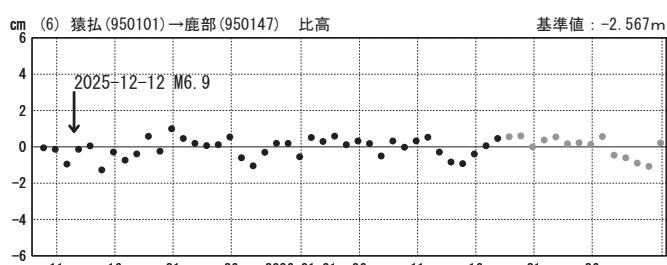
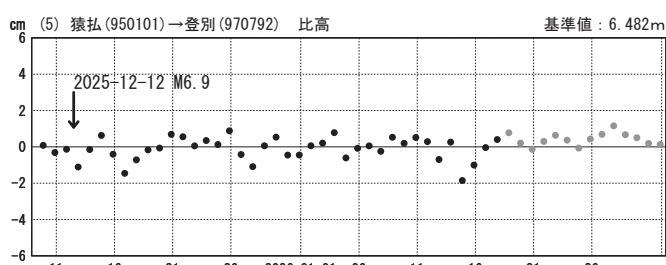
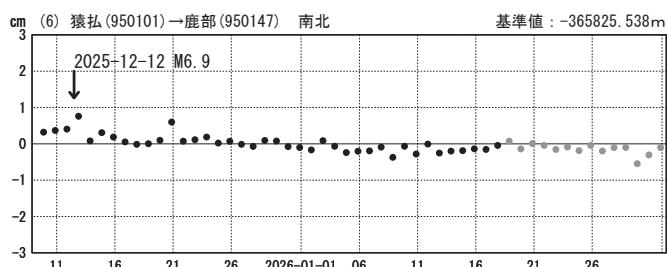
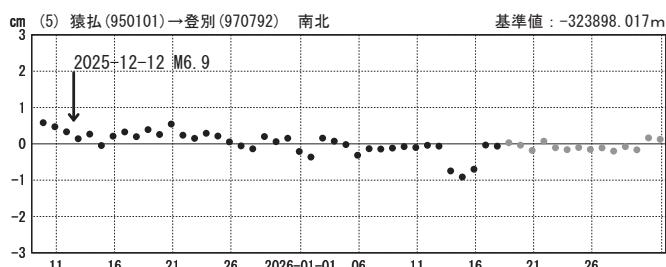
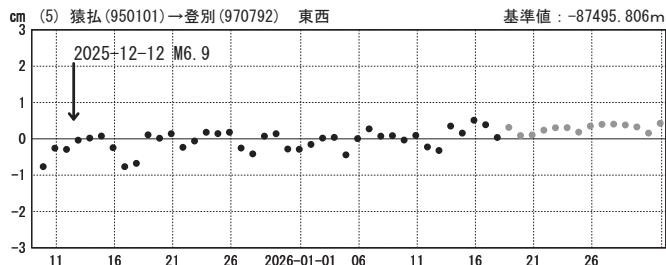
1次トレンド除去後グラフ

計算期間：2023-01-01～2025-01-01

期間：2025-12-09～2026-01-31 JST



期間：2025-12-09～2026-01-31 JST

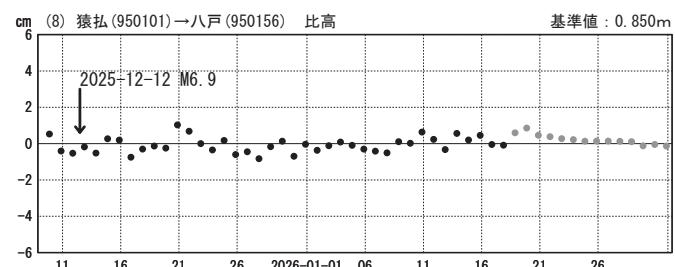
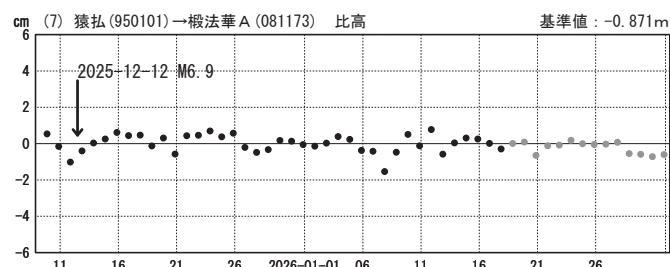
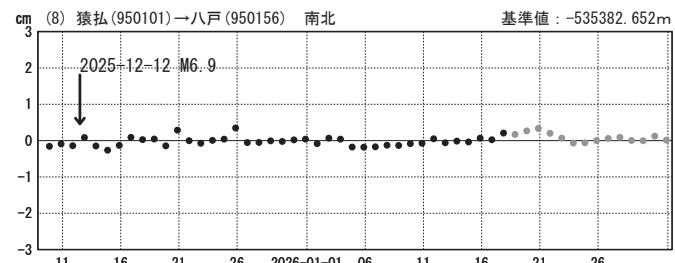
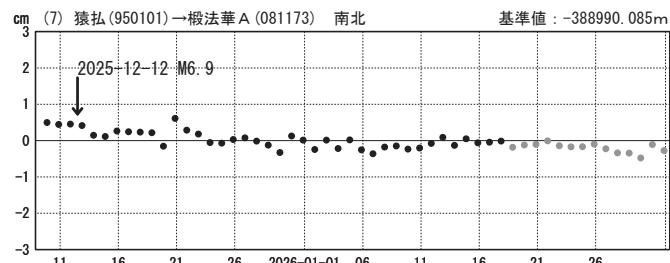
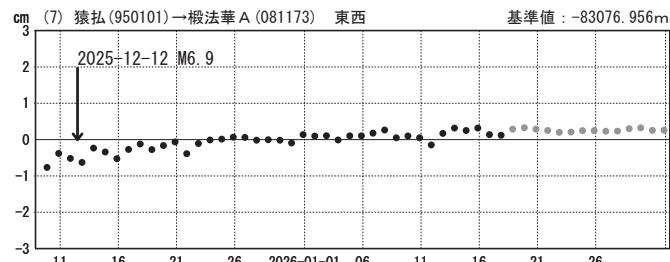


●---[F5:最終解] ●---[R5:速報解]

1次トレンド除去後グラフ

計算期間: 2023-01-01～2025-01-01

期間: 2025-12-09～2026-01-31 JST

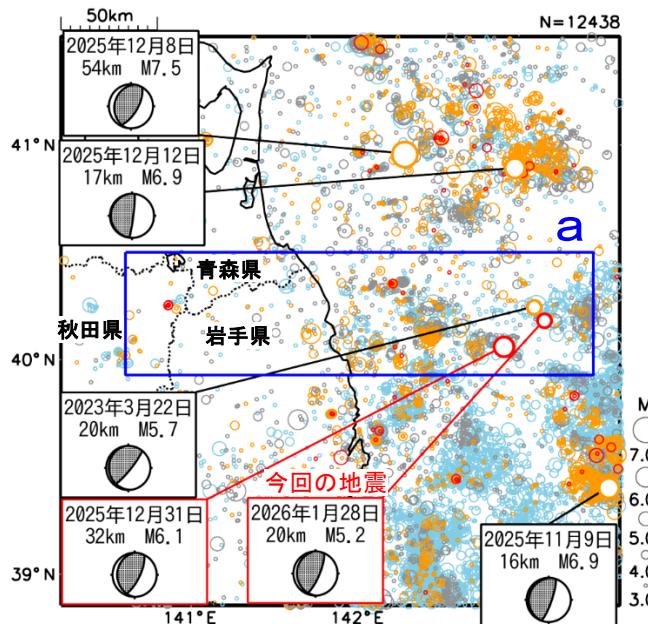


1月28日 三陸沖の地震

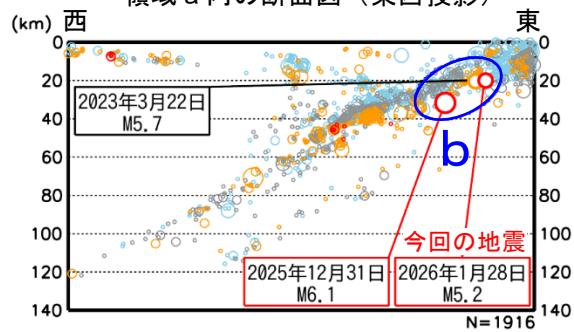
震央分布図

(1997年10月1日～2026年1月31日、
深さ0～140km、M≥3.0)

- 1997年10月1日～2011年2月28日 ○ 2011年3月1日～2020年8月31日
- 2020年9月1日～2025年12月31日 ○ 2025年12月31日以降



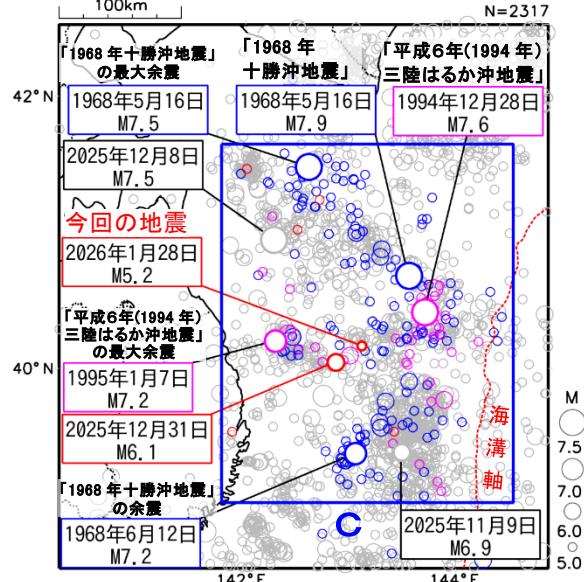
領域 a 内の断面図（東西投影）



震央分布図

(1919年1月1日～2026年1月31日、
深さ0～100km、M≥5.0)

- 1968年5月1日～7月31日
- 1994年12月1日～1995年2月28日
- 2025年12月31日～2026年1月31日 ○ 上記以外の期間



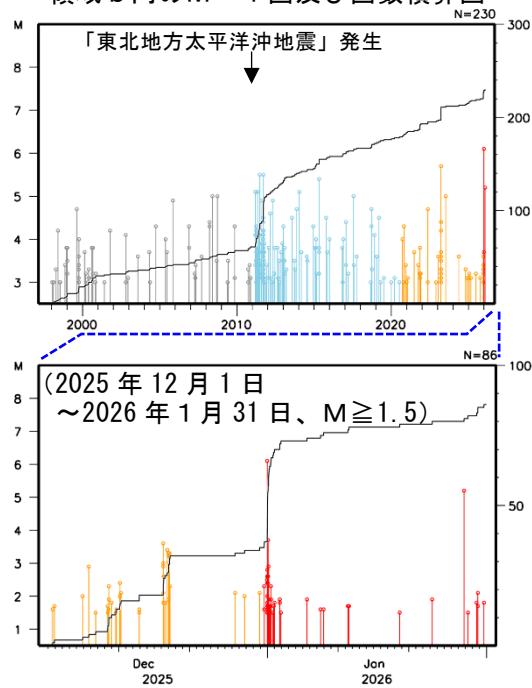
2026年1月28日 三陸沖の地震

2026年1月28日19時45分に三陸沖の深さ20kmでM5.2の地震（最大震度3）が発生した。この地震は、発震機構（CMT解）が西北西～東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した。

1997年10月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近（領域 b）では2025年12月31日に深さ32kmでM6.1の地震（最大震度4）が発生するなど

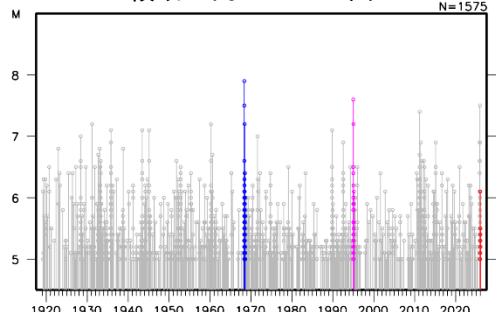
「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震」（以下、「東北地方太平洋沖地震」）以降、地震活動が活発となっていた。また、今回の地震の震央周辺では、2025年11月9日に三陸沖でM6.9の地震（最大震度4）が、2025年12月8日には青森県東方沖でM7.5の地震（最大震度6強）が発生している。

領域 b 内のM-T図及び回数積算図



1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域 c）では、M 7 を超える地震が時々発生しており、1968年5月16日に「1968年十勝沖地震」（M7.9、最大震度5、死者52人）で、青森県八戸【火力発電所】で295cm（平常潮位からの最大の高さ）の津波を観測した。また、1994年12月28日には「平成6年(1994年)三陸はるか沖地震」（M7.6、最大震度6、死者3人）が発生し、青森県八戸と岩手県宮古で50cm（平常潮位からの最大の高さ）の津波を観測した（「駿河時報第64巻」による）。被害は、いずれも「日本被害地震総覧」による。

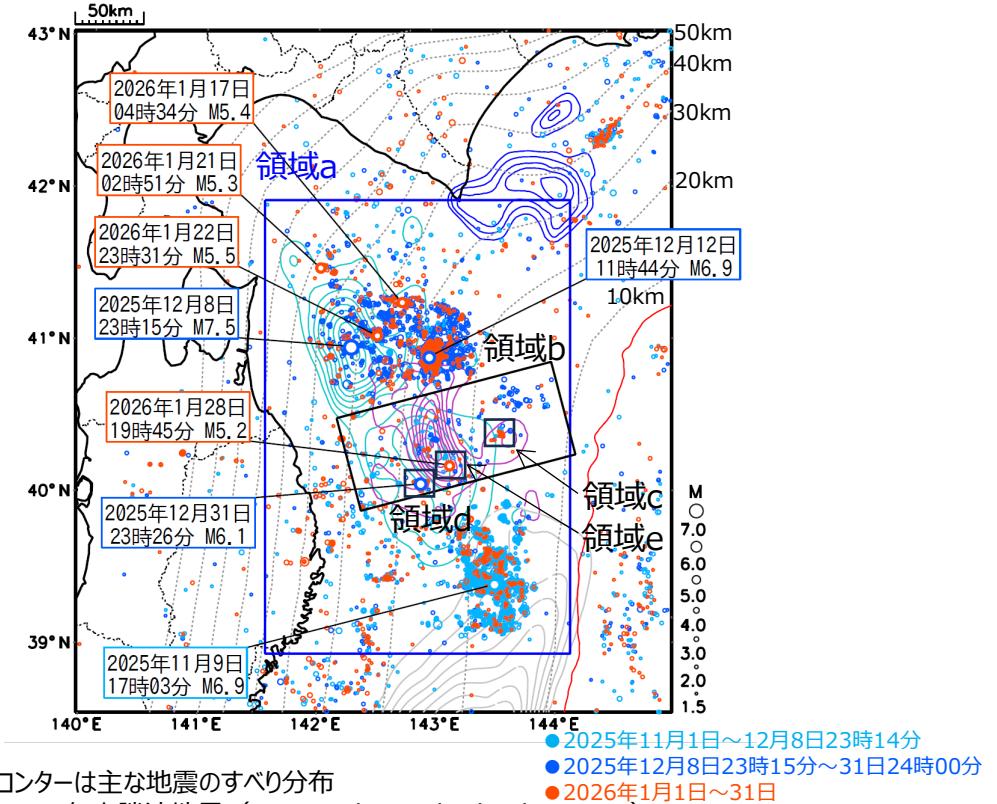
領域 c 内のM-T図



青森県東方沖・岩手県沖・三陸沖 周辺の地震活動

震央分布図

2025年11月1日～2026年1月31日、深さ0～100km、M \geq 1.5



色付きのセンターは主な地震のすべり分布

青色：2003年十勝沖地震 (Yamanaka and Kikuchi, 2003)

水色：1968年十勝沖地震 (永井・他, 2001)

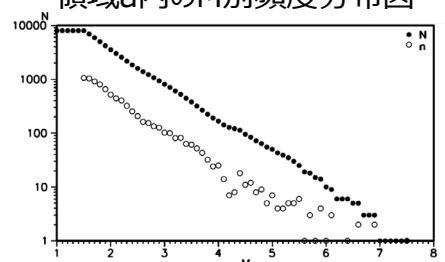
紫色：1994年三陸はるか沖地震 (永井・他, 2001)

灰色：2011年東北地方太平洋沖地震 (Yoshida et al., 2011)

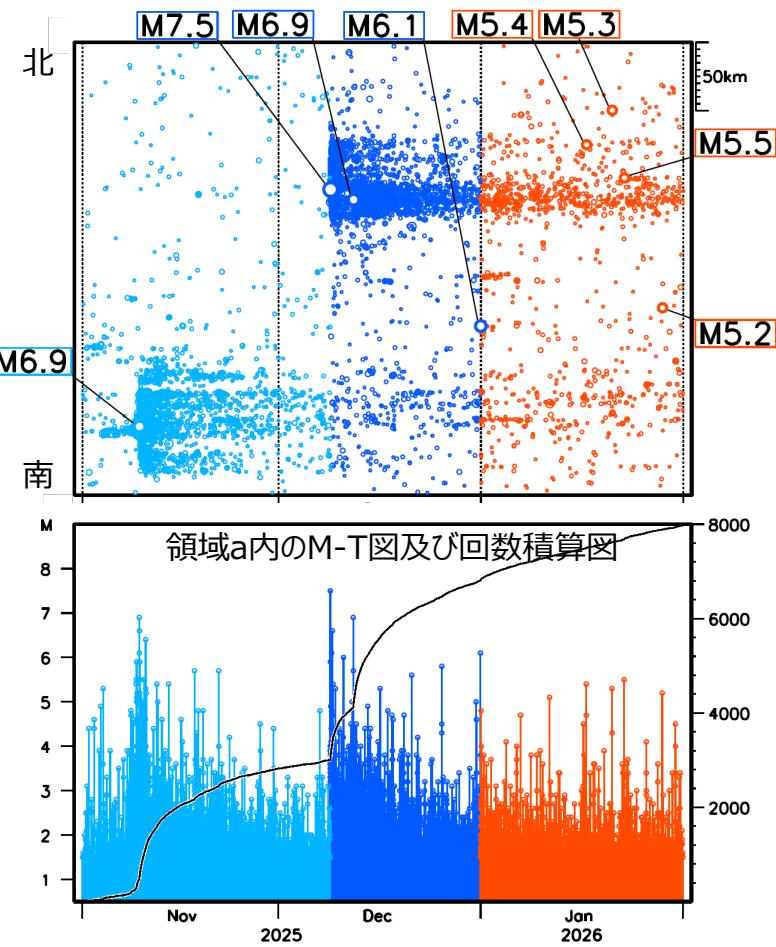
黒色破線は太平洋プレート上面のおよその深さ

Kita et al. (2010)及びNakajima and Hasegawa (2006)

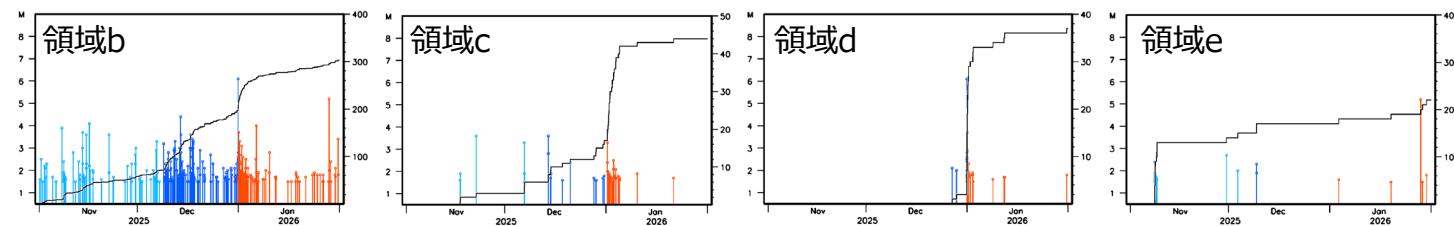
領域a内のM別頻度分布図



領域a内の時空間分布図（南北投影）

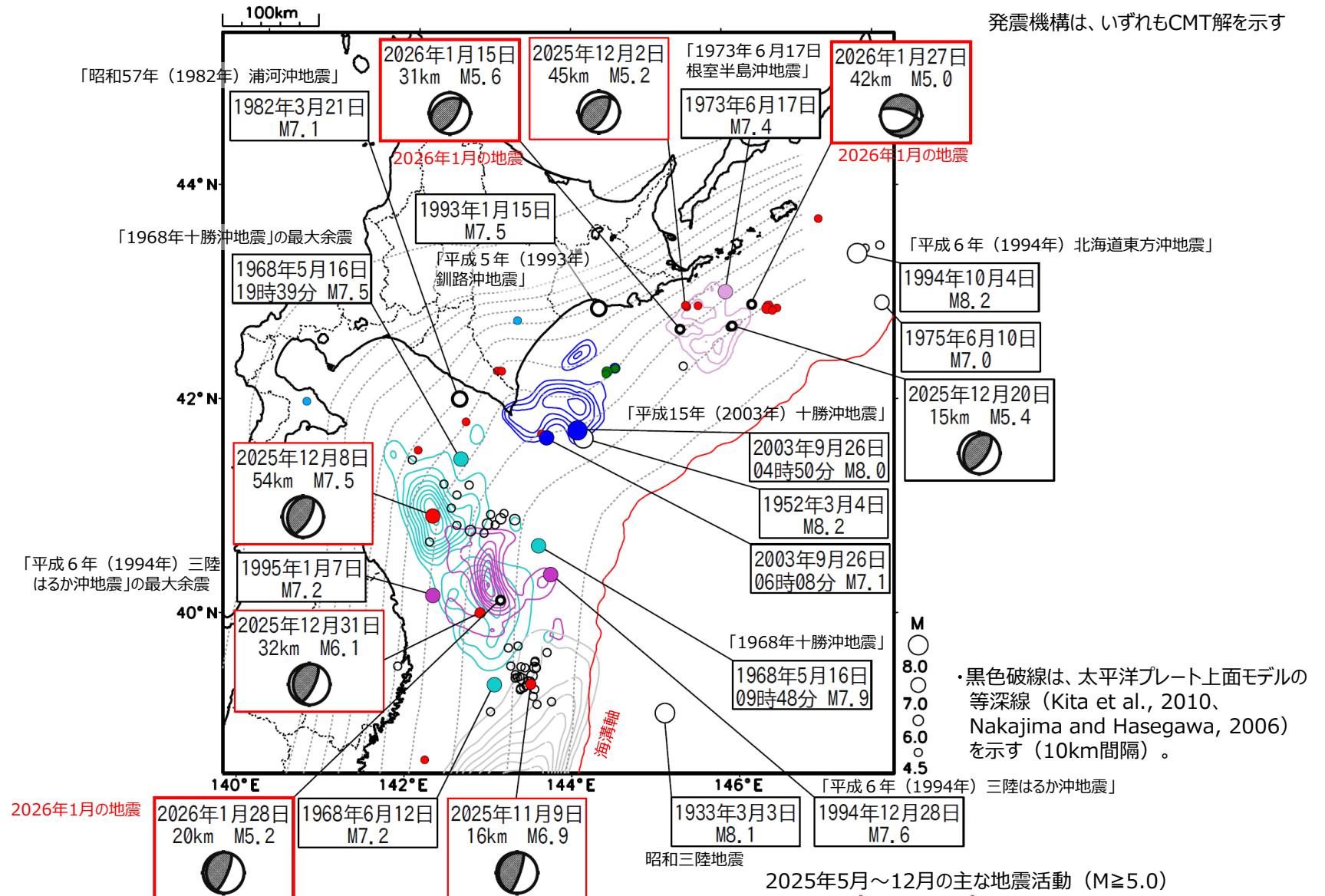


領域b-e内のM-T図及び回数積算図



気象庁作成

2025年5月～2026年1月の主な地震活動と1919年以降の主な被害地震（北海道東方沖～三陸沖）



○1919年1月1日以降の主な被害地震（吹き出しを付けた地震）

・震央の塗りつぶしは以下の地震の本震及び主な余震を、色付き等值線は、以下の地震時すべり分布を示す。

水色：1968年十勝沖地震〔永井・他(2001)〕

薄紫色：1973年根室半島沖地震〔山中(2005)〕

紫色：1994年三陸はるか沖地震〔永井・他(2001)〕

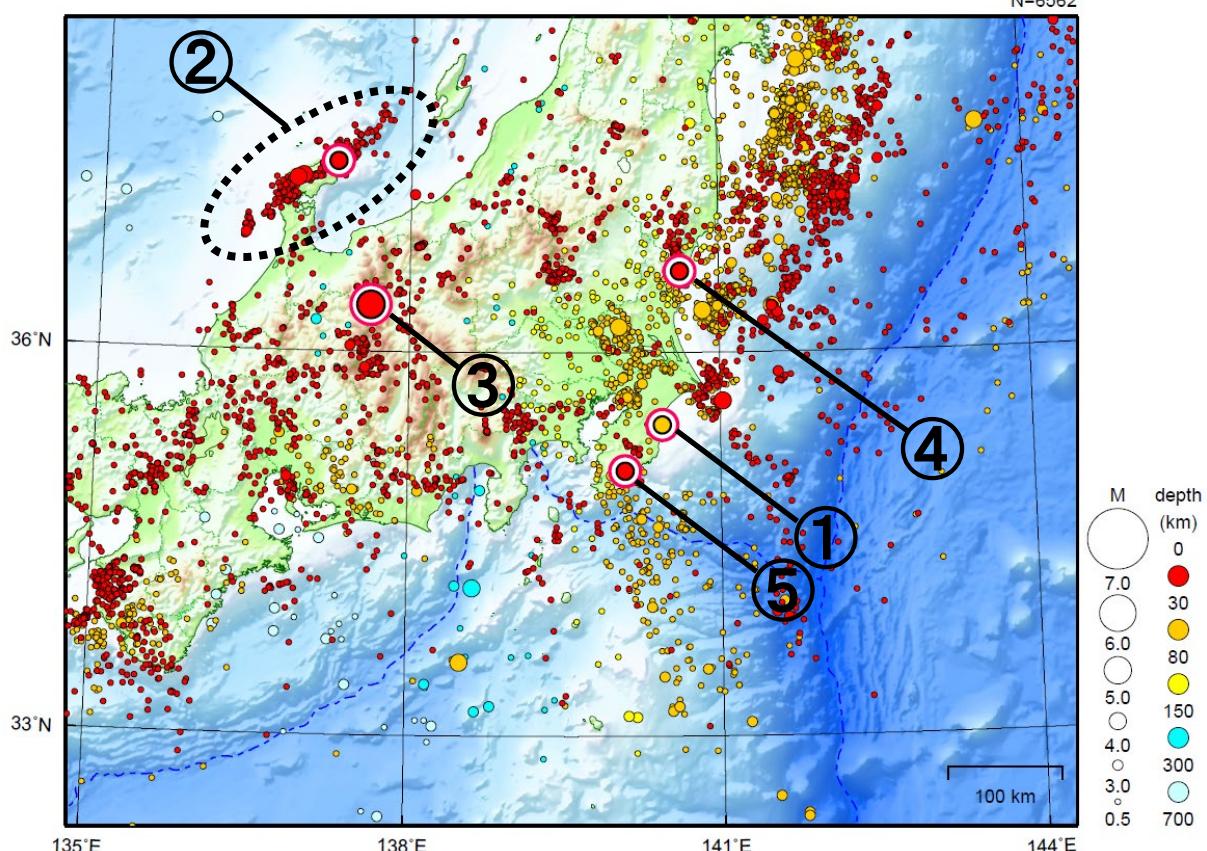
青色：2003年十勝沖地震〔Yamanaka and Kikuchi (2003)〕

灰色：2011年東北地方太平洋沖地震〔Yoshida et al. (2012)〕

関東・中部地方

2026/01/01 00:00 ~ 2026/01/31 24:00

N=6562



- ① 1月9日に千葉県東方沖でM4.6の地震（最大震度4）が発生した。
- ② 1月13日に石川県能登地方でM4.3の地震（最大震度4）が発生した。「令和6年能登半島地震」の地震活動域では、1月中に震度1以上を観測した地震が9回（震度4：1回、震度3：3回、震度2：1回、震度1：4回）発生した。
- ③ 1月15日14時40分に岐阜県飛騨地方でM4.8の地震（最大震度4）、同日14時48分にM5.2の地震（最大震度3）が発生した。
- ④ 1月24日に茨城県北部でM4.5の地震（最大震度4）が発生した。
- ⑤ 1月29日に千葉県南部でM4.5の地震（最大震度4）が発生した。

(図の範囲外)

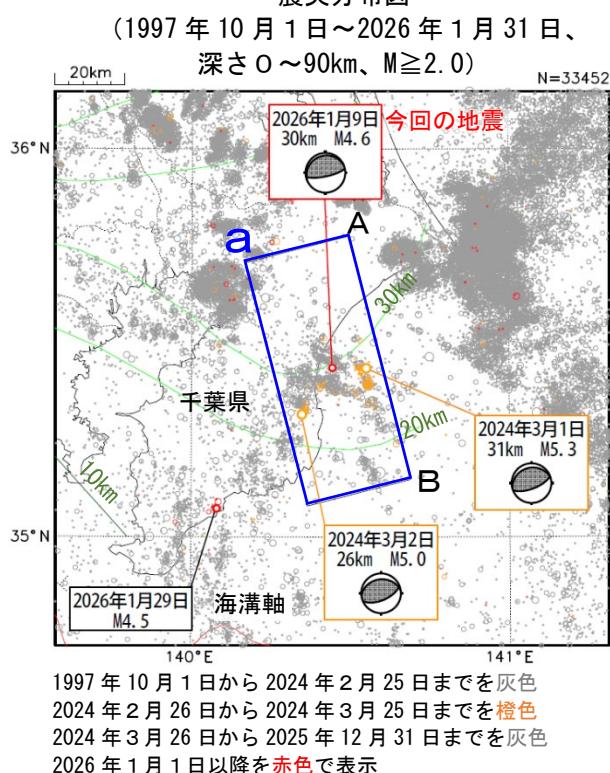
1月10日に硫黄島近海でM5.5の地震（最大震度3）が発生した。

1月22日に硫黄島近海でM6.5の地震（震度1以上を観測した地点はなし）が発生した。

[上述の地震は M6.0 以上または最大震度 4 以上、陸域で M4.5 以上かつ最大震度 3 以上、海域で M5.0 以上かつ最大震度 3 以上、その他、注目すべき活動のいずれかに該当する地震。]

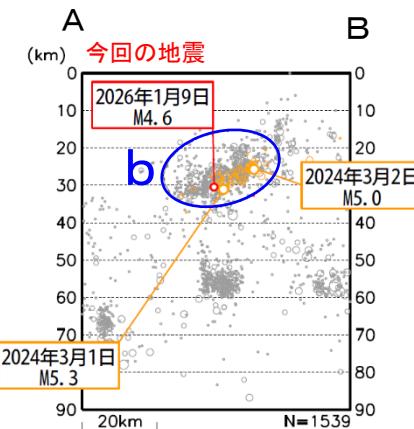
1月9日 千葉県東方沖の地震

震央分布図

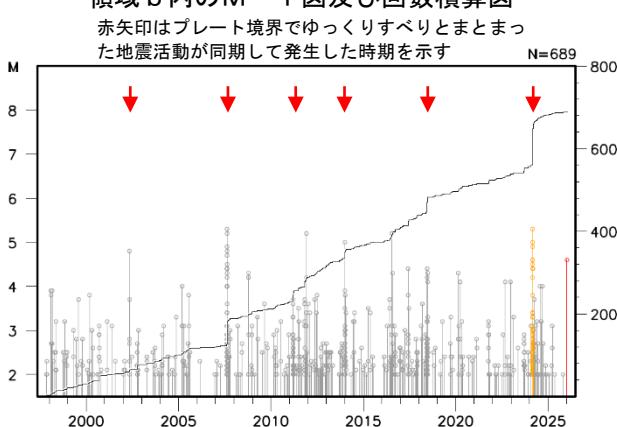


震央分布図中の緑色の破線は、弘瀬・他（2008）によるフィリピン海プレート上面のおおよその深さを示す。

領域a内の断面図（A-B投影）



領域b内のM-T図及び回数積算図



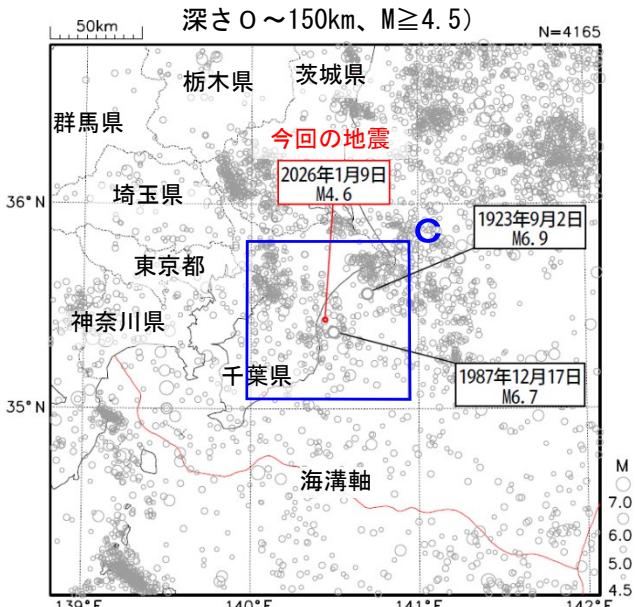
情報発表に用いた震央地名は【千葉県北東部】である。

2026年1月9日20時07分に千葉県東方沖の深さ30kmでM4.6の地震（最大震度4）が発生した。この地震の発震機構は、南北方向に圧力軸を持つ逆断層型で、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生した。

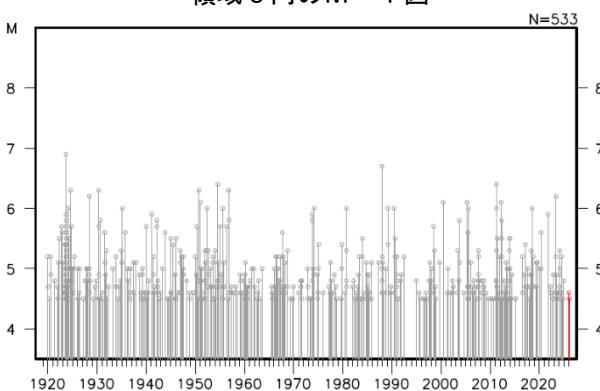
1997年10月以降の活動を見ると、今回の地震の震源付近（領域b）では時々、プレート境界で発生したゆっくりすべり（国土地理院及び防災科学技術研究所による）を伴うまとまった地震活動がある。2024年の地震活動では、2月26日から地震活動が見られ、3月1日にM5.3の地震（最大震度4）の地震が発生するなど、3月25日までに震度1以上を観測した地震が48回発生した。

1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域c）では、M6.0以上の地震が時々発生している。1987年12月17日に発生したM6.7の地震（最大震度5）では、死者2人、負傷者161人、住家全壊16棟、住家半壊102棟、住家一部破損72,580棟などの被害が生じた（被害は「日本被害地震総覧」による）。

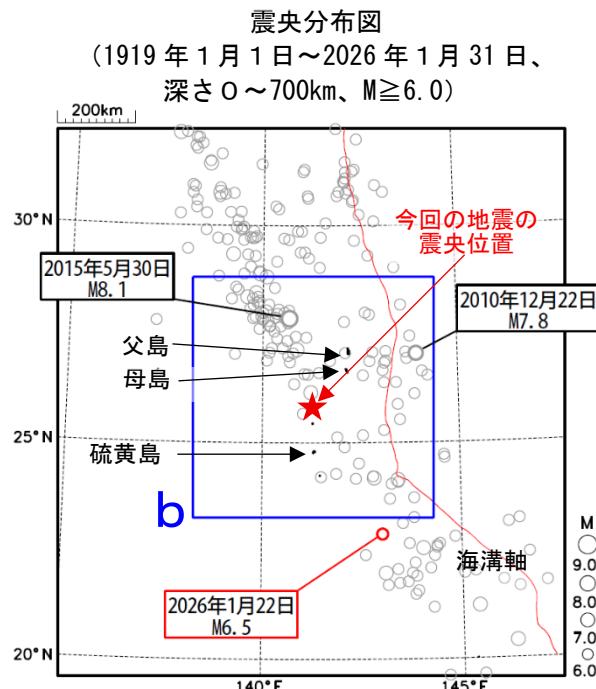
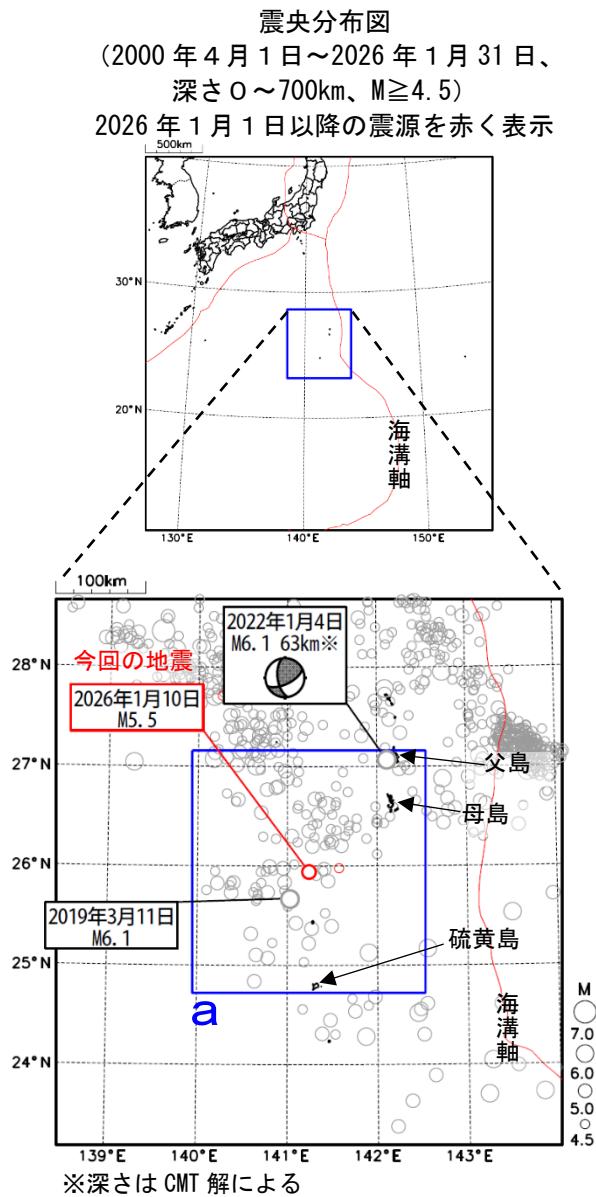
震央分布図
(1919年1月1日～2026年1月31日、
深さ0～150km、M≥4.5) N=4165



領域c内のM-T図



1月10日 硫黄島近海の地震

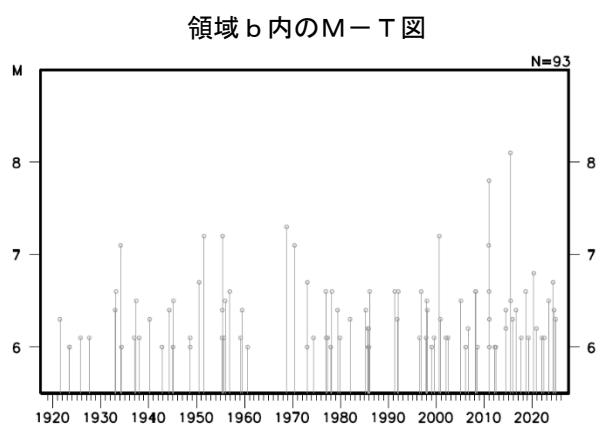
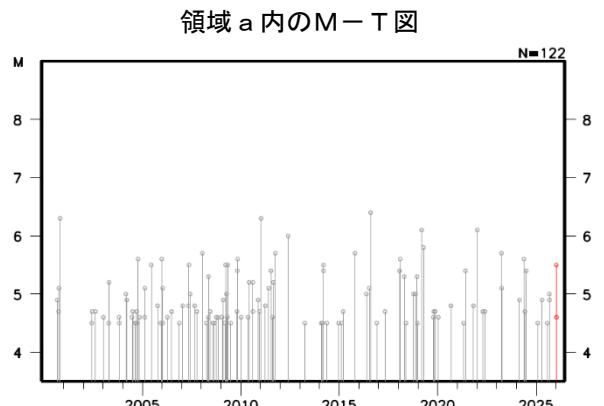


2026年1月10日08時51分に硫黄島近海でM5.5の地震（最大震度3）が発生した。

2000年4月以降の活動を見ると、今回の地震の震央付近（領域a）では、M6程度の地震が時々発生している。2022年1月4日にはM6.1の地震（最大震度5強）が発生し、1月31日までに震度1以上を観測する地震が14回（震度5強：1回、震度2：3回、震度1：10回）発生した。

1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域b）では、M7.0以上の地震が時々発生している。2010年12月22日には父島近海でM7.8の地震（最大震度4）が発生し、八丈島八重根で0.5m^(注)の津波など、岩手県及び関東地方南部から沖縄地方にかけて津波を観測した。また、2015年5月30日には小笠原諸島西方沖の深さ682kmでM8.1の地震（最大震度5強）が発生し、関東地方で軽傷者8人の被害が生じた（被害は総務省消防庁による）。

（注）巨大津波計の観測点により観測されたことを示す（観測単位は0.1m）。



1月13日 石川県能登地方の地震

(「令和6年能登半島地震」の地震活動)

震央分布図

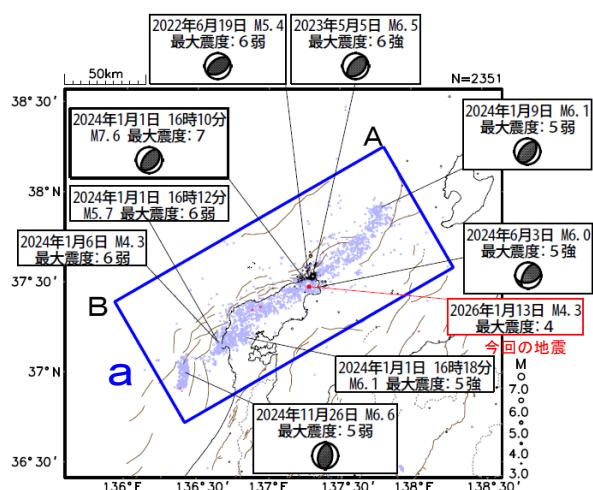
(2020年12月1日～2026年1月31日、
深さ0～30km、M≥3.0)

震源のプロット

黒色 2020年12月1日～2023年12月31日
水色 2024年1月1日～2025年12月31日
赤色 2026年1月1日～31日

吹き出しへは最大震度6弱以上の地震、M6.0以上の地震
及び今回の地震

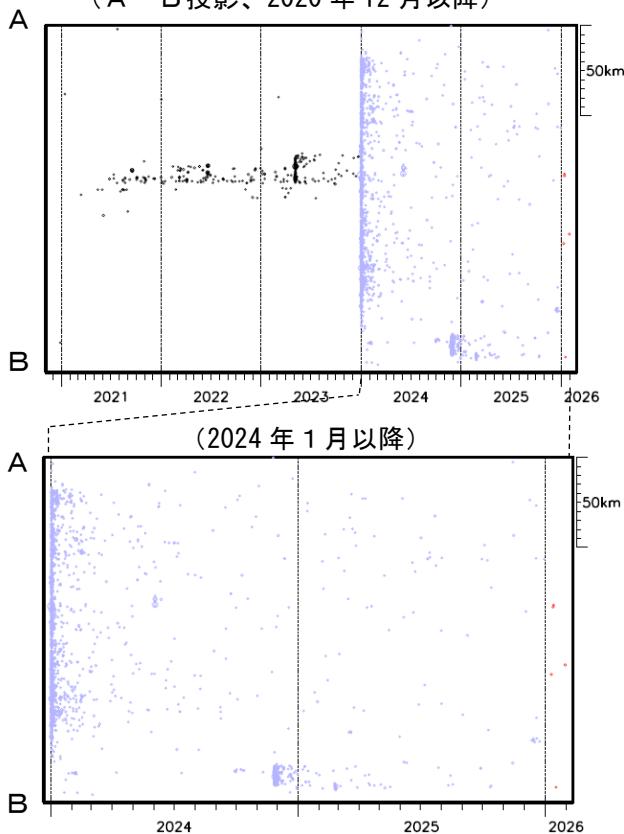
図中の発震機構はCMT解



図中の茶色の線は、地震調査研究推進本部の
長期評価による活断層を示す。

領域a内の時空間分布図

(A-B投影、2020年12月以降)



2026年1月13日05時09分に石川県能登地方の深さ12kmでM4.3の地震(最大震度4)が発生した。この地震は地殻内で発生した。

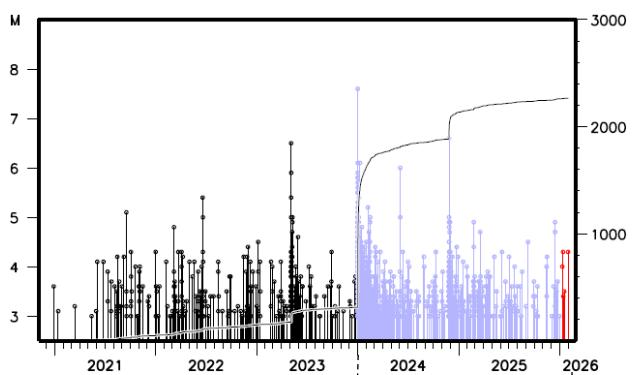
能登半島では2020年12月から地震活動が活発になり、2023年5月5日にはM6.5の地震(最大震度6強)が発生していた。2023年12月までの活動域は、能登半島北東部の概ね30km四方の範囲であった。

2024年1月1日16時10分に石川県能登地方の深さ16kmでM7.6の地震(最大震度7)が発生した後、地震活動はさらに活発になり、活動域は、能登半島及びその北東側の海域を中心とする北東～南西に延びる150km程度の範囲に広がっている。M7.6の地震後の地震活動域の西端の石川県西方沖で、2024年11月26日にM6.6の地震(最大震度5弱)が発生した。

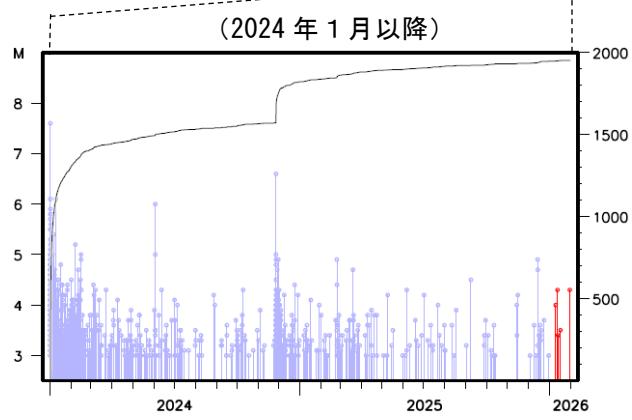
地震の発生数は増減を繰り返しながら大局的に緩やかに減少してきているが、1月中に震度1以上を観測した地震は9回発生するなど、地震活動が活発になった2021年以前と比較すると活発な状態が継続している(次ページ参照)。

領域a内のM-T図及び回数積算図

(2020年12月以降)

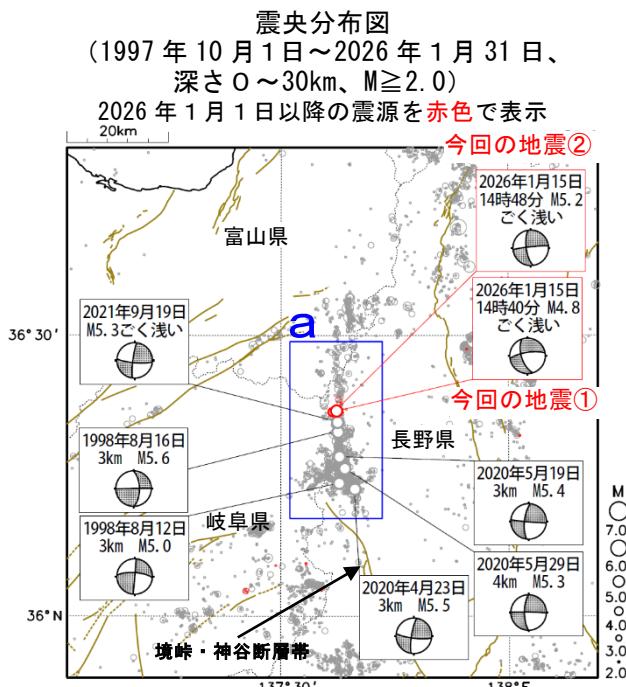


(2024年1月以降)



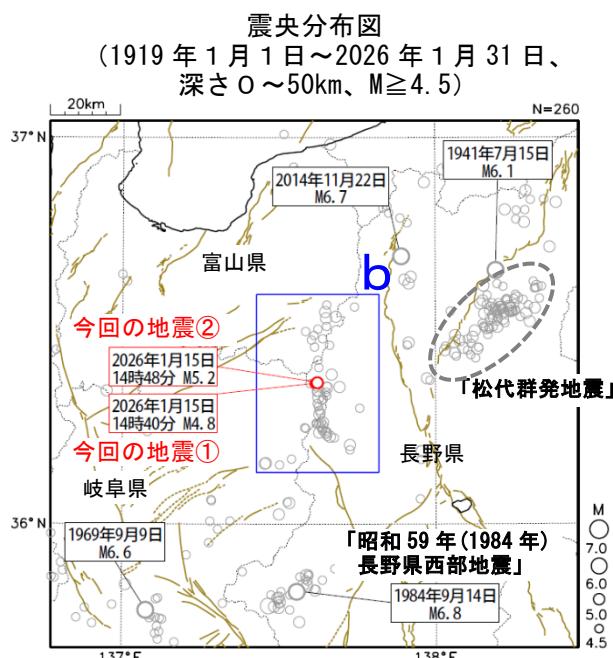
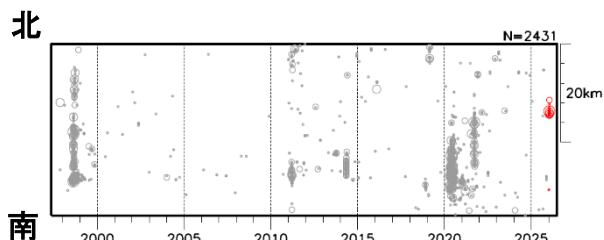
1月15日 岐阜県飛騨地方の地震 (長野・岐阜県境付近の地震)

14時40分に発生したM4.8の地震の情報発表に用いた震央地名は【富山県東部】である。



図中の茶色の細線は、地震調査研究推進本部の長期評価による主要活断層帯を示す。

領域 a 内の時空間分布図（南北投影）



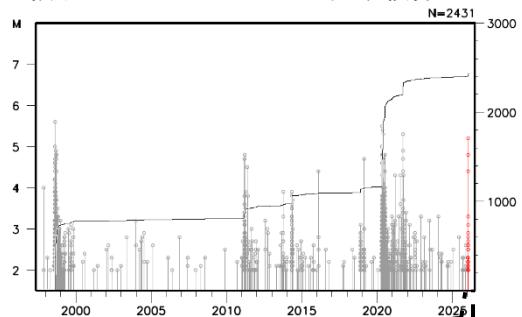
図中の**茶色**の細線は、地震調査研究推進本部の長期評価による主要活断層帯を示す。

2026年1月15日14時40分に岐阜県飛騨地方のごく浅い場所でM4.8の地震（最大震度4、図中①）が発生した。この地震の後、同日14時48分にはほぼ同じ場所でM5.2の地震（最大震度3、図中②）が発生した。これらの地震の発震機構は北西-南東方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型である。これらの地震は地殻内で発生した。今回の地震の震央付近では、1月中に震度1以上を観測する地震が8回（震度4：1回、震度3：1回、震度2：3回、震度1：3回）発生した。

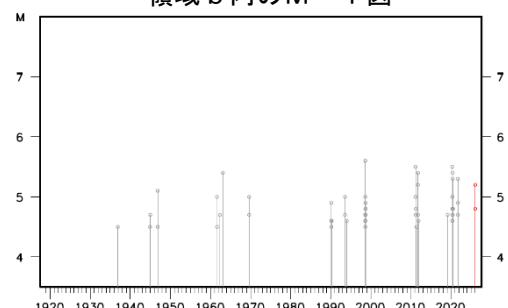
1997年10月以降の活動をみると、領域aでは時々まとまった地震活動がある。1998年の地震活動では、8月12日にM5.0（最大震度5弱）の地震が発生するなど、8月1日から10月31日までに震度1以上を観測した地震が284回発生した。また2020年の地震活動では、4月23日にM5.5（最大震度4）の地震が発生するなど、4月1日から7月31日までに震度1以上を観測する地震が225回発生した。

1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域b）では、M5程度の地震が時々発生しているものの、M6.0以上の地震は発生していない。

領域 a 内のM-T 図及び回数積算図

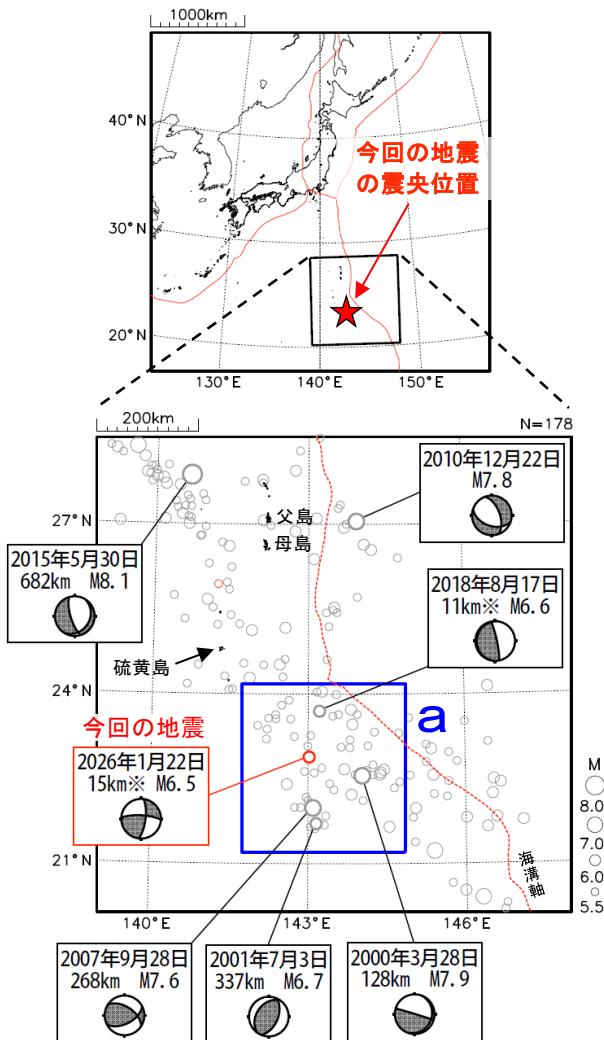


領域 b 内の $M-T$ 図

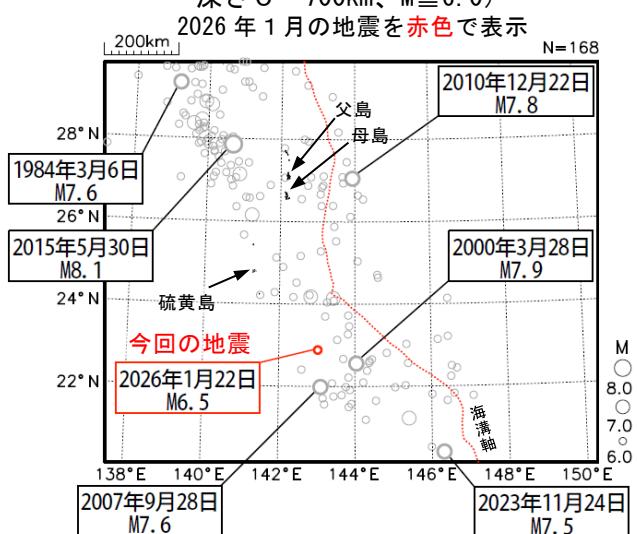


1月22日 硫黄島近海の地震

震央分布図
 (2000年1月1日～2026年1月31日、
 深さ0～700km、M≥5.5)
 2026年1月の地震を赤色で表示
 図中の発震機構はCMT解
 深さに「※」を付したものは、CMT解による



震央分布図
 (1919年1月1日～2026年1月31日、
 深さ0～700km、M≥6.0)



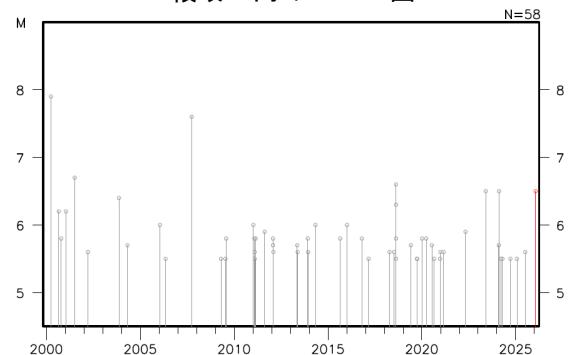
2026年1月22日01時37分に硫黄島近海の深さ15km(CMT解による)でM6.5の地震(震度1以上を観測した地点はなし)が発生した。この地震の発震機構(CMT解)は北西一南東方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型である。

2000年1月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近(領域a)では、M6.0以上の地震が時々発生している。

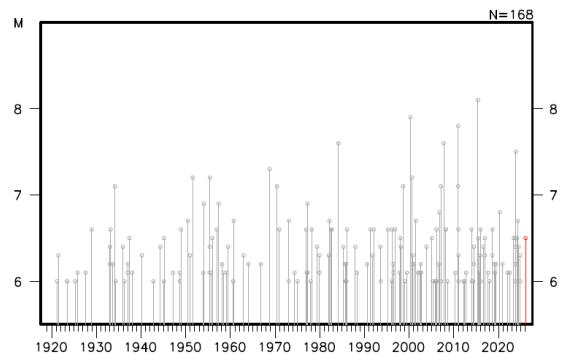
1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺では、M7.0以上の地震が時々発生している。2010年12月22日には父島近海でM7.8の地震(最大震度4)が発生し、八丈島八重根で0.5m(注)の津波など、岩手県及び関東地方南部から沖縄地方にかけて津波を観測した。また、2015年5月30日には小笠原諸島西方沖の深さ682kmでM8.1の地震(最大震度5強)が発生し、関東地方で軽傷者8人などの被害が生じた(被害は総務省消防庁による)。

(注)巨大津波計の観測点により観測されたことを示す(観測単位は0.1m)。

領域a内のM-T図



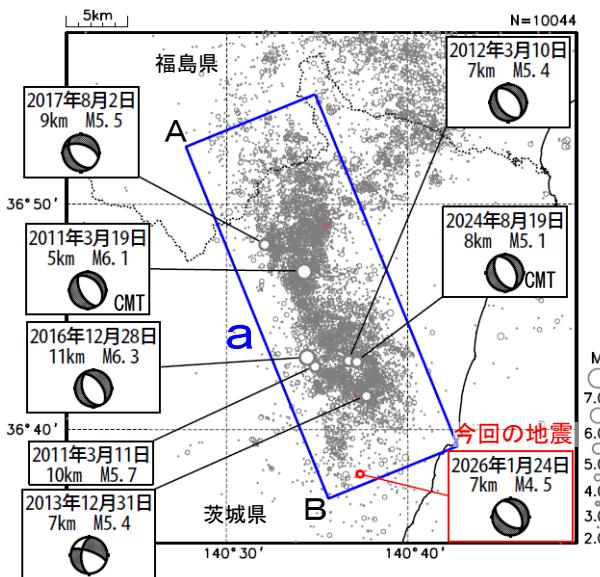
左図の領域内のM-T図



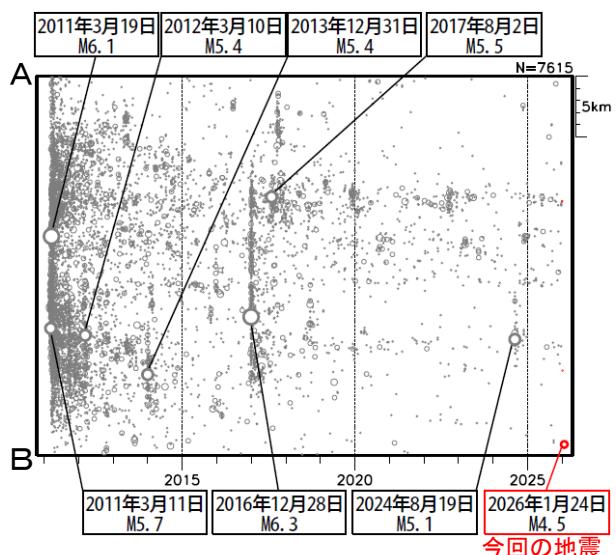
1月24日 茨城県北部の地震

震央分布図

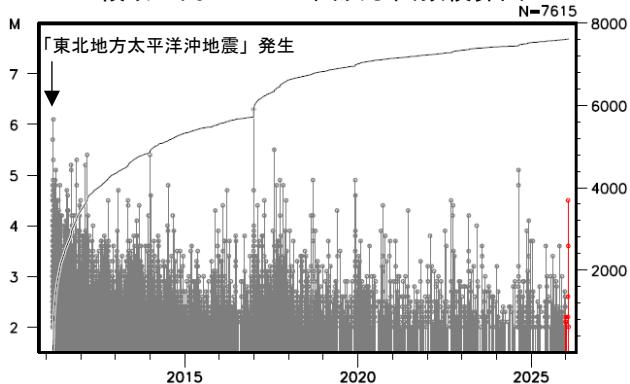
(2011年1月1日～2026年1月31日、
深さ0～20km、M≥2.0)
2026年1月の地震を赤色で表示



領域a内の時空間分布図（A-B投影）



領域a内のM-T図及び回数積算図

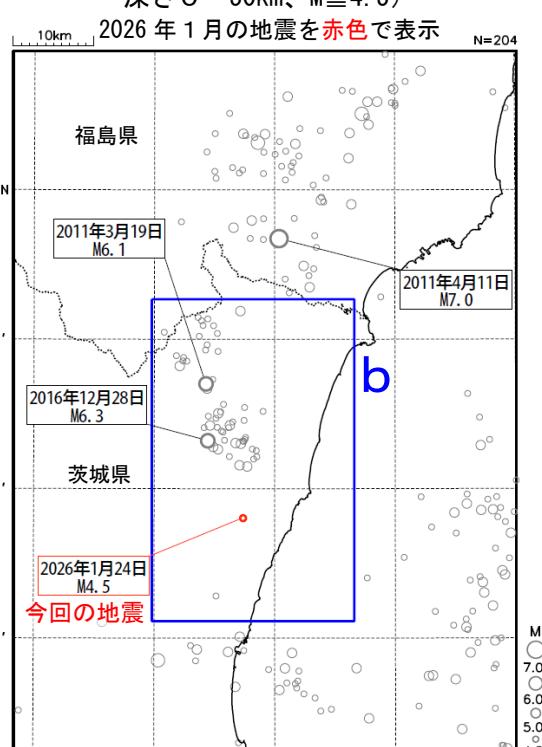


2026年1月24日06時19分に茨城県北部の深さ7kmでM4.5の地震(最大震度4)が発生した。この地震は地殻内で発生した。この地震の発震機構は北東-南西方向に張力軸を持つ正断層型である。

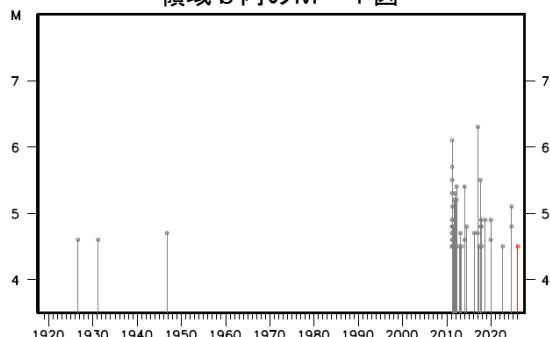
今回の地震の震央周辺(領域a)では、「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」(以下、「東北地方太平洋沖地震」)の発生後に地震活動が活発化し、2016年12月28日に発生したM6.3の地震(最大震度6弱)では、茨城県で軽傷2人、住家半壊1棟、一部破損25棟などの被害が生じた(被害は総務省消防庁による)。この活発な地震活動は徐々に減衰しつつも継続している。

1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺(領域b)では、「東北地方太平洋沖地震」の発生前はM4.5以上の地震がまれに発生していて、「東北地方太平洋沖地震」の発生後はM4.5以上の地震が度々発生している。

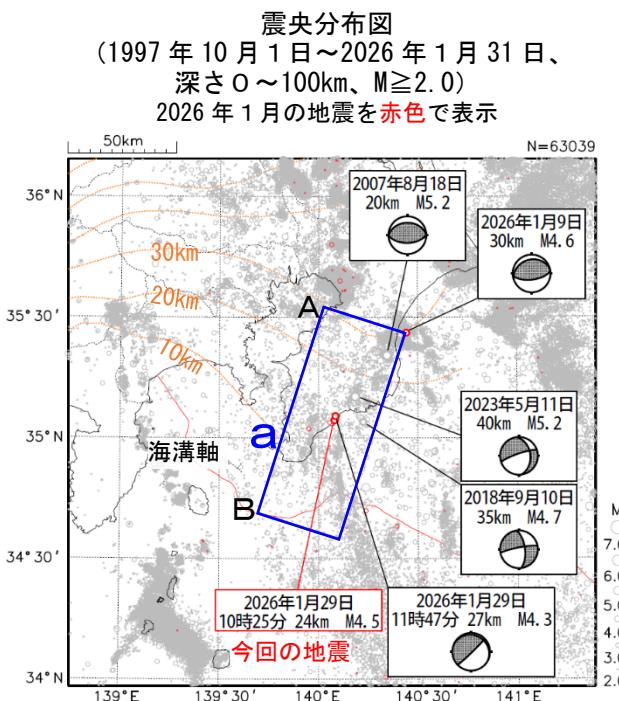
震央分布図 (1919年1月1日～2026年1月31日、 深さ0～50km、M≥4.5)



領域b内のM-T図

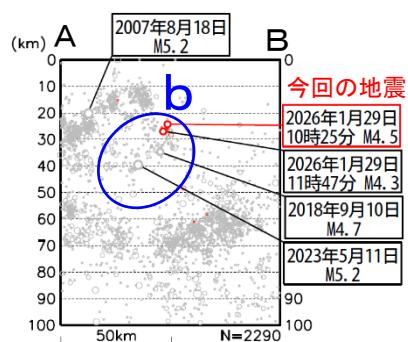


1月29日 千葉県南部の地震

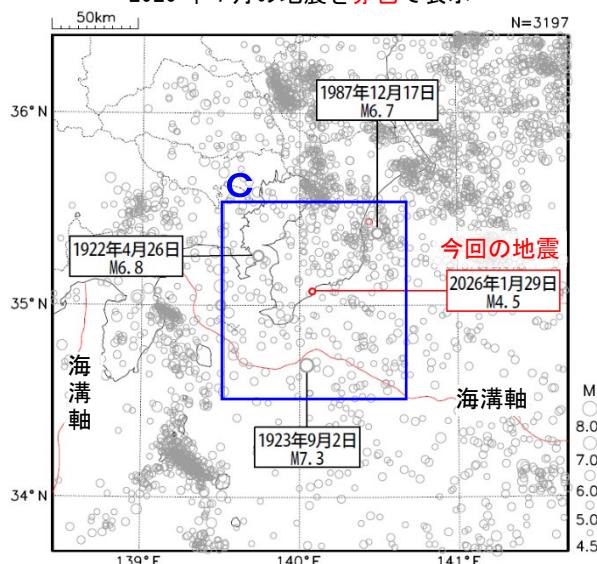


震央分布図中の橙色の破線は弘瀬・他（2008）による
フィリピン海プレート上面のおおよその深さを示す。

領域a内の断面図（A-B投影）



震央分布図
(1919年1月1日～2026年1月31日、
深さ0～120km、M≥4.5)
2026年1月の地震を赤色で表示

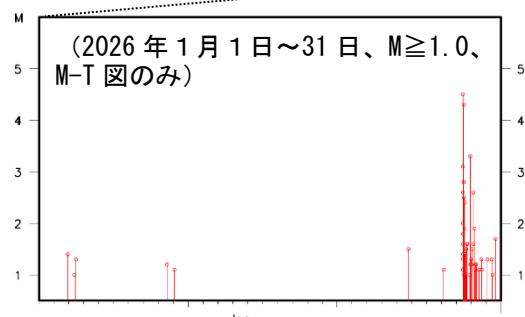
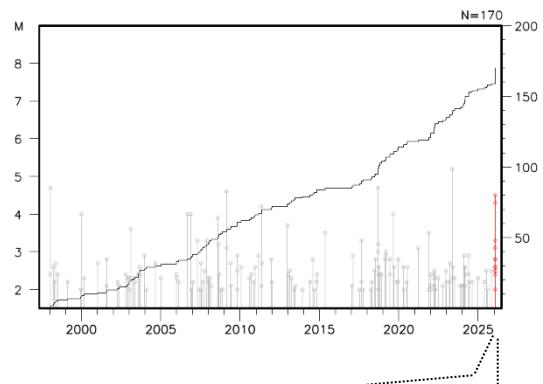


2026年1月29日10時25分に千葉県南部の深さ24kmでM4.5の地震（最大震度4）が発生した。この地震はフィリピン海プレート内部で発生した。今回の地震の震源付近では、29日中に震度1以上を観測する地震が6回（震度4：1回、震度3：1回、震度2：1回、震度1：2回）発生した。

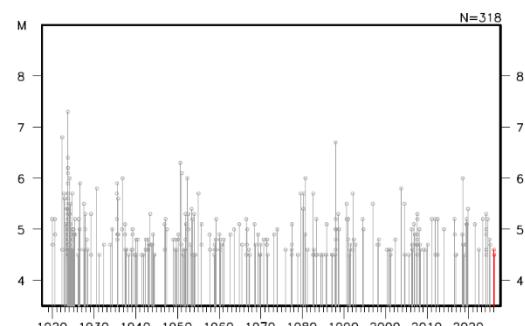
1997年10月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近（領域b）では、M4.0以上の地震が時々発生している。2023年5月11日にはM5.2の地震（最大震度5強）が発生した。この地震により、負傷者8人、住家一部破損77棟の被害が生じた（2024年3月6日17時00分現在、総務省消防庁による）。

1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域c）ではM6.0以上の地震が時々発生している。1987年12月17日にはM6.7（最大震度5）の地震が発生した。この地震により、死者2人、負傷者161人、住家全壊16棟、住家半壊102棟、住家一部破損7万余棟などの被害が生じた（被害は「日本被害地震総覧」による）。

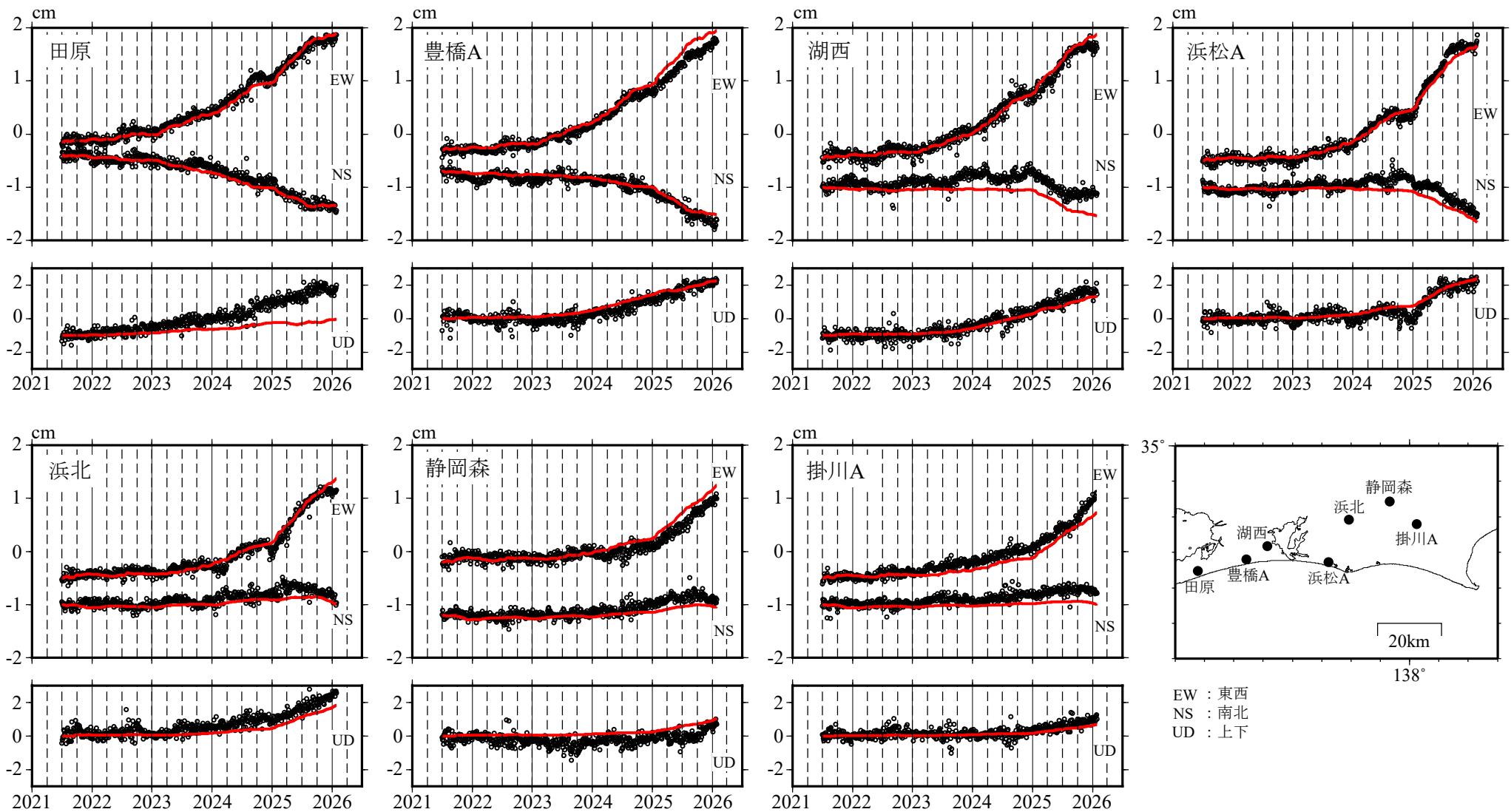
領域b内のM-T図及び回数積算図



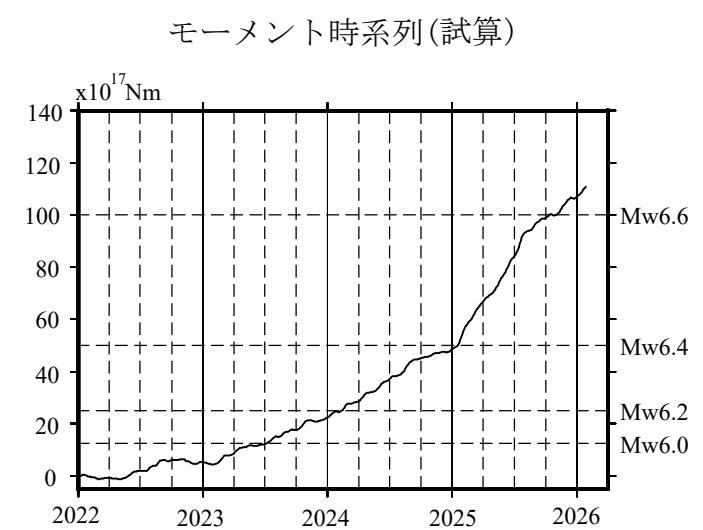
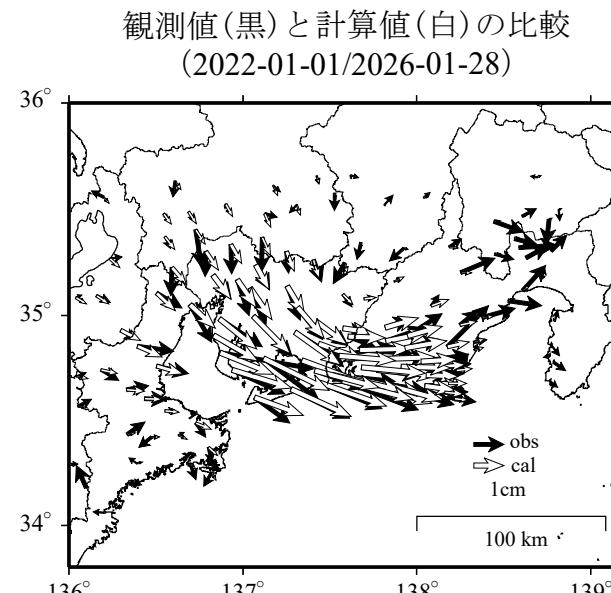
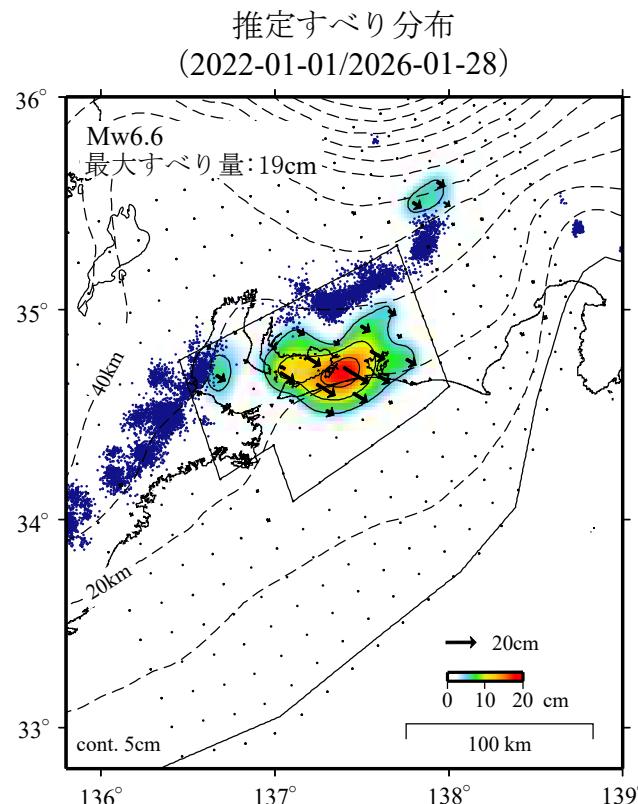
領域c内のM-T図



東海地域の観測点の座標時系列(黒丸)と計算値(赤線)
時間依存のインバージョン



GNSSデータから推定された東海地域の長期的ゆっくりすべり(暫定)



Mw及び最大すべり量はプレート面に沿って評価した値を記載している。
すべり量(カラー)及びすべりベクトルは水平面に投影したものを示している。
推定したすべり量が標準偏差(σ)の3倍以上のグリッドを黒色で示している。

使用データ：GEONETによる日々の座標値(F5解、R5解)
 • F5解(2021-07-01/2026-01-10) + R5解(2026-01-11/2026-01-28)
 • トレンド期間：2020-01-01/2022-01-01(年周・半年周成分は補正していない)

モーメント計算範囲：左図の黒枠内側

観測値：3日間の平均値をカルマンフィルターで平滑化した値
 黒破線：フィリピン海プレート上面の等深線(Hirose et al., 2008)

すべり方向：プレートの沈み込み方向に拘束
 青丸：低周波地震(気象庁一元化震源)(期間：2022-01-01/2026-01-28)
 固定局：三隅

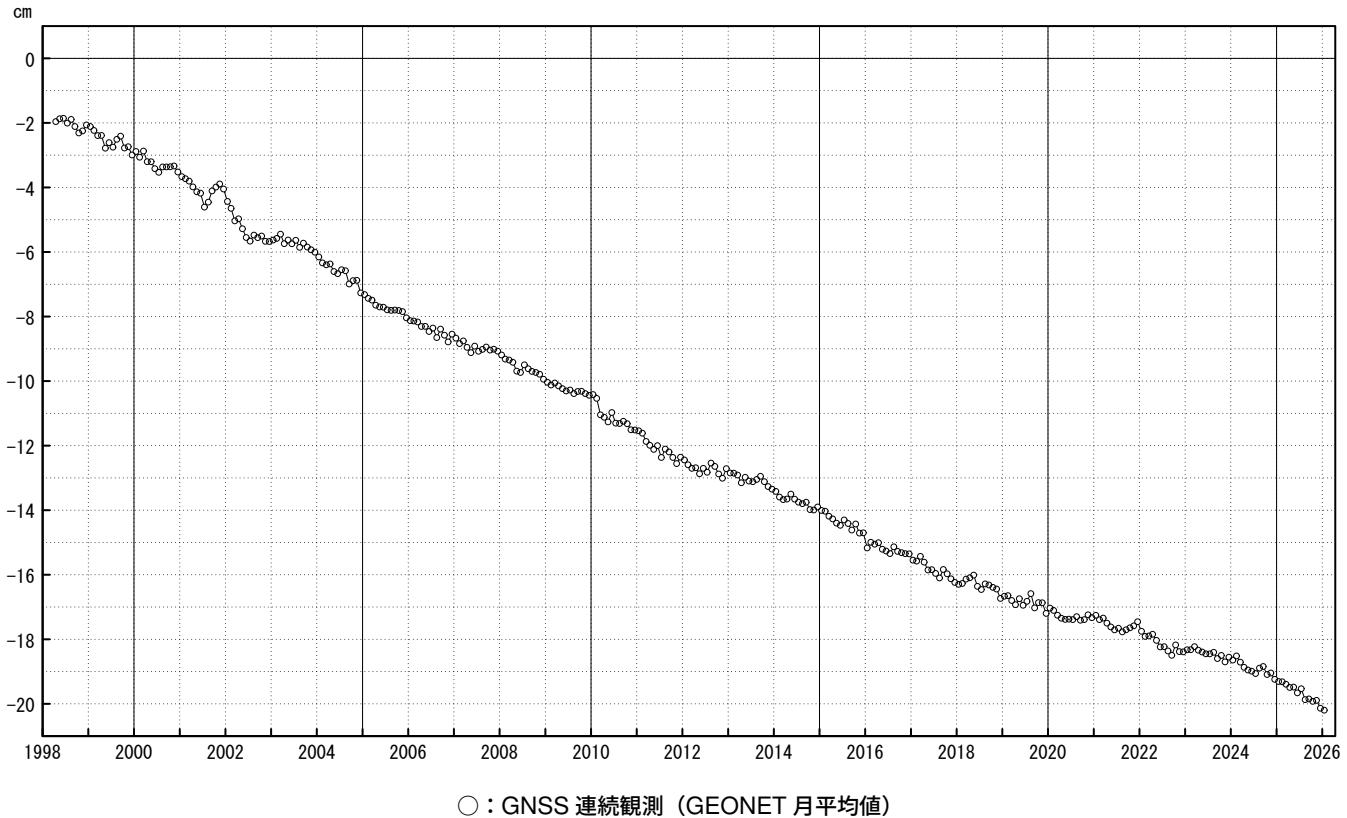
*モーメント：断層運動のエネルギーの目安となる量。
 *電子基準点の保守等による変動は補正している。
 *気象庁カタログ(2017年以降)の短期的ゆっくりすべりを補正している。
 *共通誤差成分を推定している。
 *平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震の粘弾性変形は補正している(Suito, 2017)。
 *令和6年能登半島地震に伴う地殻変動は補正している。
 *令和6年能登半島地震の粘弾性変形は補正している(Suito, 2025)。

御前崎 電子基準点の上下変動

水準測量と GNSS 連続観測

掛川に対して、御前崎が沈降する長期的な傾向が続いている。

掛川 A (161216) - 御前崎 A (091178)

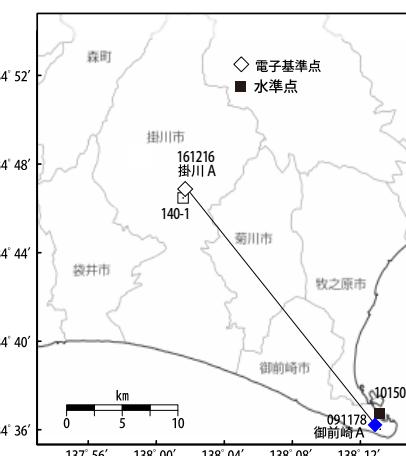
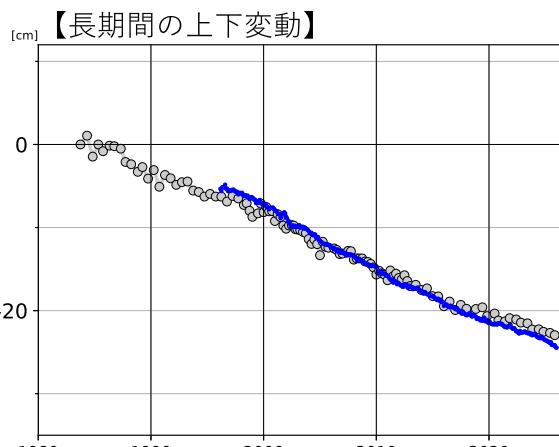


- GNSS 連続観測のプロット点は、GEONET による日々の座標値 (F5: 最終解) から計算した値の月平均値。最新のプロット点は 1 月 1 日～1 月 10 日の平均。

※ 1 2009 年 8 月 11 日の駿河湾の地震に伴う電子基準点「御前崎」の局所的な変動について、地震前後の水準測量で得られた「御前崎」周辺の水準点との比高の差を用いて補正を行った。

※ 2 電子基準点「御前崎 A」については、2010 年 3 月 23 日まで電子基準点「御前崎」のデータを使用。

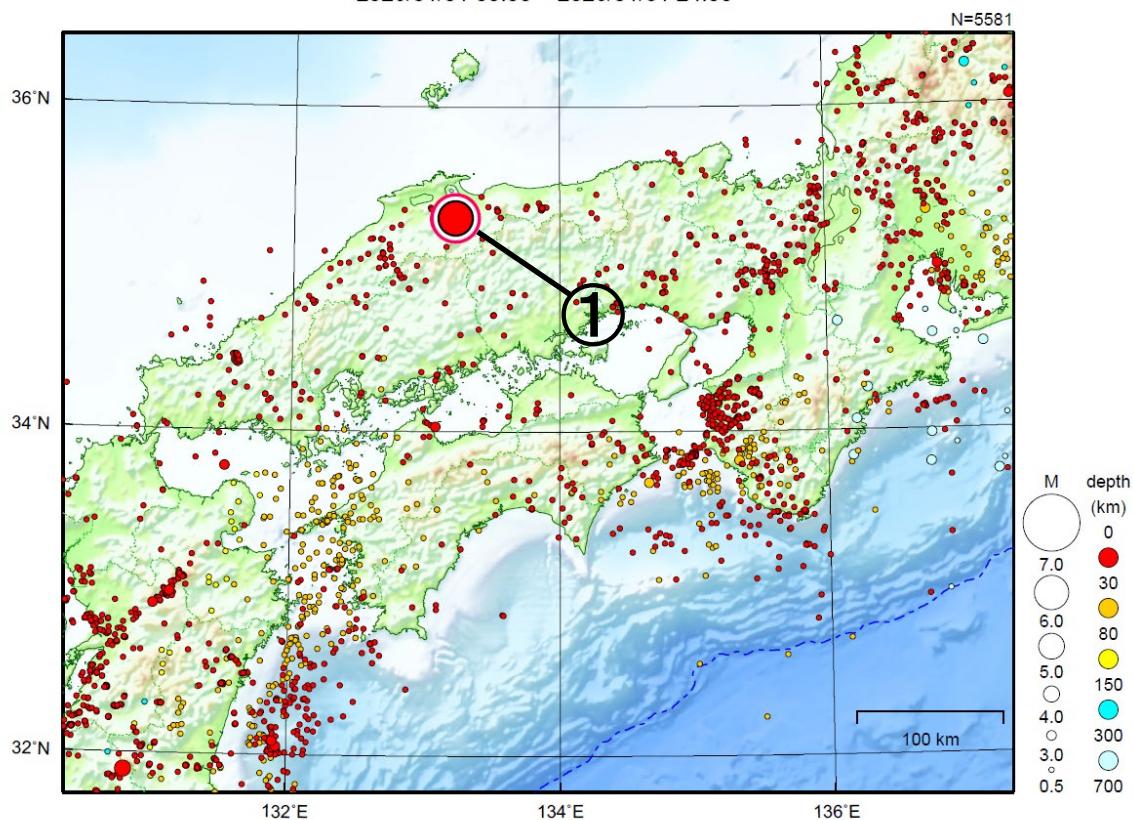
※ 3 電子基準点「掛川 A」については、2017 年 1 月 29 日まで電子基準点「掛川」のデータを使用。



- 青色のプロットは上記の GEONET による日々の座標値の月平均値。
- 灰色のプロットは電子基準点の最寄りの水準点「10150」の水準測量結果を示している（固定：140-1）。

近畿・中国・四国地方

2026/01/01 00:00 ~ 2026/01/31 24:00

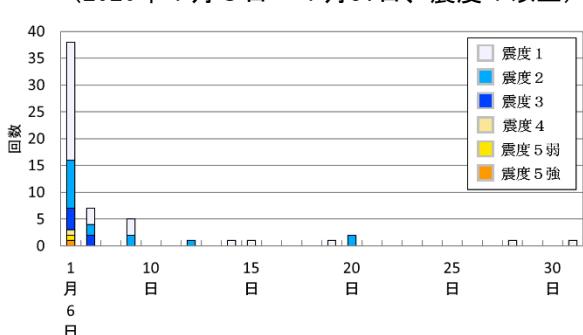
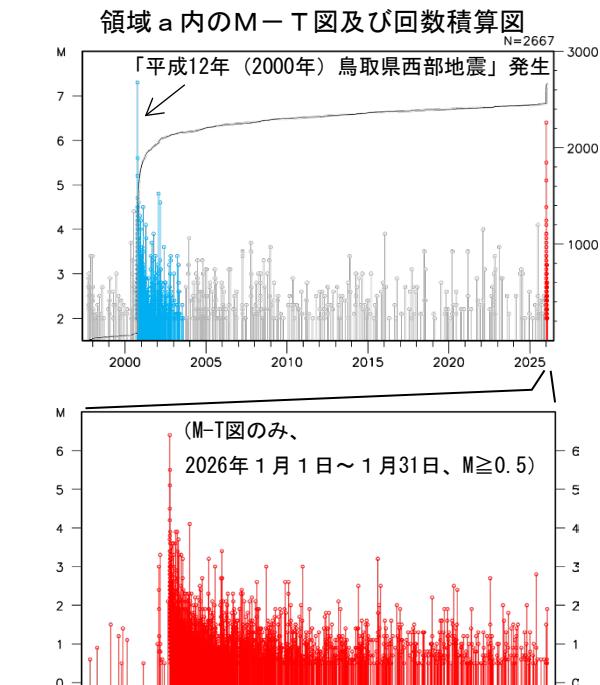
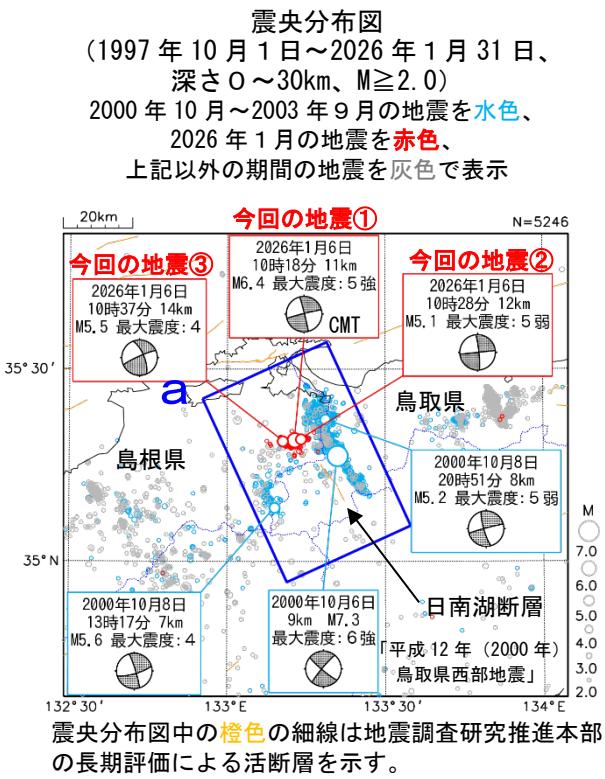


地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOPO30 及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02v2 を使用

- ① 1月6日に島根県東部でM6.4の地震（最大震度5強）が発生した。島根県東部では1月6日から31日までに震度1以上を観測する地震が58回（震度5強：1回、震度5弱：1回、震度4：1回、震度3：6回、震度2：16回、震度1：33回）発生した。

[上述の地震は M6.0 以上または最大震度 4 以上、陸域で M4.5 以上かつ最大震度 3 以上、海域で M5.0 以上かつ最大震度 3 以上、その他、注目すべき活動のいずれかに該当する地震。]

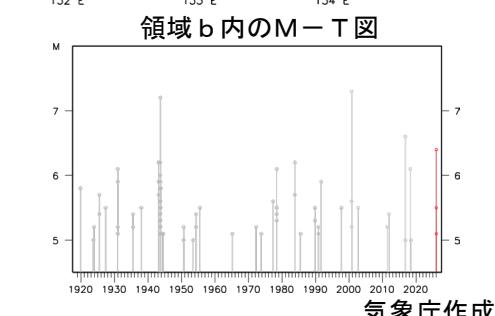
1月6日 島根県東部の地震



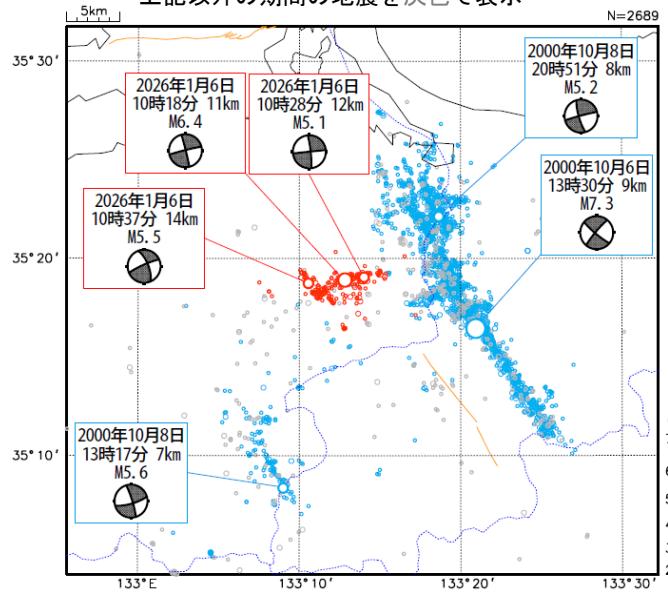
2026年1月6日10時18分に島根県東部の深さ11kmでM6.4の地震（最大震度5強、図中①）が発生した。この地震は地殻内で発生した。発震機構（CMT解）は、西北西～東南東方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型である。この地震の震央付近では、5日16時43分にM3.0の地震（最大震度1）及び同日18時42分にM3.3の地震（最大震度2）が発生した。また、M6.4の地震発生後には、6日10時28分にM5.1の地震（最大震度5弱、図中②）及び同日10時37分にM5.5の地震（最大震度4、図中③）が発生するなど、M5.0を超える地震が発生した。6日から31日までに震度1以上を観測した地震が58回（震度5強：1回、震度5弱：1回、震度4：1回、震度3：6回、震度2：16回、震度1：33回）発生した。この地震により、負傷者15人、住家一部破損114棟の被害が生じた（被害は2026年1月14日17時00分現在、総務省消防庁による）。

1997年10月以降の活動を見ると、今回の地震の震央付近（領域a）では、「平成12年（2000年）鳥取県西部地震」が発生している。この地震により、負傷者182人、住家全壊435棟などの被害が生じた（被害は総務省消防庁による）。

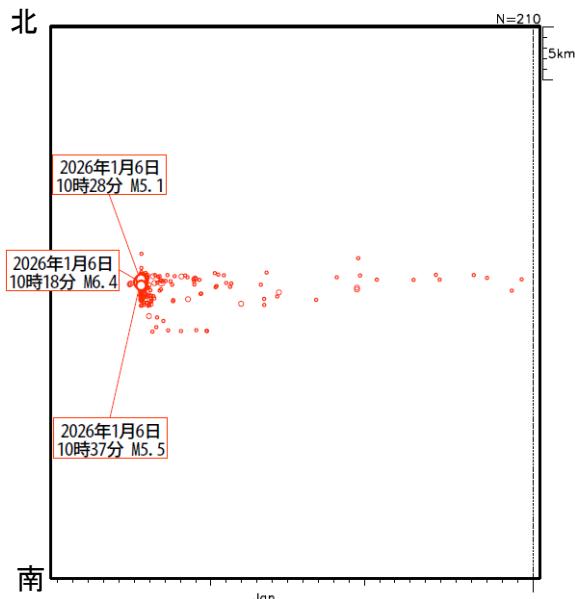
1919年以降の活動を見ると、今回の地震の震央周辺（領域b）では、M6.0程度の地震が時々発生している。このうち、1943年9月10日に発生したM7.2の地震（鳥取地震、最大震度6）では、死者1,083人、住家全壊7,485棟などの被害が生じた（被害は「日本被害地震総覧」による）。



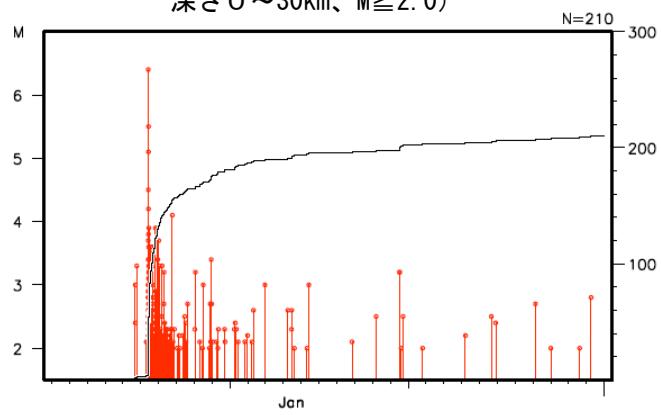
震央分布図（前ページの拡大図）
 (1997年10月1日～2026年1月31日、
 深さ0～30km、M≥2.0)
 2000年10月～2003年9月の地震を水色、
 2026年1月の地震を赤色、
 上記以外の期間の地震を灰色で表示



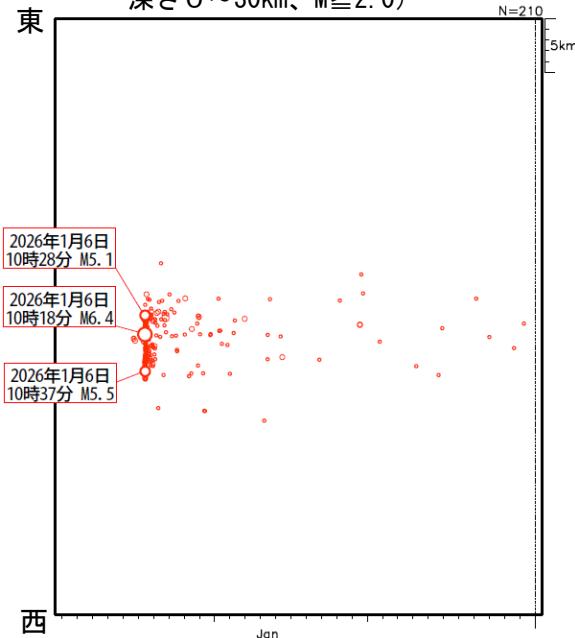
震央分布図内の時空間分布図（南北投影）
 (2026年1月1日～1月31日、
 深さ0～30km、M≥2.0)



震央分布図内のM-T回数積算図
 (2026年1月1日～1月31日、
 深さ0～30km、M≥2.0)



震央分布図内の時空間分布図（東西投影）
 (2026年1月1日～1月31日、
 深さ0～30km、M≥2.0)

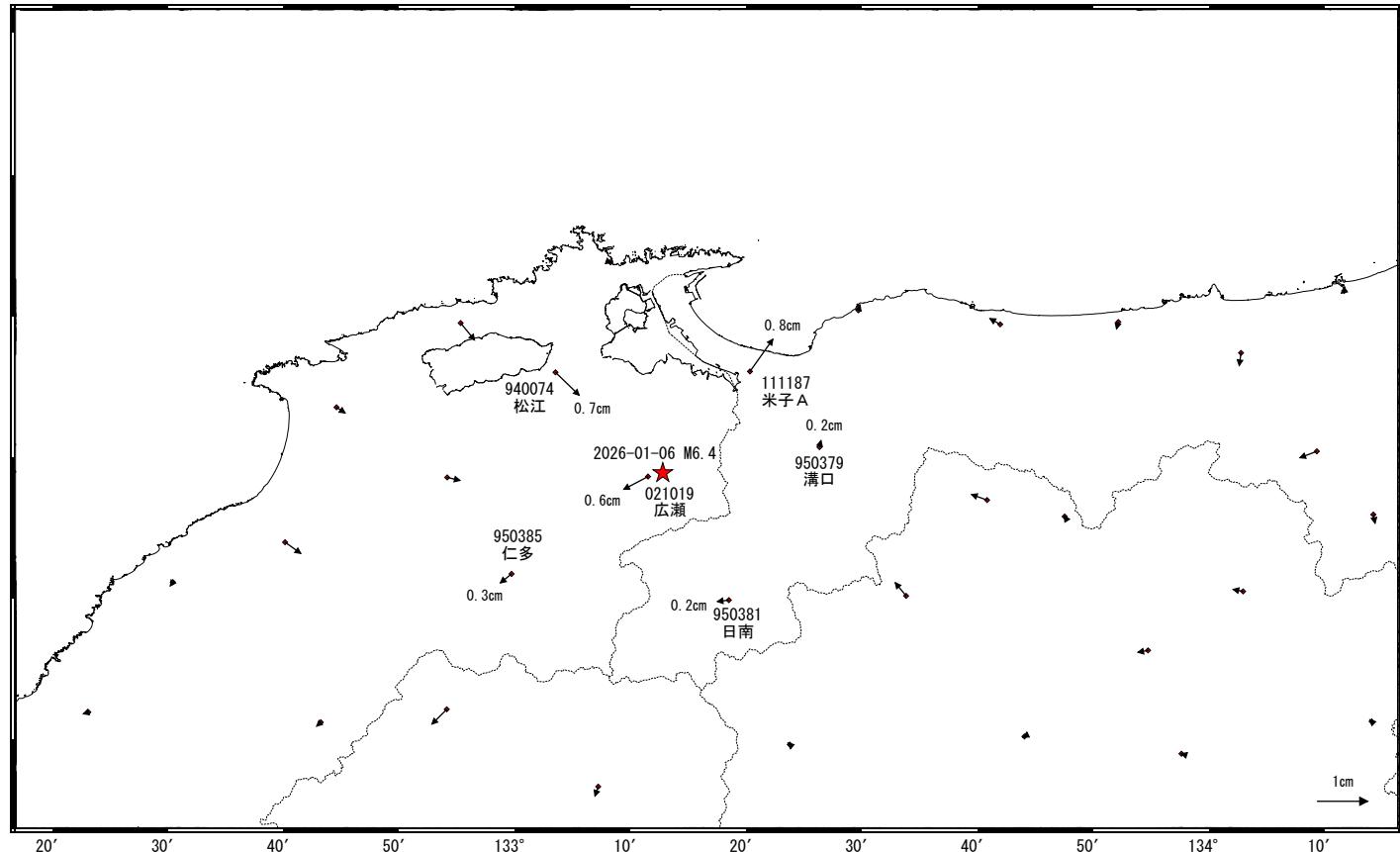


島根県東部の地震(1月6日 M6.4)前後の観測データ(暫定)

この地震に伴いわずかな地殻変動が観測された。

地殻変動(水平)

基準期間: 2025-12-30 ~ 2026-01-05 [F5: 最終解]
比較期間: 2026-01-07 ~ 2026-01-13 [R5: 速報解]

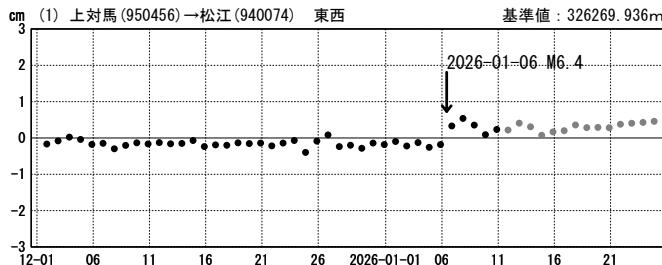


★震央

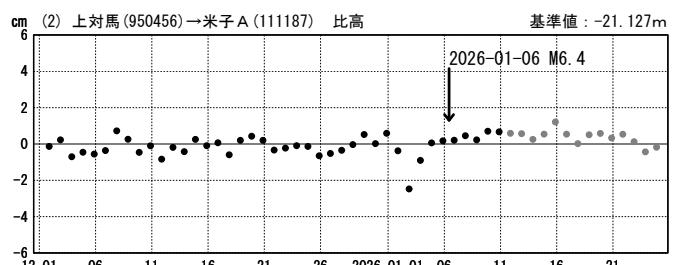
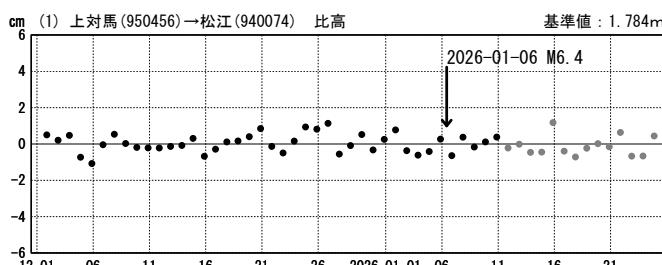
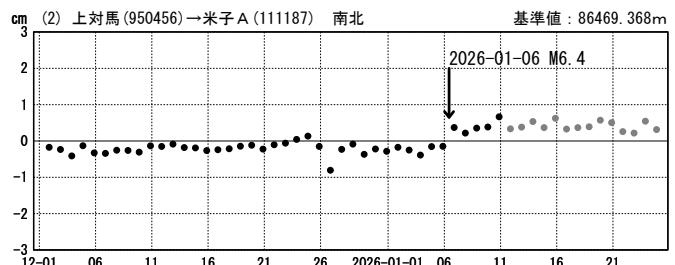
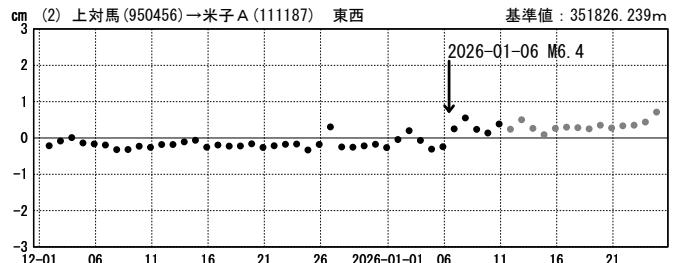
☆固定局: 上対馬(950456) (長崎県)

成分変化グラフ

期間: 2025-12-01 ~ 2026-01-25 JST



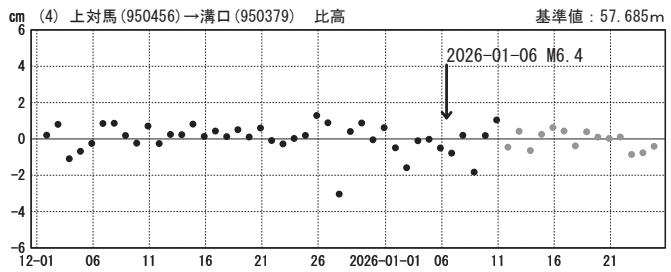
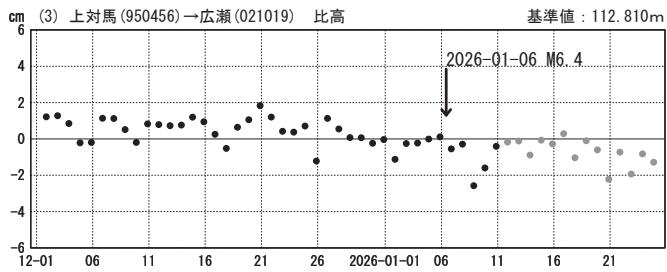
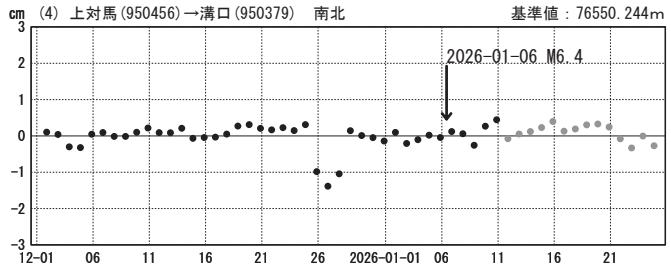
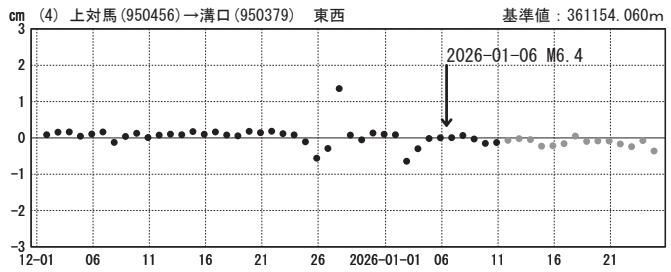
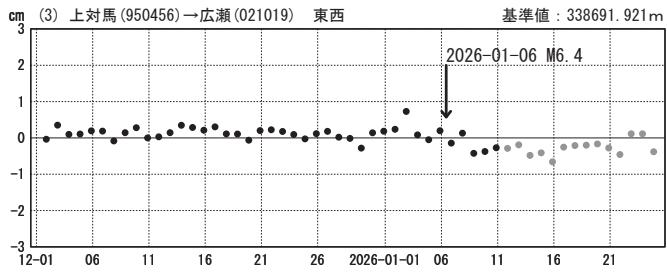
期間: 2025-12-01 ~ 2026-01-25 JST



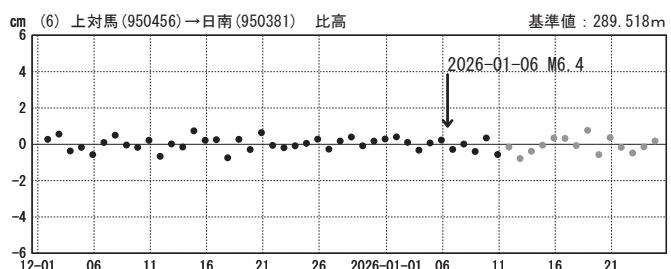
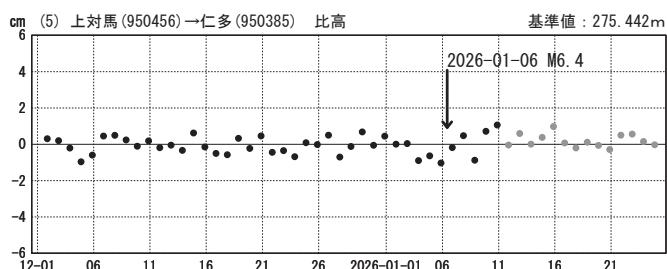
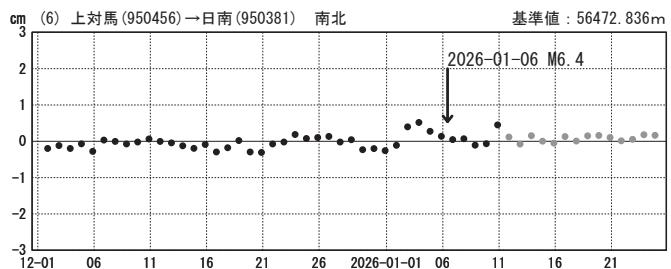
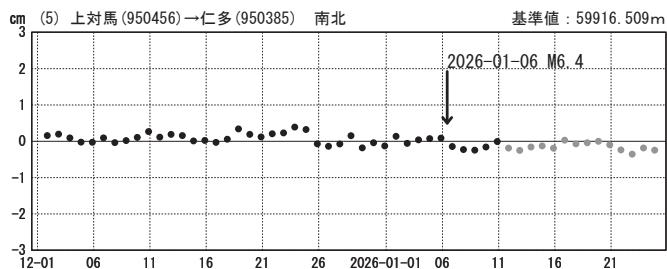
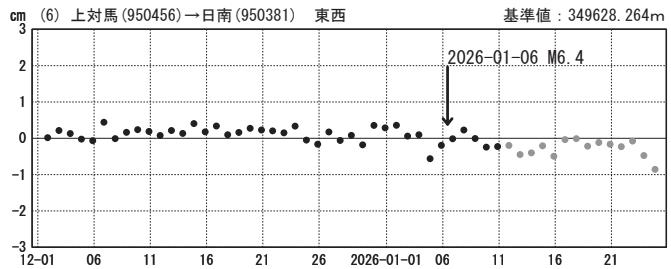
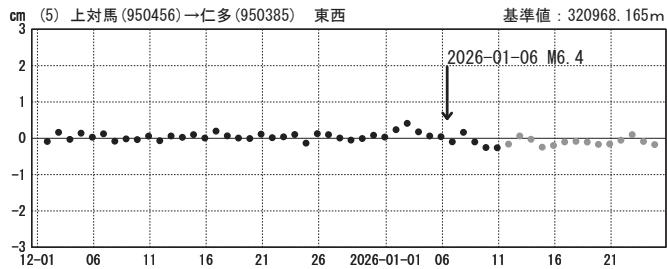
●---[F5: 最終解] ●---[R5: 速報解]

成分変化グラフ

期間：2025-12-01～2026-01-25 JST



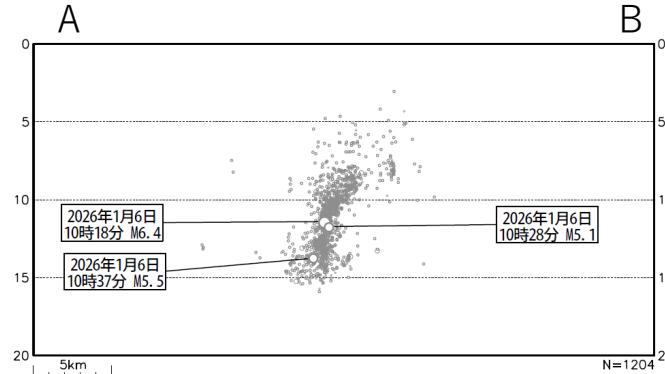
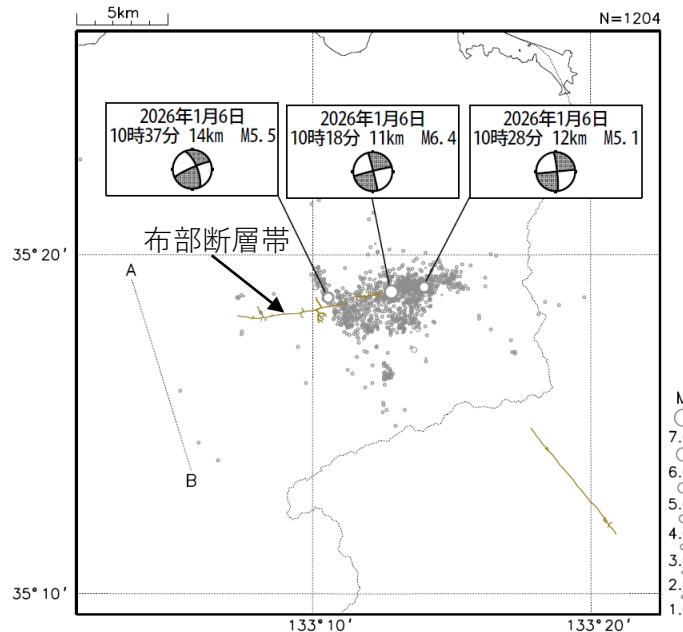
期間：2025-12-01～2026-01-25 JST



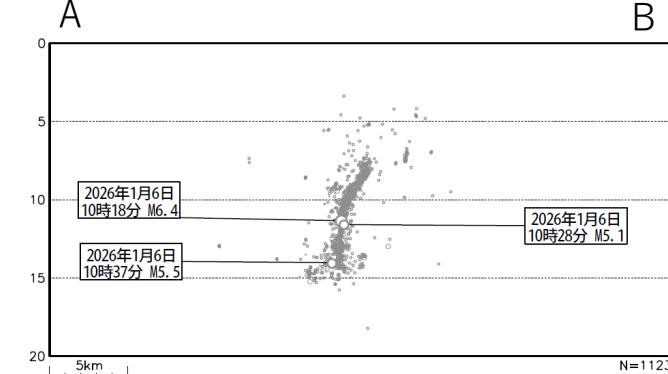
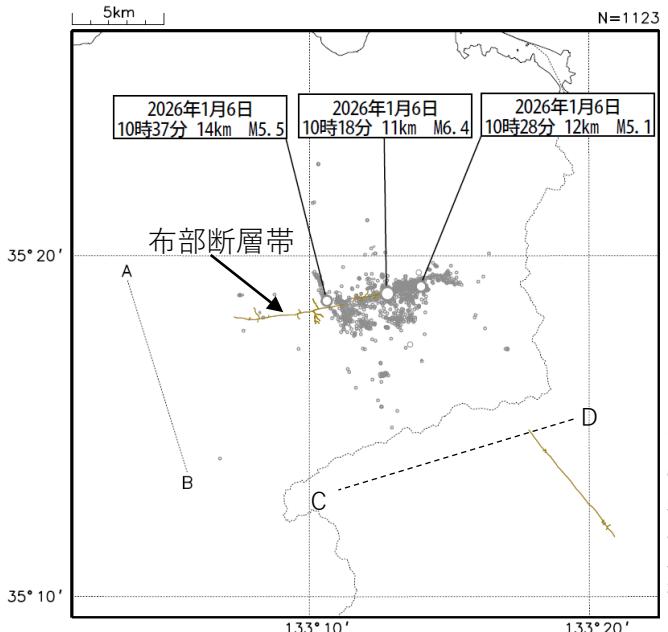
●---[F5:最終解] ●---[R5:速報解]

1月6日 島根県東部の地震

上図：一元化震源の震央分布図(2026年1月1日～20日、M \geq 1.0、深さ0-20km)
下図：一元化震源の断面図 (A-B投影)

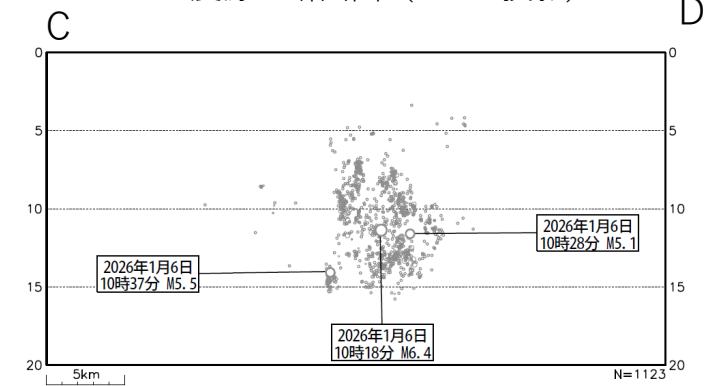


上図：DD震源の震央分布図(2026年1月1日～20日、M \geq 1.0、深さ0-20km)
下図：DD震源の断面図 (A-B投影)



1月1日から20日までのデータを使用し波形相關を用いたDD(Double-Difference)法による震源再決定を行った。

DD震源の断面図 (C-D投影)



図の茶色の線は、「活断層詳細デジタルマップ（東京大学出版会、2002）」による活断層を示す

気象庁作成

島根県東部の地震（1月6日 M6.4）の震源断層モデル（暫定）

基準期間:2025-12-25 09:00:00 / 2026-01-01 08:59:59[F5:最終解]JST
 比較期間:2026-01-10 09:00:00 / 2026-01-17 08:59:59[F5:最終解]JST
 固定局:三隅 (950388)

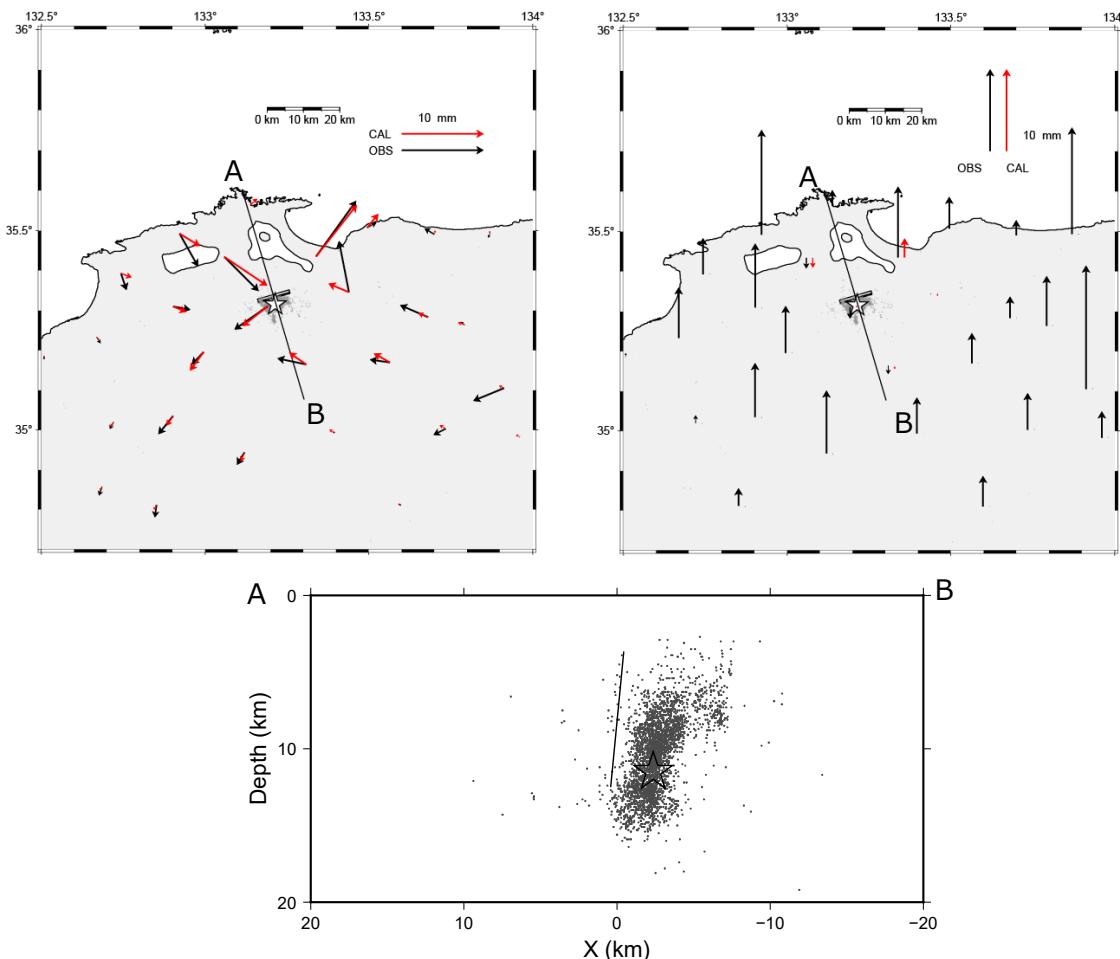


図1 推定された震源断層モデル.

(上) 矩形実線は震源断層モデルを地表に投影した位置で、太い実線が断層上端。矢印は観測値（黒）及び計算値（赤）。

(下) 傾斜方向(A-B)に射影した断層面（太線）及び震源分布（点）。

☆印は震央、点は本震発生（1月6日10時18分）から1月10日24時までに発生した震源（気象庁一元化震源を使用）。

表1 推定された震源断層モデルパラメータ

緯度 [°]	経度 [°]	上端深さ [km]	長さ [km]	幅 [km]	走向 [°]	傾斜 [°]	すべり角 [°]	すべり量 [m]	M_w
35.344 (0.02)	133.259 (0.01)	3.6 (1.4)	9.1 (1.2)	8.9 (1.0)	253.5 (2.9)	84.4 (5.3)	172.7 (8.3)	0.19 (0.03)	5.71 (0.05)

- VR=60.0%
- マルコフ連鎖モンテカルロ (MCMC) 法を用いてモデルパラメータを推定した。
- 位置は断層の左上端を示す。括弧内は誤差 (1σ) を示す。
- M_w と断層長さ・断層幅の関係をスケーリング則 (Thingbaijam et al. 2017) で拘束。
- M_w の計算においては、剛性率を 30 GPa と仮定。

島根県東部の地震（長期評価）

中国地域の活断層の長期評価（第一版）

https://www.jishin.go.jp/main/chousa/16jul_chi_chugoku/gaiyo.pdf より抜粋、一部加筆

中国地域の活断層で発生する地震の長期評価

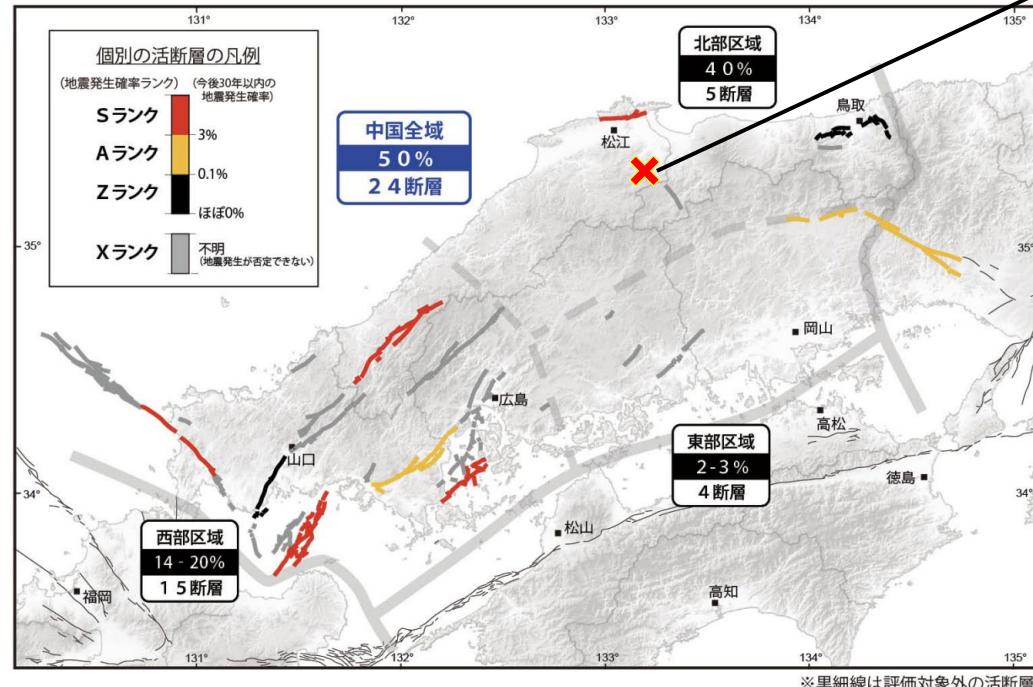
地域内でM6.8以上の地震が30年内に発生する確率

北部区域…活断層は少ないが、地震活動は比較的活発

東部区域…活断層も少なく、地震活動も低調

西部区域…活断層が相対的に多く、活動性も概して高い

2026/1/6 M6.4



4. 活断層で発生する地震の規模・確率

区域	M6.8以上の地震が 30年内に 発生する確率※		活断層	区域内の最大 の地震の規模 (マグニチュード)
	各区域	中国全域		
北部	40%		鹿野-吉岡断層 ほか4断層	M7.2程度
東部	2-3%	50%	山崎断層帯 ほか3断層	M7.7程度
西部	14-20%		菊川断層帯 ほか14断層	M7.8-8.2程度 もしくはそれ以上

※ これらの確率は、区域内の最大規模の地震が発生する確率を表すものではない

https://www.jishin.go.jp/main/chousa/16jul_chi_chugoku/point.pdf より抜粋、一部加筆

2026年1月6日島根県東部の地震(M6.4)に関する地殻変動

2026年1月6日に発生した島根県東部の地震は、山陰地方の地震帶やひずみ集中帶 (Nishimura and Takada, 2018) と呼ばれる地域で発生した地震である。京都大学防災研究所では山陰ひずみ集中帶で、2015-2023年にかけて計22か所でのGNSS連続観測を行っていた。現在稼働中の観測点は鳥取県中部の3観測点のみであるが、これらの観測点と国土地理院GEONET観測点を合わせて得られた地殻変動観測結果を報告する。図1は、2011年東北地方太平洋沖地震の余効変動を補正した各観測点における2015-2023年の平均速度を示す。この速度からOkazaki et al.(2021)による速度・ひずみ速度場推定手法を用いて、最大剪断ひずみ速度分布をカラースケールで表示している。島根県中部から鳥取県を通じて京都府北部まで、東西方向に最大剪断ひずみ速度の大きな場所が帯状に分布しているが、この地域が山陰ひずみ集中帶である。山陰ひずみ集中帶は、対局的には東西方向に伸びる右横ずれの剪断帶であり、今回の地震もひずみ速度が大きな領域で発生し、地震のメカニズム解も剪断帶の変形と調和的である。一方、山陰での剪断帶中の個々の地震や断層は、2000年鳥取県西部地震(M7.3)や2016年鳥取県中部の地震(M6.6)のように、北北西-南南東走向の左横ずれを示すものも多い。

図2は、地震前後の日座標値の平均から計算した地震に伴う水平変位分布、図3は、半無限弾性体中の矩形断層(Okada, 1985)を仮定して、その断層パラメータをMata'ura and Hasegawa(1987)の手法で推定したものである。推定された断層モデルは、東西走向で北側に高角に傾斜する右横ずれ断層のすべりを示す。

謝辞：国土地理院GEONETおよび気象庁一元化震源データを利用しました。

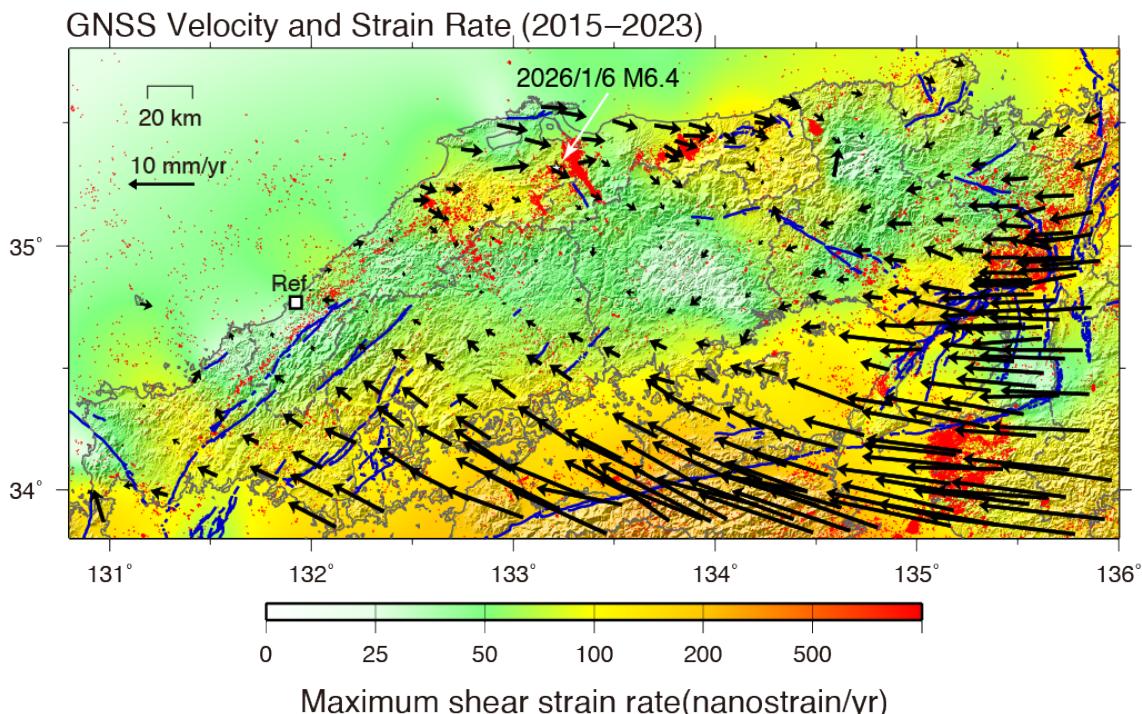


図1 中国地方のGNSS観測点における2015-2023年の平均的な水平変位速度と最大剪断ひずみ速度の分布。図中の青線は主要活断層の地表トレース（地震調査委員会, 2026）を示す。赤点は1998-2023年の気象庁一元化震源（M1.5以上、深さ20km以内）を示す。固定点は、GEONET三隅（950388）観測点（図中にRef.と表示）。

島根県東部の地震（続発事例）

気象庁の報道発表資料

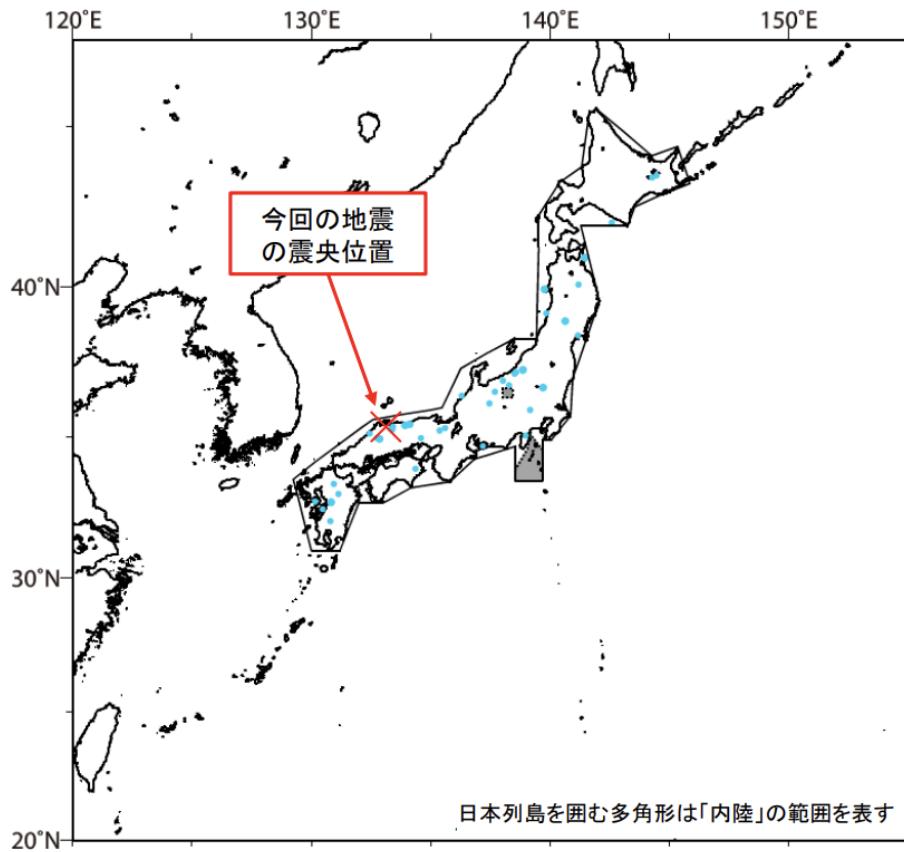
<https://www.jma.go.jp/jma/press/2601/06a/kaisetsu202601061125.pdf> より抜粋

震源周辺における規模の近い地震の続発事例について

(参考資料)

大きな地震発生後に規模の近い地震が続発した過去の事例 (内陸地殻内)

1923年～2016年6月、内陸で発生した深さ0～30km、マグニチュード5.0以上、
規模の差が0.5以内もしくは同規模以上の地震が発生した地震を●で表示



規模が近い地震が続発した過去の事例は、地震調査研究推進本部地震調査委員会
「大地震後の地震活動の見通しに関する情報のあり方」報告書による。

■日本全国での過去の事例

内陸の浅い場所で発生した大きな地震の場合、過去には規模が近い地震が続発した事例があります（左図の●及び灰色の領域）。また、まれに、発生した大きな地震よりも、より規模の大きな地震が発生した事例もあります（563事例中、35事例で全体の6%）。

■今回の地震の周辺における過去の事例

今回の地震の周辺では、1990年に鳥取県西部で発生したM5.1の地震の1分後にM4.8の地震が、2.3日後にM5.2の地震が、10.4日後にM5.1の地震が発生した事例があります。

四国西部の深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

2025年12月31日から2026年1月8日にかけて、四国西部で深部低周波地震（微動）を観測した。

深部低周波地震（微動）活動とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ・傾斜計で地殻変動を観測している。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

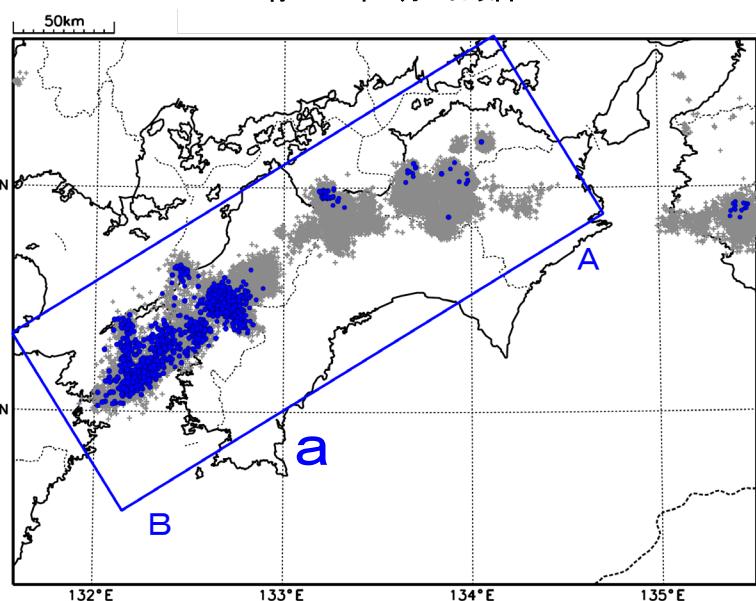
深部低周波地震(微動)活動

震央分布図(2020年1月1日～2026年1月16日、

深さ0～60km、Mすべて)

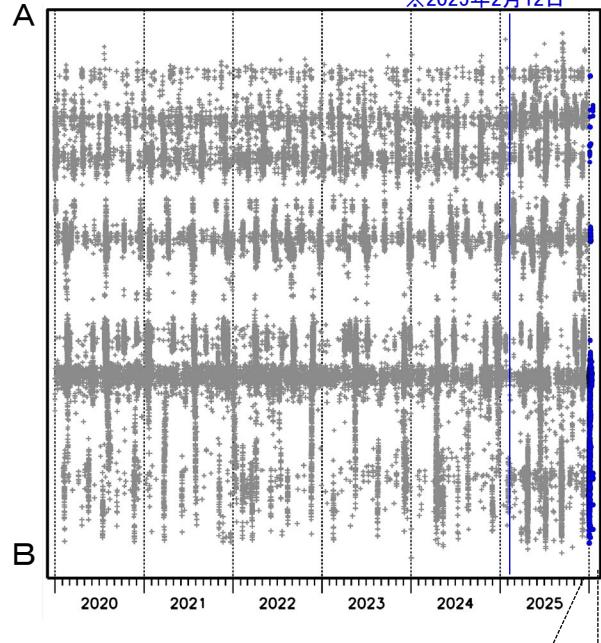
灰:2020年1月1日～2025年12月30日、

青:2025年12月31日以降

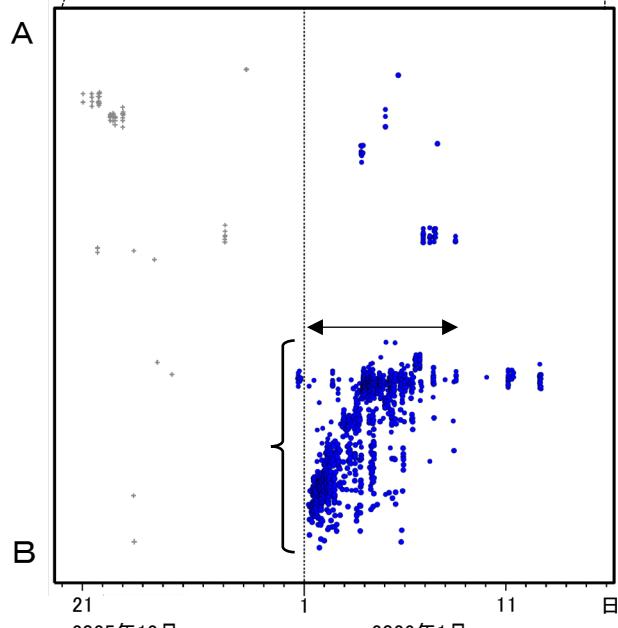


震央分布図の領域a内の時空間分布図(A-B投影)

※2025年2月12日



2025年12月20日～2026年1月16日

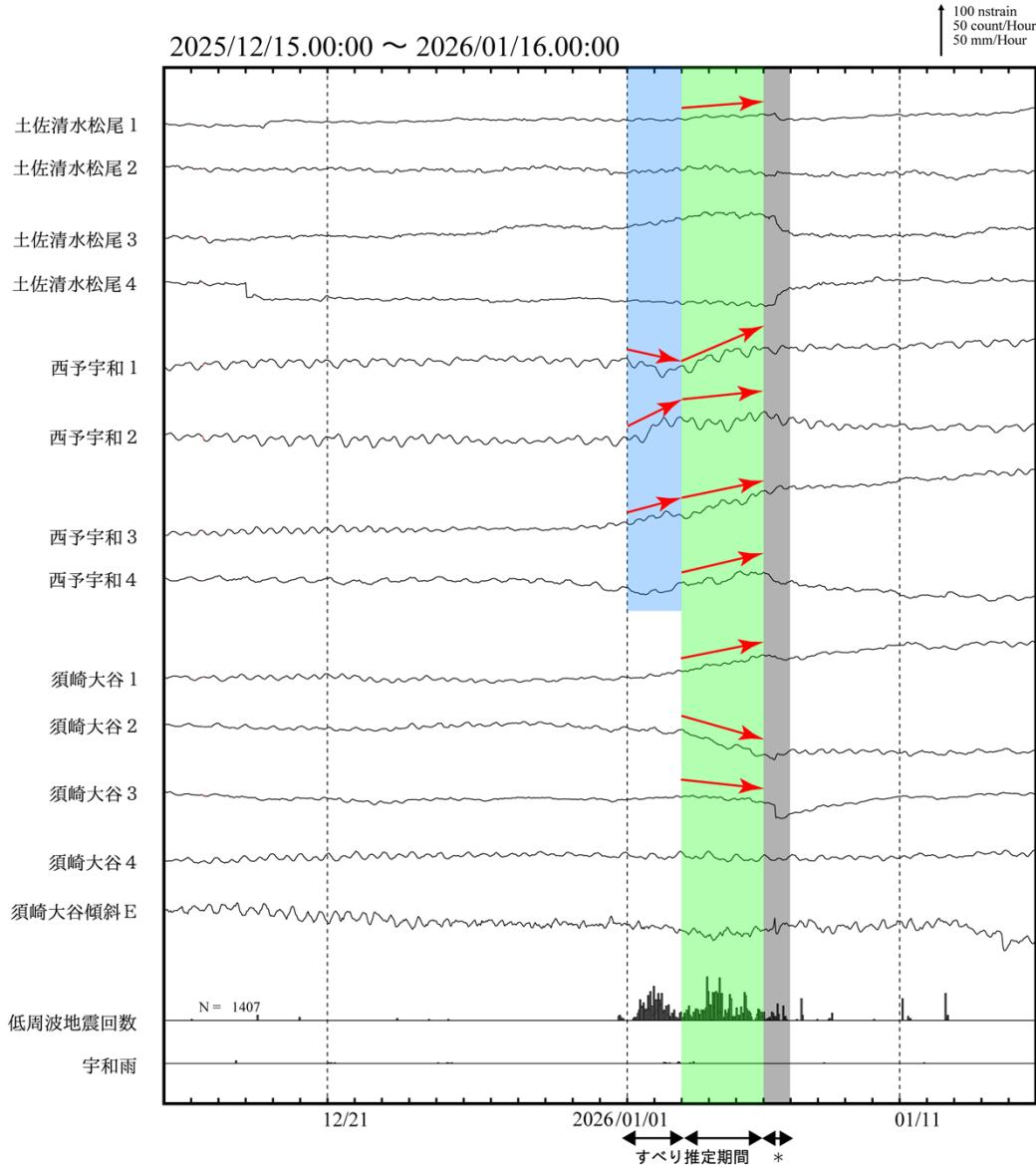


※2025年2月12日から、深部低周波地震(微動)の検知手法の改善により、
それ以前と比較して検知能力が変わっている。

気象庁作成

四国西部で観測した短期的ゆっくりすべり(1月1日～5日)

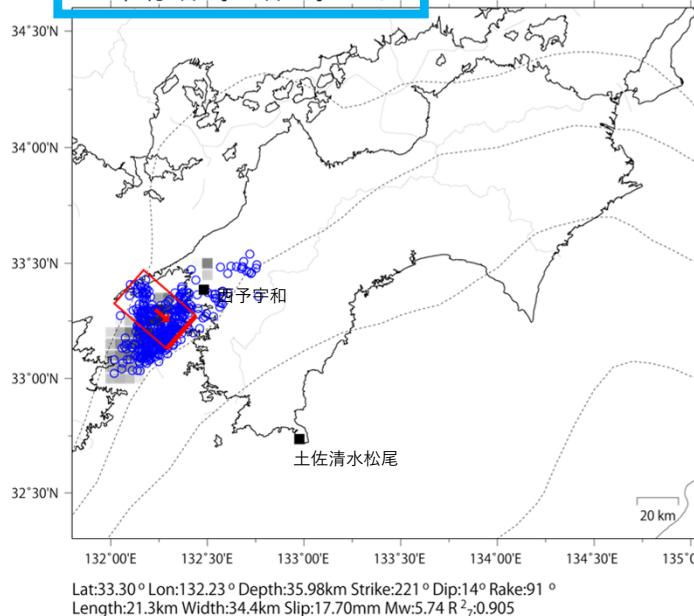
愛媛県から高知県で観測されたひずみ・傾斜変化



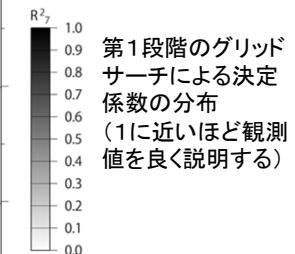
土佐清水松尾、西予宇和及び須崎大谷は産業技術総合研究所のひずみ・傾斜計である。解析に使用したチャネルについては背景色を塗り、そのうち有意な変化が見られたチャネルに赤矢印を描画している。

*の期間に地震(2026/1/6 島根県東部)の影響による波形の変化が見られる。

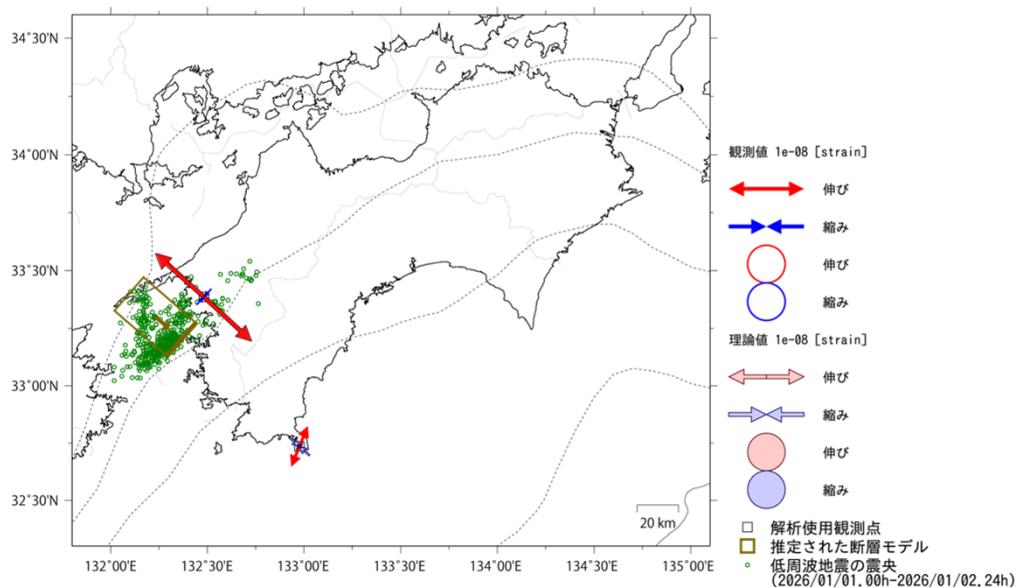
2026年1月1日0時～2日24時 Mw5.7



参考



■ 解析使用観測点
■ 推定された断層モデル
○ 低周波地震の震央
(2026/01/01.00h-2026/01/02.24h)

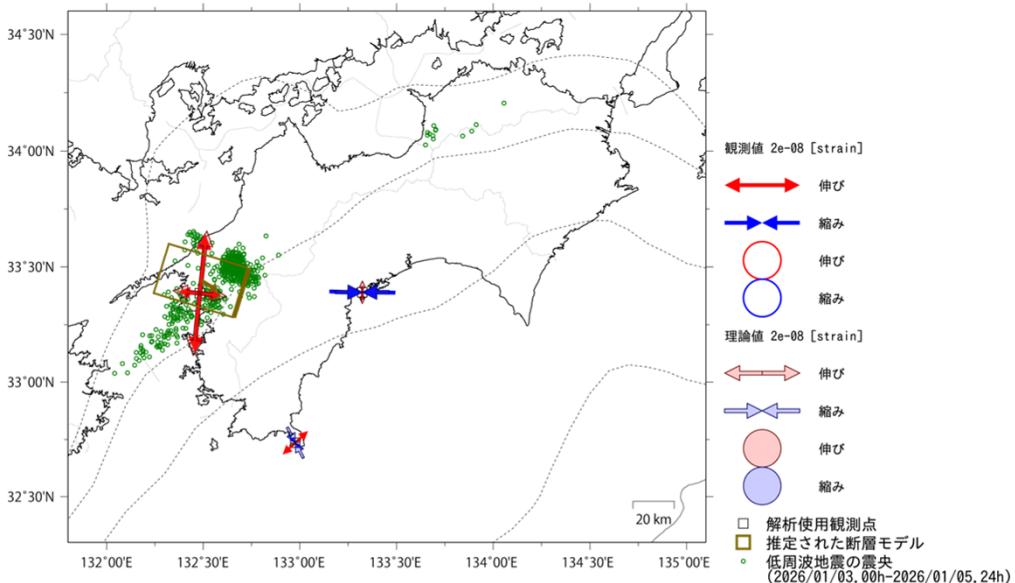
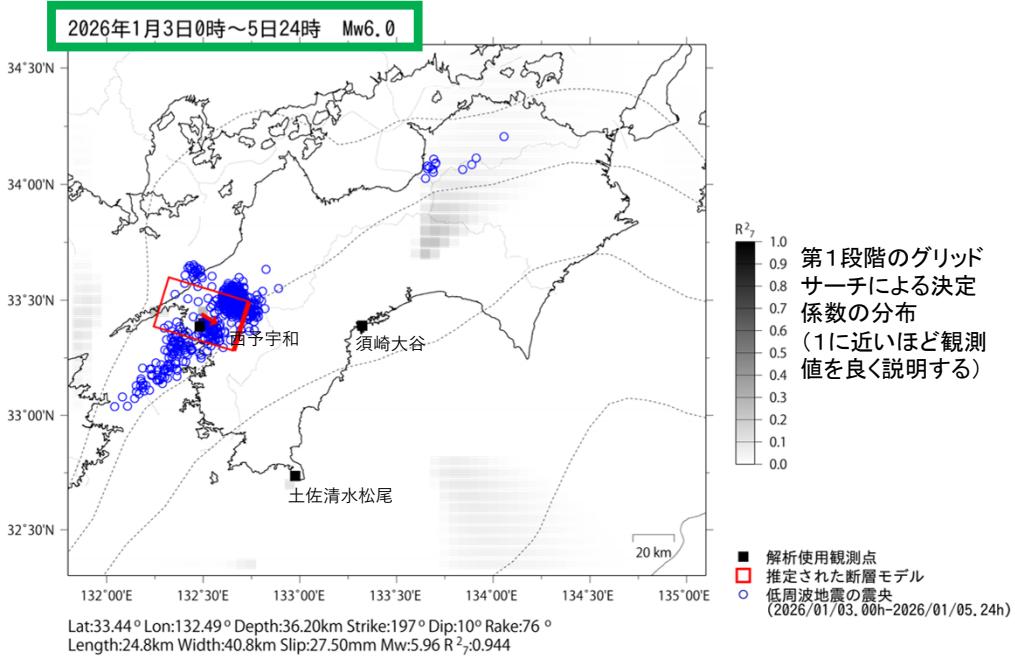


左図に示す観測点での変化量をもとにすべり推定を行ったところ、図の場所にゆっくりすべりを示す断層モデルが求まった。

断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。

- ・断層サイズを20km × 20kmに固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。
- ・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

四国西部で観測した短期的ゆっくりすべり(1月1日～5日)

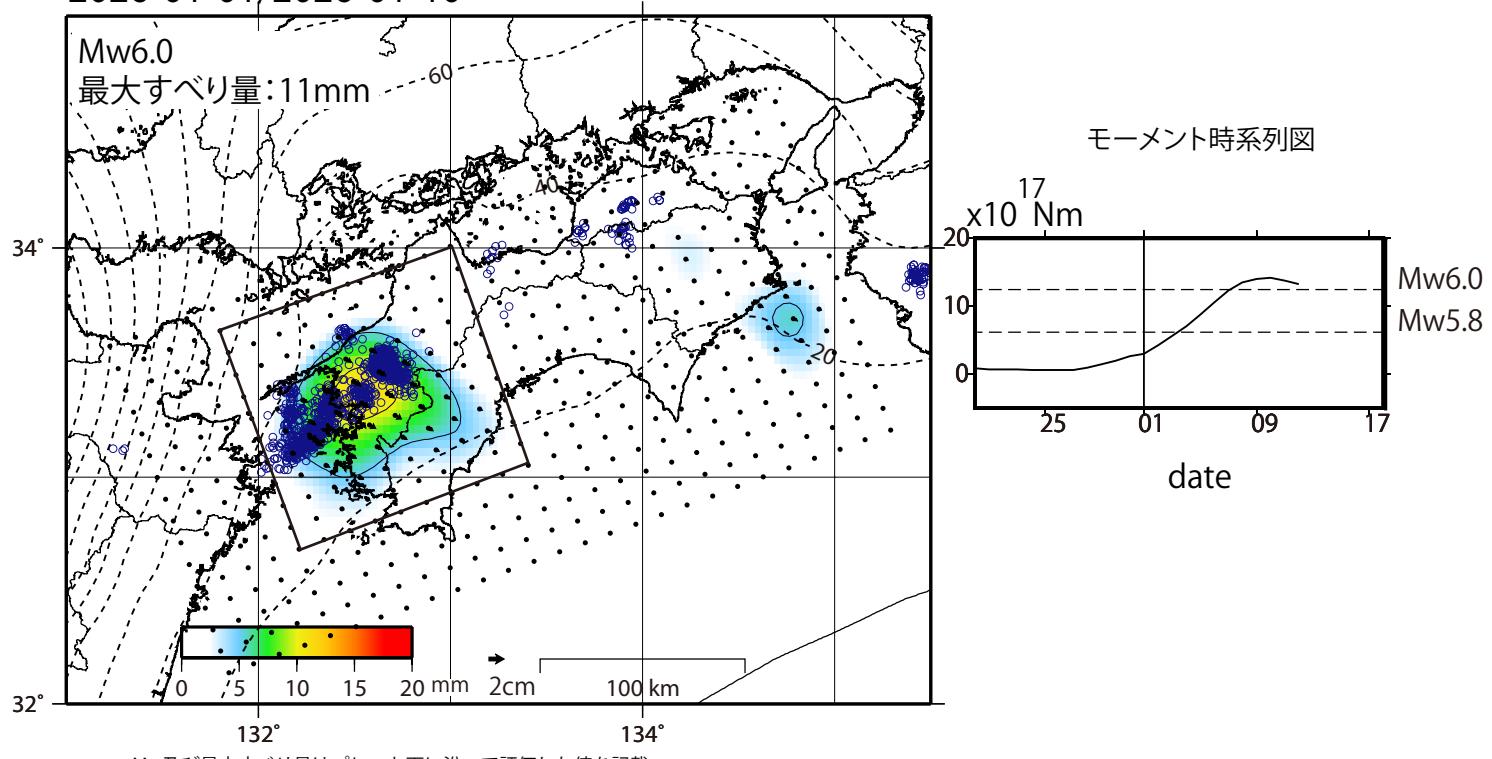


前頁に示す観測点での変化量をもとにすべり推定を行ったところ、図の場所にゆっくりすべりを示す断層モデルが求まった。

断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。
 ・断層サイズを20km × 20kmに固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。
 ・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

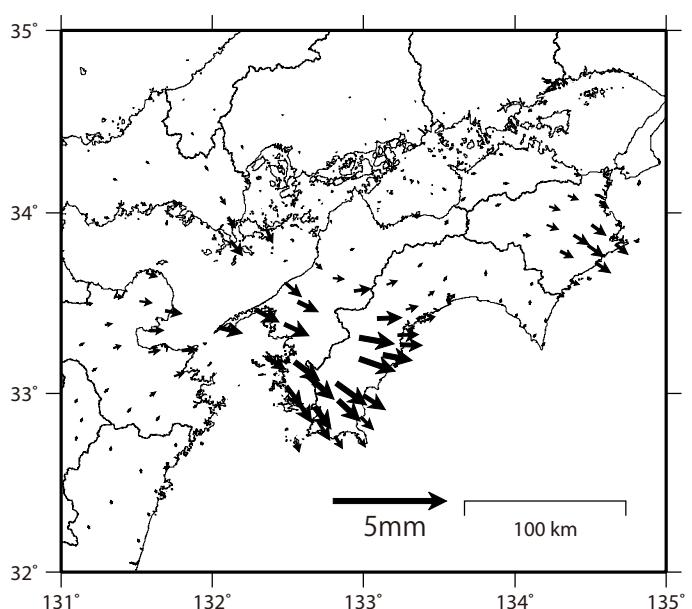
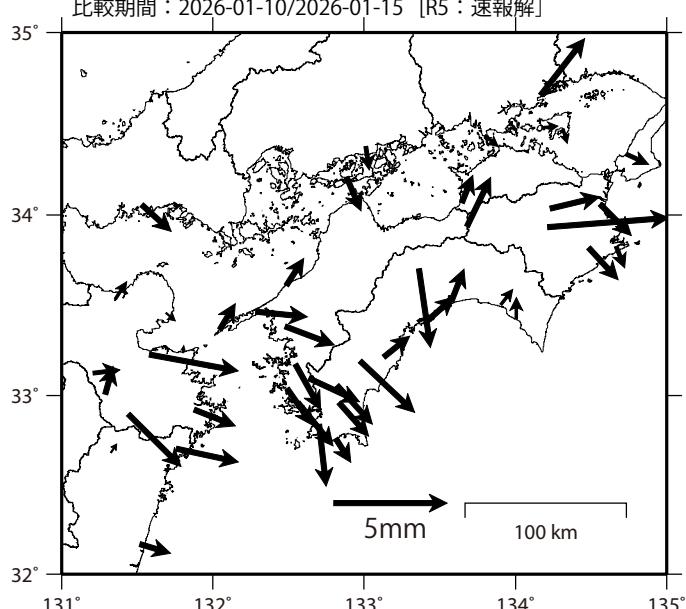
GNSSデータから推定された
四国西部の深部低周波地震(微動)と同期したゆっくりすべり(暫定)

2026-01-01/2026-01-10



観測

計算



解析に使用した全観測点の座標時系列から、共通に含まれる時間変化成分は取り除いている。

また、基準期間と比較期間の間のオフセットをRamp関数で推定し、東西、南北のAICを合わせたAICで有意でない観測点は除外している。

解析に使用した観測点の範囲: 概ね北緯32~34.6°、東経131~134.8°

使用データ: GEONETによる日々の座標値(F5解、R5解)

F5解(2025-12-01/2025-12-31)+R5解(2026-01-01/2026-01-15) *電子基準点の保守等による変動は補正済み

トレンド期間: 2017-01-01/2018-01-01 (年周・半年周は2017-01-01/2026-01-15のデータで補正)

モーメント計算範囲: 図の黒枠内側

黒破線: フィリピン海プレートの上面の等深線(Hirose et al., 2008)

すべり方向: プレートの沈み込み方向に拘束

青丸: 低周波地震(気象庁一元化震源) (期間: 2026-01-01/01-15)

センター間隔: 5mm

固定局: 三隅

四国の深部低周波微動活動状況（2026年1月）

- 1月1～7日頃に豊後水道から四国西部において、活発な微動活動。
- 1月21～28日頃に四国中部から東部において、活発な微動活動。

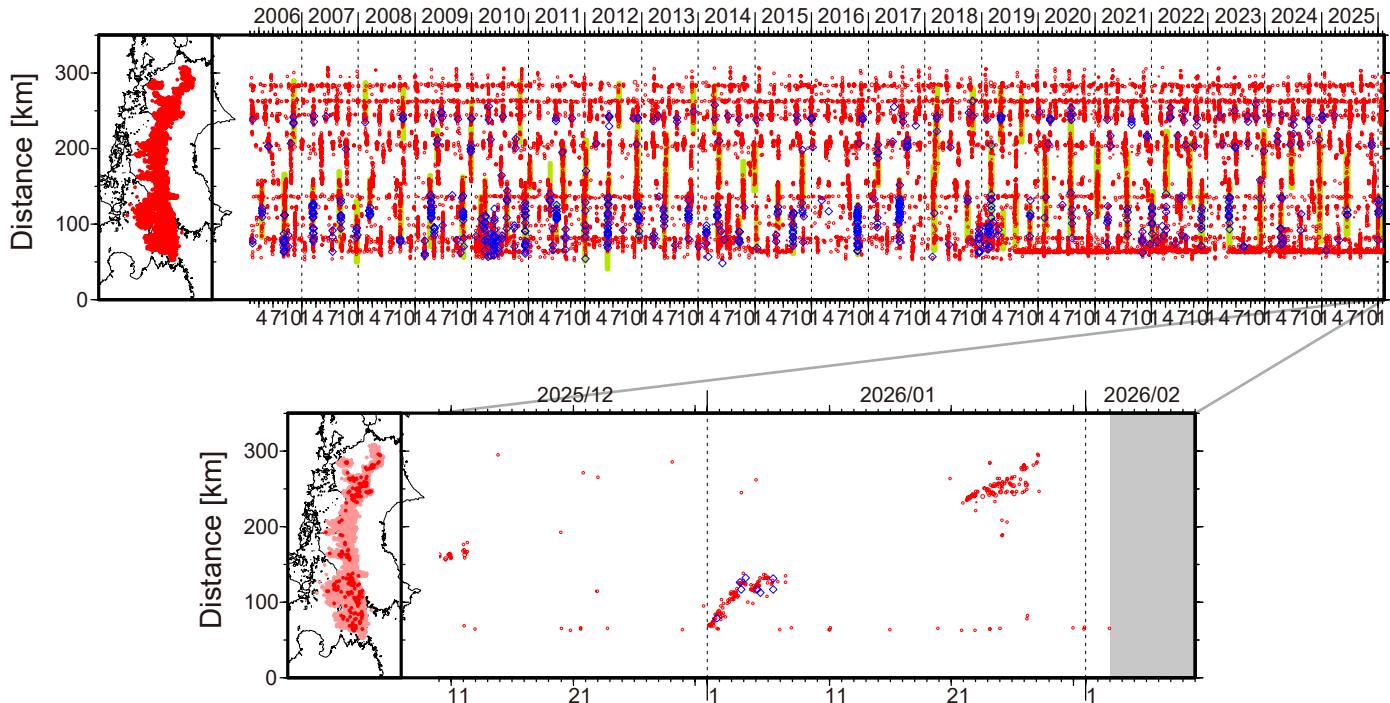


図1. 四国における2006年2月～2026年2月2日までの深部低周波微動の時空間分布(上図)。赤丸はエンベロープ相関・振幅ハイブリッド法 (Maeda and Obara, 2009) およびクラスタ処理 (Obara et al., 2010) によって1時間毎に自動処理された微動分布の重心である。青菱形は周期20秒に卓越する超低周波地震 (Ito et al., 2007) である。黄緑色太線は、これまでに検出された短期的スロースリップイベント (SSE) を示す。下図は2026年1月を中心とした期間の拡大図である。1月1～7日頃には豊後水道から愛媛県西部において、活発な微動活動がみられた。この活動は豊後水道で開始し、4日頃まで東方向への活動域の移動がみられた。この活動に際し、傾斜変動から短期的 SSE の断層モデルも推定されている。1月21～28日頃には愛媛県東部から徳島県中部において、活発な微動活動がみられた。この活動は愛媛・徳島県境付近で開始したのち、主に東方向への活動域の拡大がみられた。

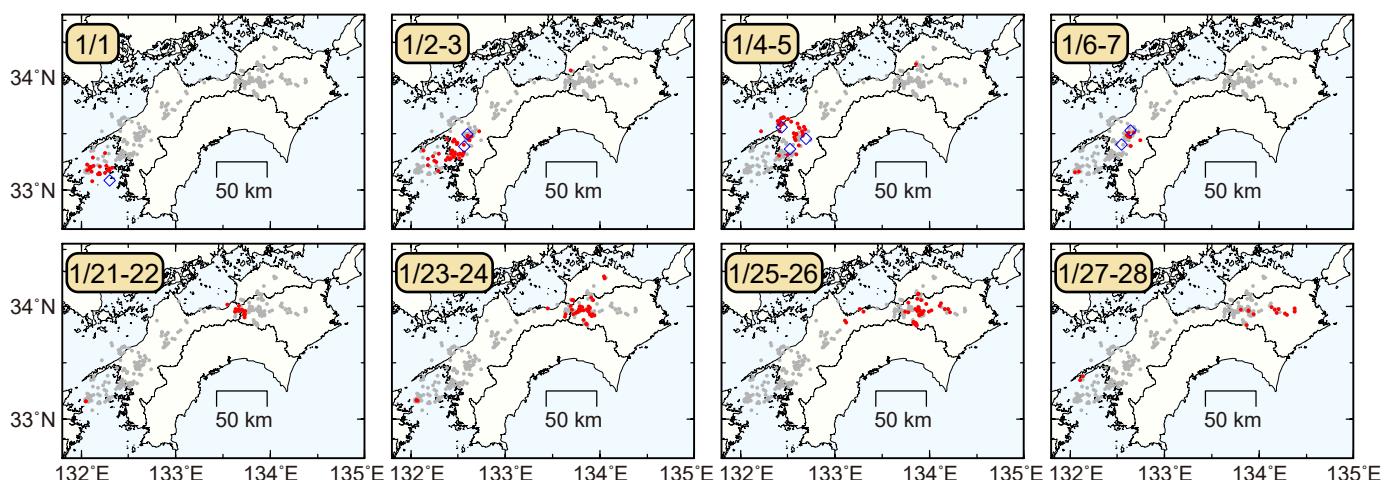


図2. 各期間に発生した微動(赤丸)および深部超低周波地震(青菱形)の分布。
赤丸は、図1の拡大図で示した期間における微動分布を示す。

四国西部の短期的スロースリップ活動状況（2026年1月）

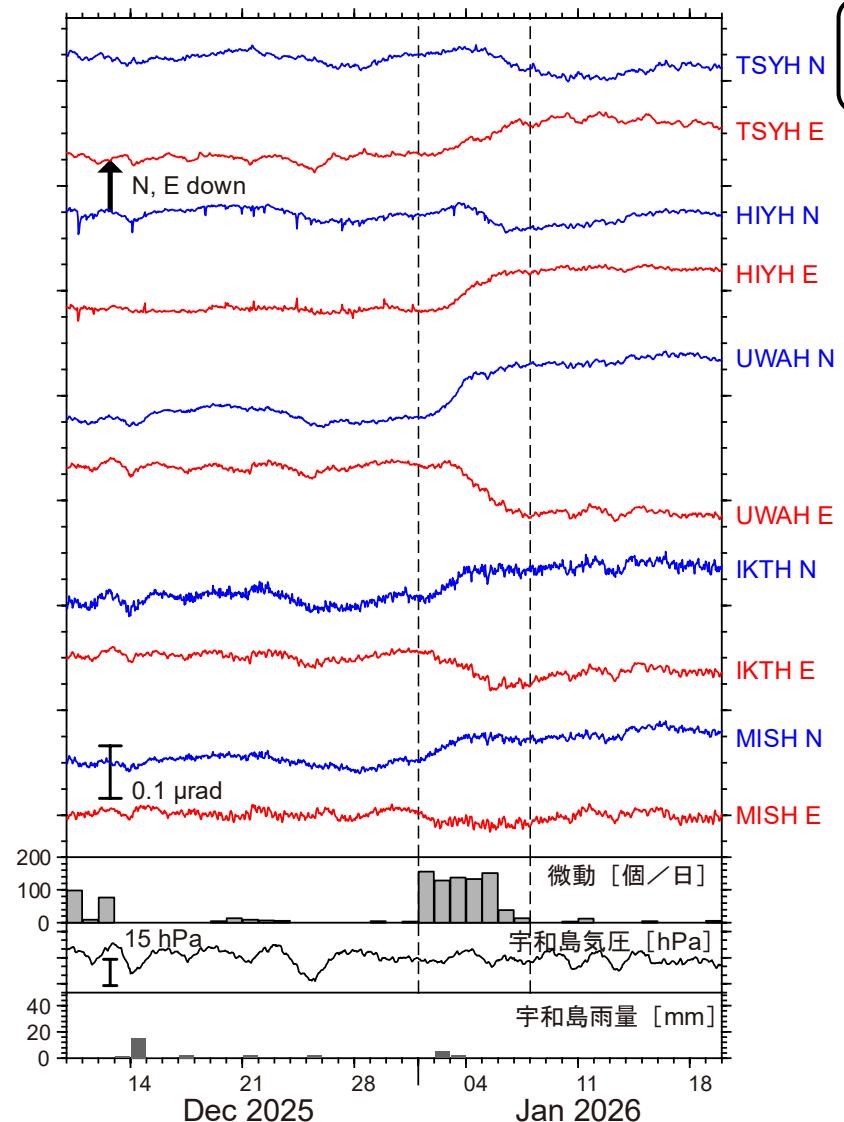


図1：2025年12月10日～2026年1月19日の傾斜時系列。上方への変化が北・東下がりの傾斜変動を表し、BAYTAP-Gにより潮汐・気圧応答成分を除去した。1月1日～7日の傾斜変化ベクトルを図2に示す。四国西部での微動活動度・気象庁宇和島観測点の気圧・雨量を合わせて示す。

- ・四国西部を活動域とするスロースリップイベント ($M_W 5.9$)
- ・2025年6月 ($M_W 6.3$) 以来約6ヶ月ぶり

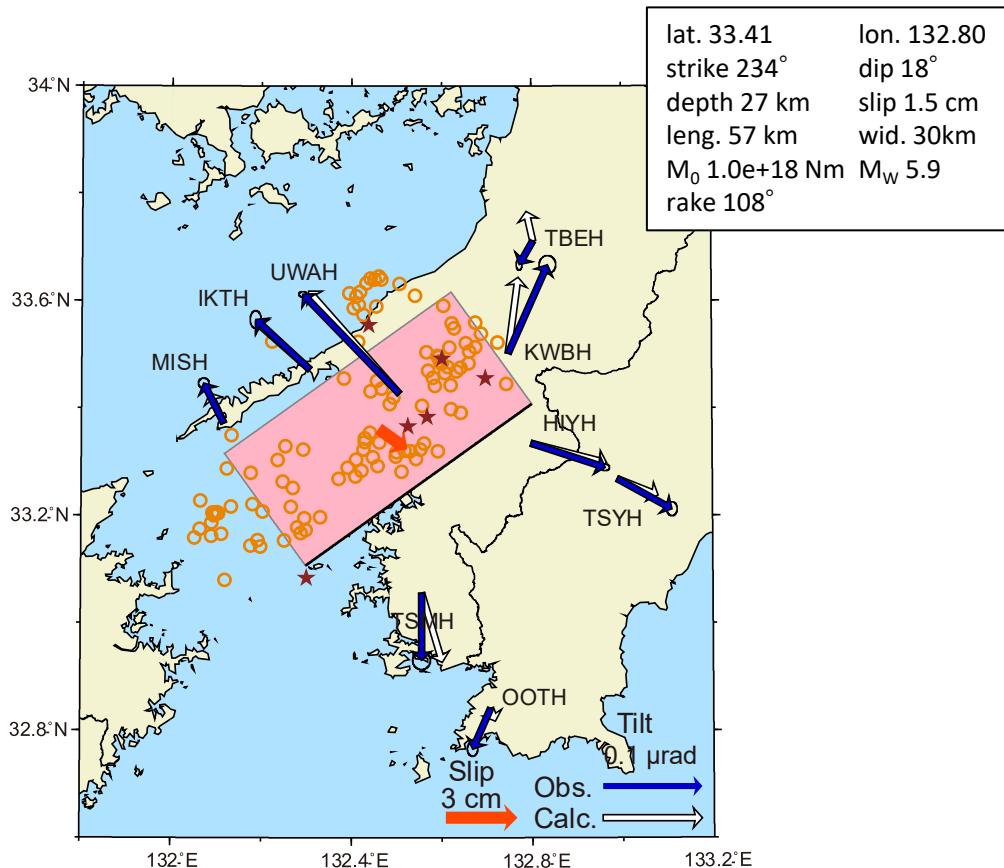


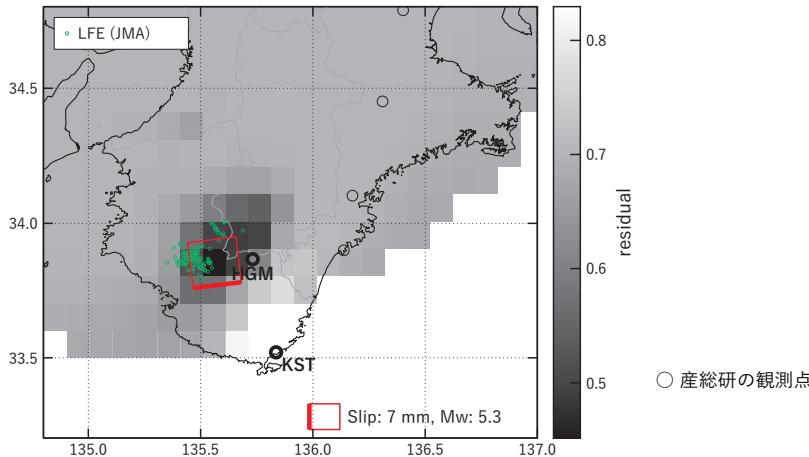
図2：1月1日～7日に観測された傾斜変化ベクトル（青矢印）、推定されたスロースリップイベントの断層モデル（赤矩形・矢印）、モデルから計算される傾斜変化ベクトル（白抜き矢印）を示す。1時間毎の微動エネルギーの重心位置（橙丸）、深部超低周波地震（茶星印）も合わせて示す。すべり角はプレート相対運動方向に固定している。

謝辞

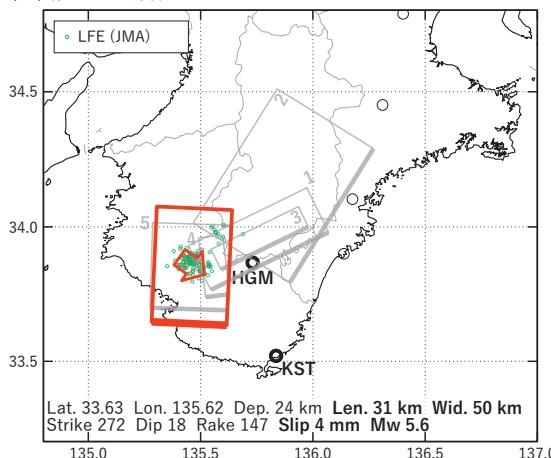
気象庁のWebページで公開されている気象データを使用させていただきました。記して感謝いたします。

[A] 2026/01/26-31

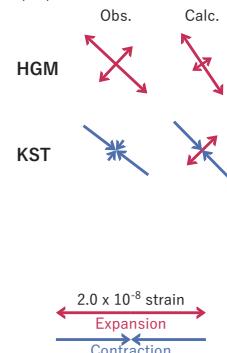
(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪



) を説明する断層モデル。

[A] (a) プレート境界面に沿って 20×20 km の矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小にするすべり量を選んだときの残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。

(b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面（赤色矩形）と断層パラメータ。灰色矩形は最近の歪変化

1: 2025/04/27-28 (Mw 5.8), 2: 2025/04/29-30AM (Mw 5.8), 3: 2025/08/29-31AM (Mw 5.5),

4: 2025/12/01-02 (Mw 5.2), 5: 2025/12/03 (Mw 5.4)

(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

2026/01/26-31

図3

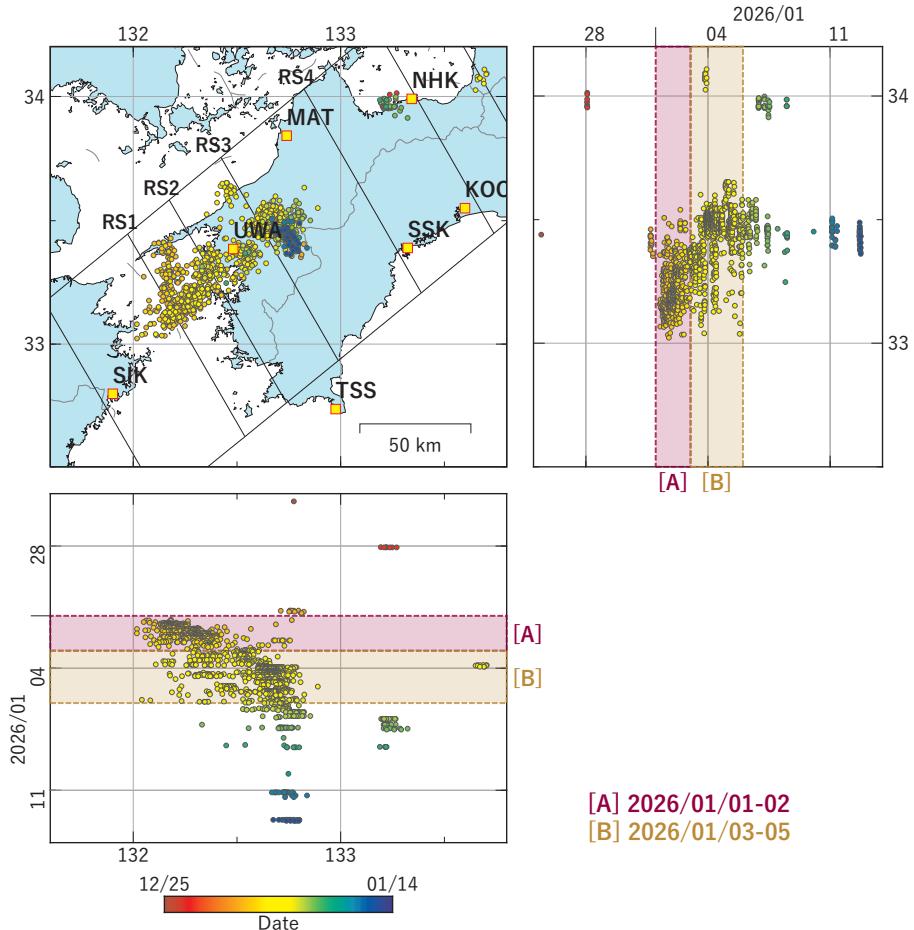


図4 四国地域における深部低周波地震の時空間分布図（2025/12/25 00:00:00–2026/01/14 00:00:00 (JST)）。気象庁カタログによる。

（観測点） KOC: 高知五台山, SSK: 須崎大谷, TSS: 土佐清水松尾, UWA: 西予宇和, MAT: 松山南江戸, NHK: 新居浜黒島, SIK: 佐伯蒲江

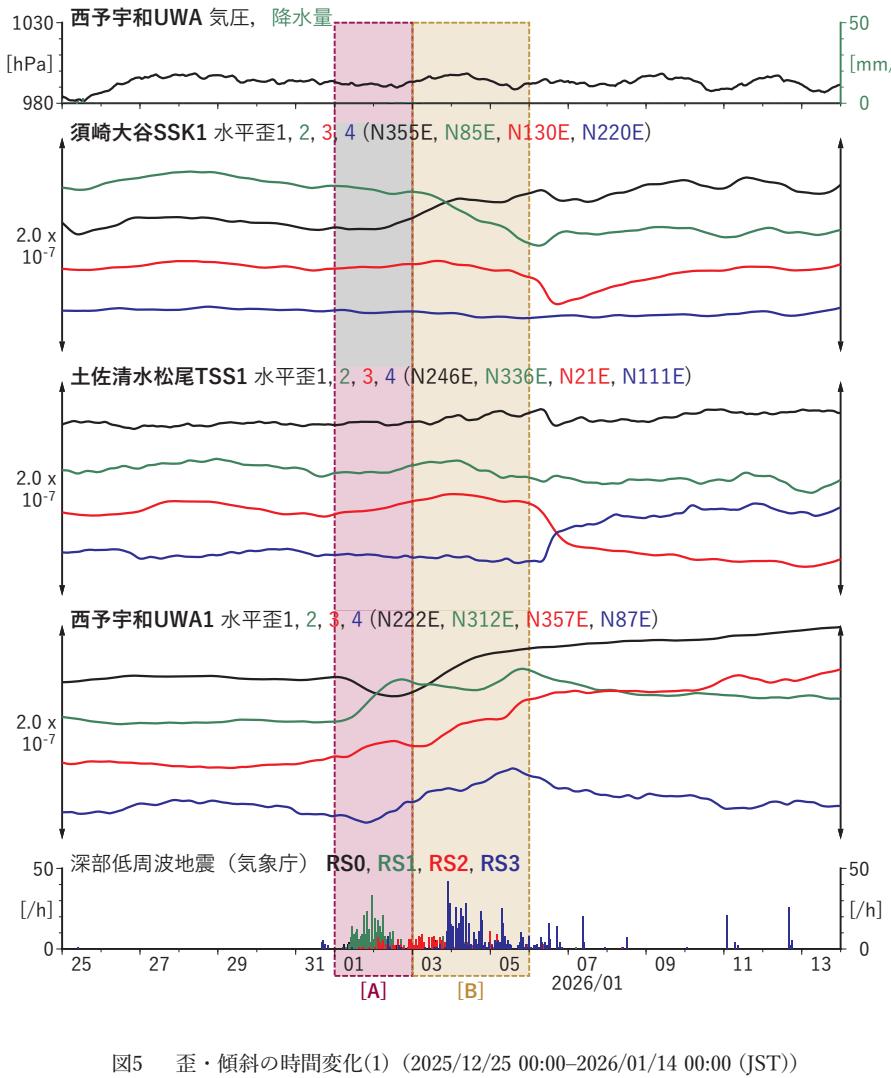


図5 歪・傾斜の時間変化(1) (2025/12/25 00:00-2026/01/14 00:00 (JST))

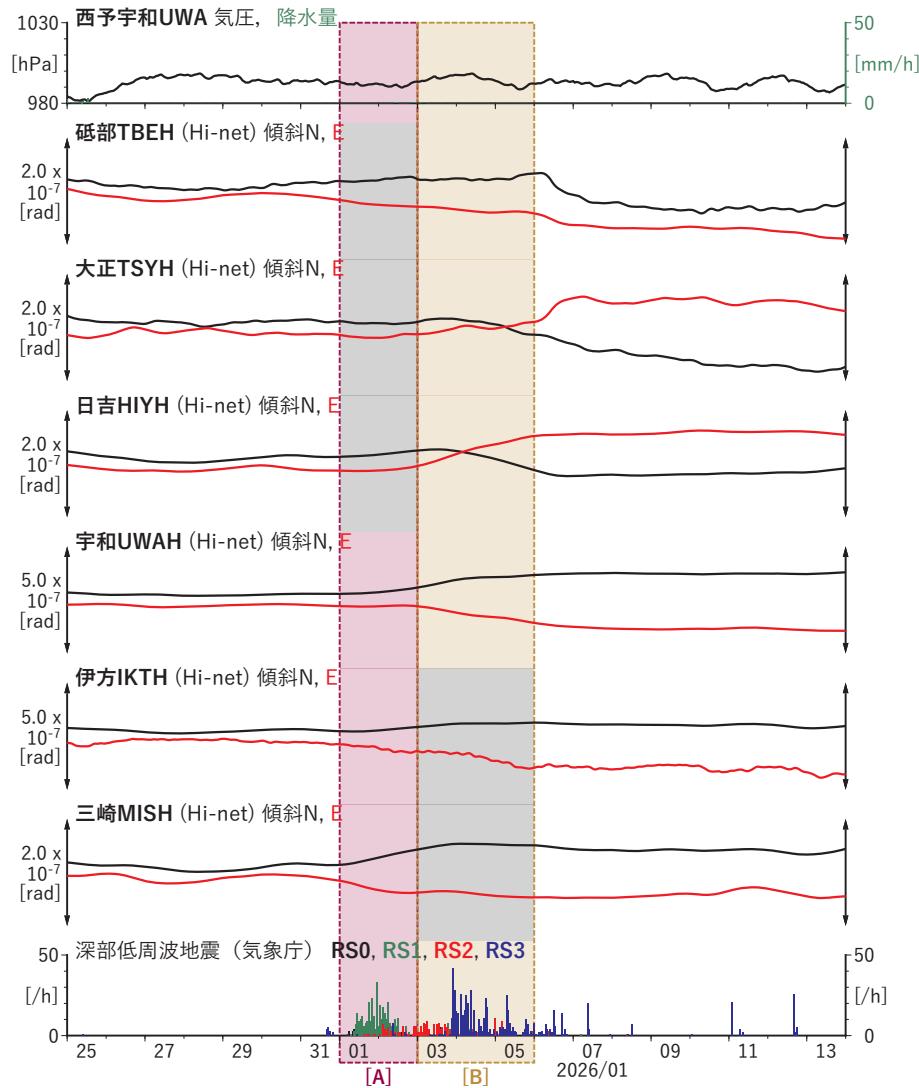
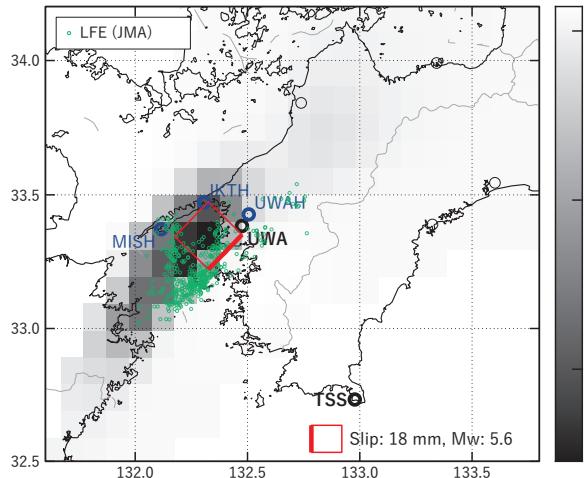


図5 歪・傾斜の時間変化(2) (2025/12/25 00:00-2026/01/14 00:00 (JST))

[A] 2026/01/01-02

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



(b1) 推定した断層モデル

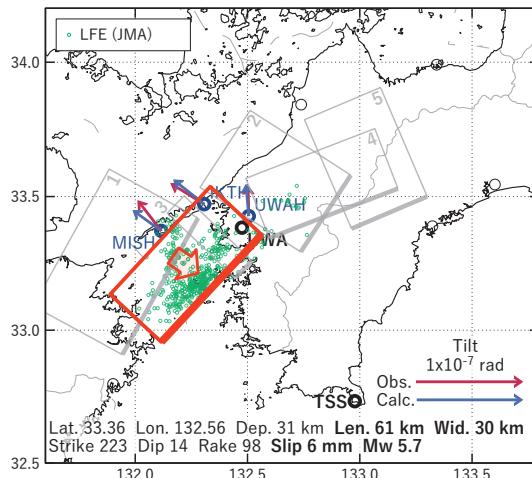


図6 2026/01/01-02の歪・傾斜変化（図5[A]）を説明する断層モデル。

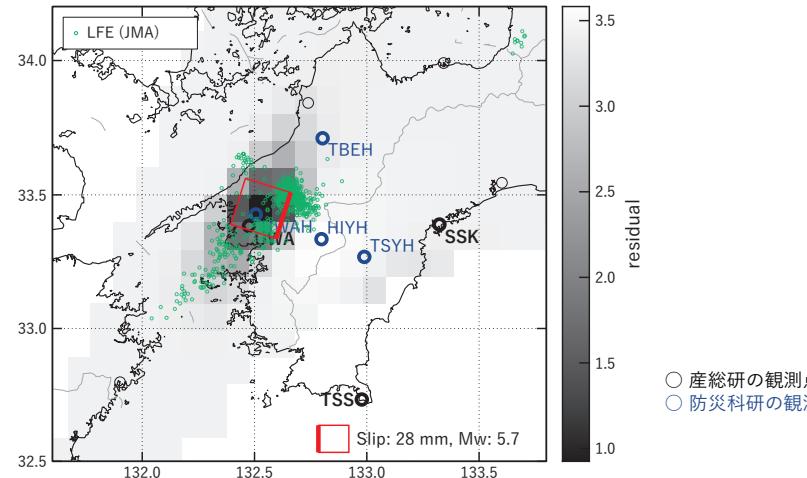
- (a) ブレート境界面に沿って 20×20 kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小にするすべり量を選んだときの残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。
- (b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面（赤色矩形）と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。

1: 2025/02/02PM-04AM (Mw 5.6), 2: 2025/06/10-14 (Mw 6.0), 3: 2025/10/22-25 (Mw 5.6), 4: 2025/12/03-06 (Mw 5.5),
5: 2025/12/07-12 (Mw 5.7)

(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

[B] 2026/01/03-05

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



(b1) 推定した断層モデル

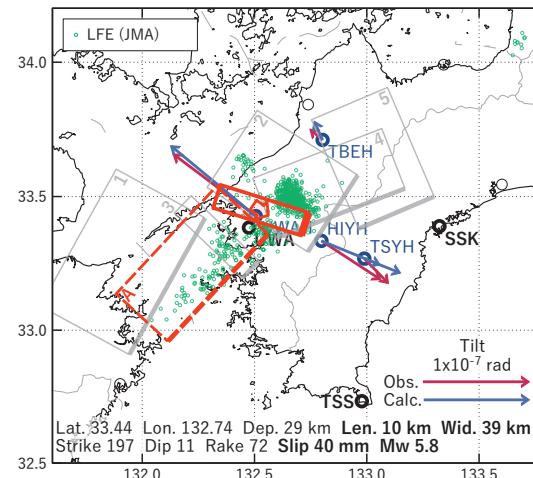


図7 2026/01/03-05の歪・傾斜変化（図5[B]）を説明する断層モデル。

- (a) ブレート境界面に沿って 20×20 kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小にするすべり量を選んだときの残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。
- (b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面（赤色矩形）と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。赤色破線矩形は今回の一連のイベント。

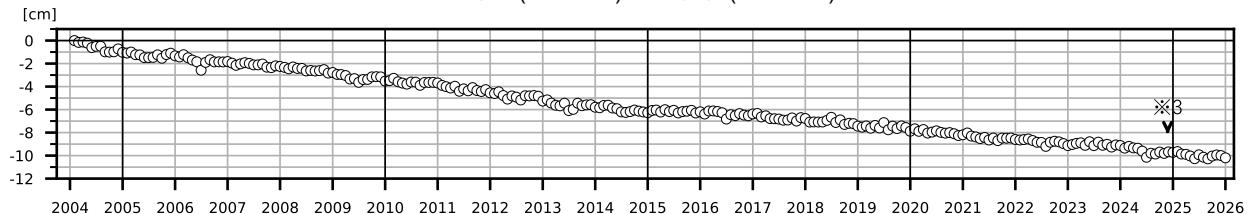
1: 2025/02/02PM-04AM (Mw 5.6), 2: 2025/06/10-14 (Mw 6.0), 3: 2025/10/22-25 (Mw 5.6), 4: 2025/12/03-06 (Mw 5.5),
5: 2025/12/07-12 (Mw 5.7), A: 2026/01/01-02 (Mw 5.7)

(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

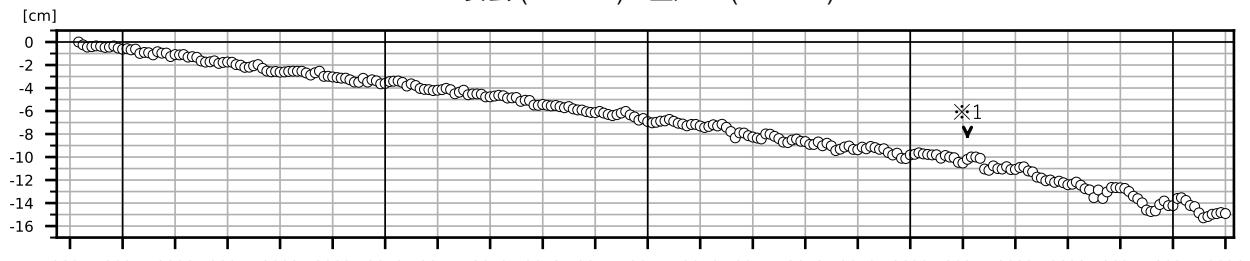
紀伊半島及び室戸岬周辺 電子基準点の上下変動

潮岬周辺及び室戸岬周辺の長期的な沈降傾向が続いている。

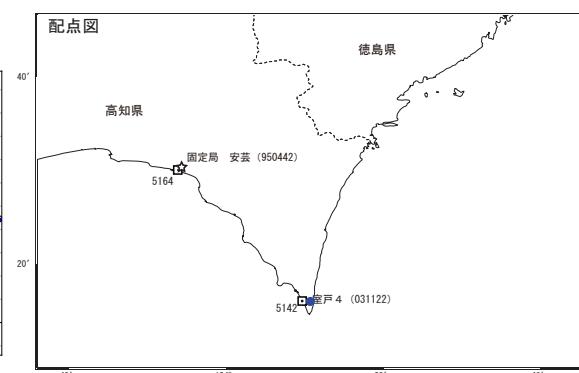
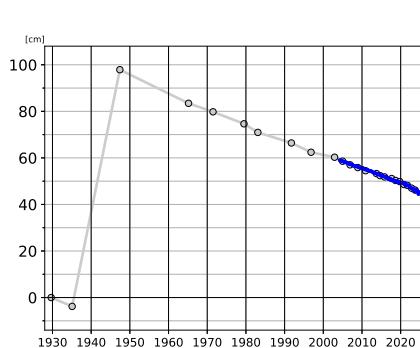
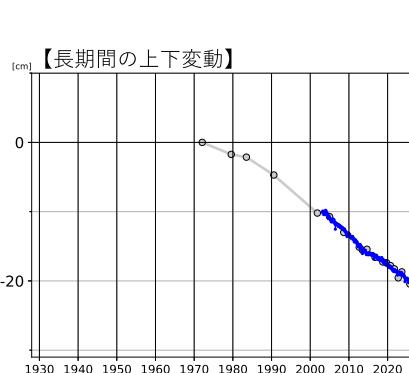
鵜殿 (950316) - P串本 (02P208)



安芸 (950442) - 室戸 4 (031122)



○ : GNSS 連続観測 (GEONET 月平均値)



- GNSS 連続観測のプロット点は、GEONET による日々の座標値 (F5 : 最終解) から計算した値の月平均値である。
(最新のプロット点 : 1月 1日～1月 10日の平均値)
- 灰色のプロットは電子基準点の最寄りの水準点の水準測量結果を示している（固定：J4810、5164）。

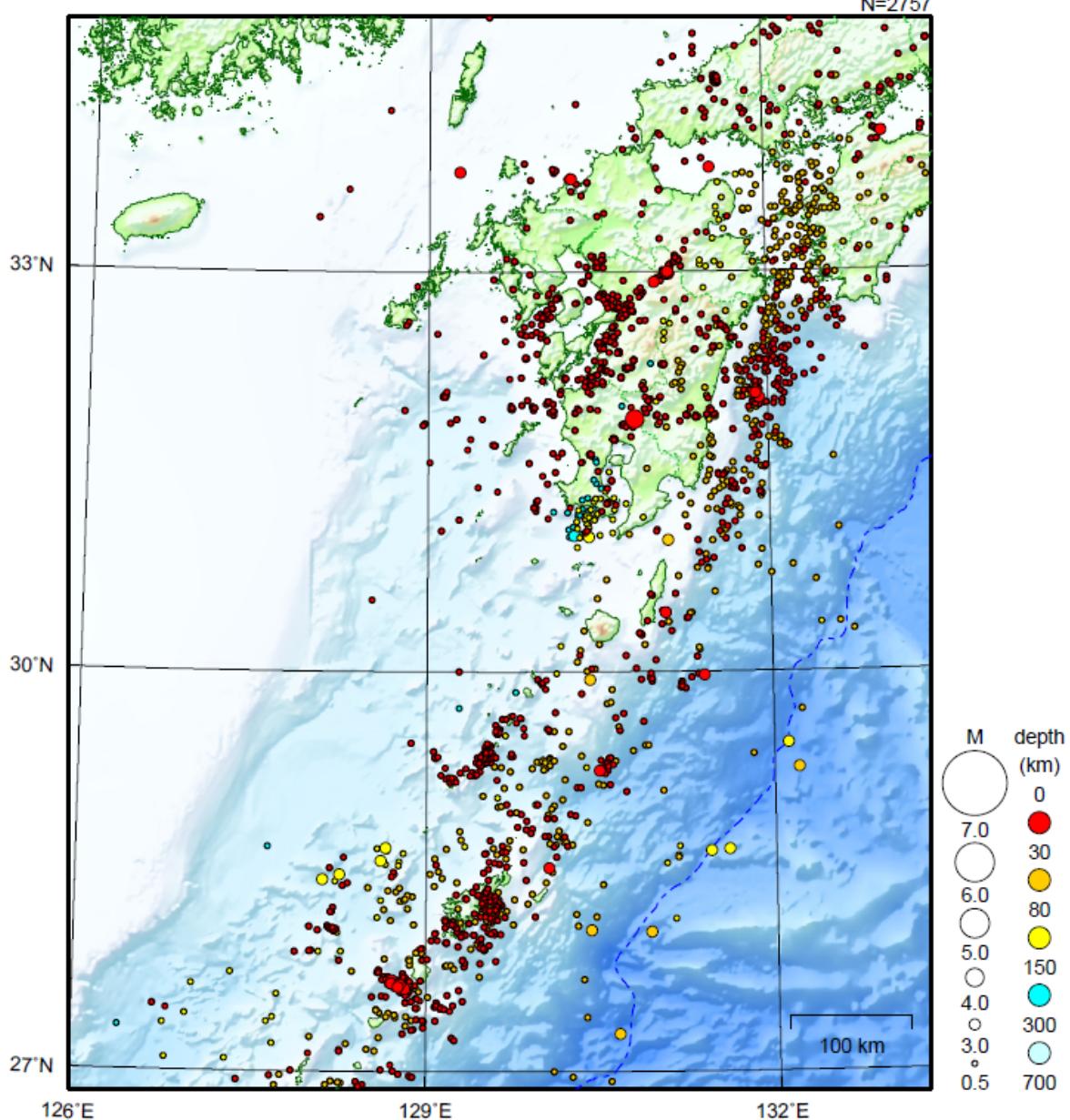
※ 1 2021年2月2日に電子基準点「安芸」のアンテナ更新及びレドーム交換を実施した。

※ 2 2024年11月25日に電子基準点「鵜殿」のアンテナ更新を実施した。

九州地方

2026/01/01 00:00 ~ 2026/01/31 24:00

N=2757



地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOP030 及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02v2 を使用

特に目立った地震活動はなかった。

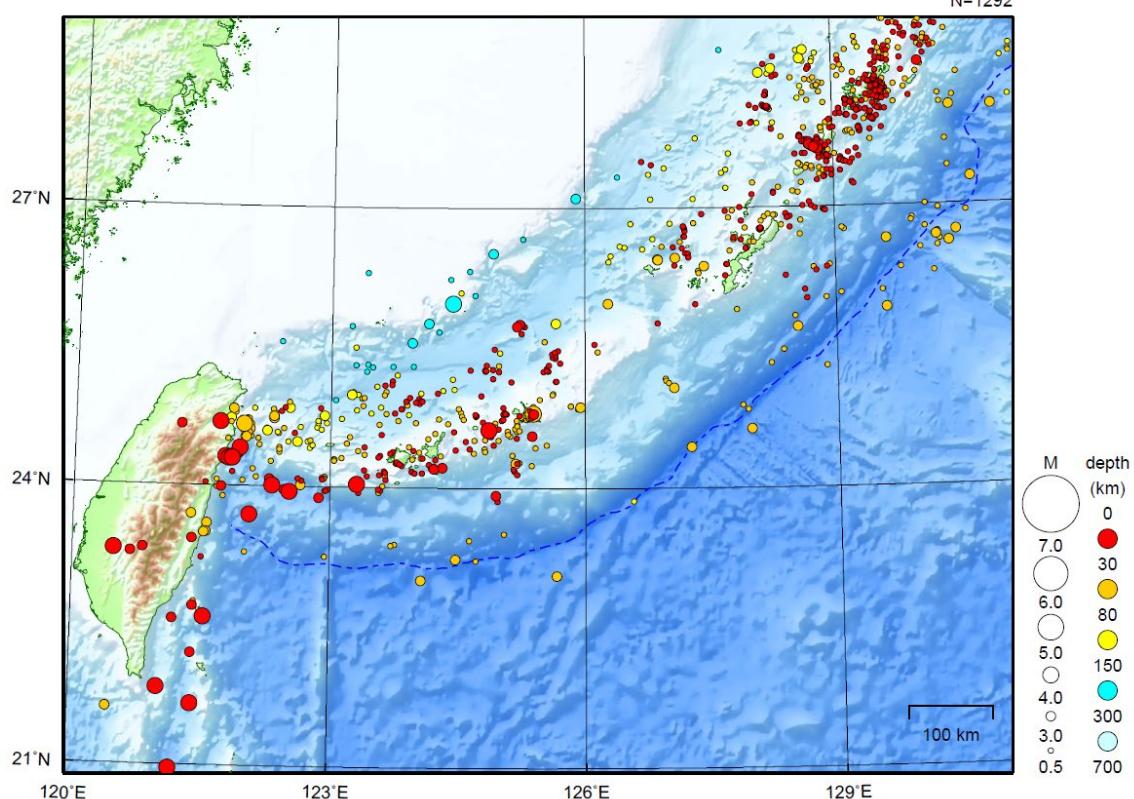
[上述の地震は M6.0 以上または最大震度 4 以上、陸域で M4.5 以上かつ最大震度 3 以上、海域で M5.0 以上かつ最大震度 3 以上、その他、注目すべき活動のいずれかに該当する地震。]

気象庁・文部科学省

沖縄地方

2026/01/01 00:00 ~ 2026/01/31 24:00

N=1292



地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOP030 及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02v2 を使用

特に目立った地震活動はなかった。

[上述の地震は M6.0 以上または最大震度 4 以上、陸域で M4.5 以上かつ最大震度 3 以上、海域で M5.0 以上かつ最大震度 3 以上、その他、注目すべき活動のいずれかに該当する地震。]

気象庁・文部科学省